

靈界物語 第七一卷 山河草木 戌の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第七十一卷』天聲社

1971(昭和46)年04月28日 第二刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～
～
～
～
～
～
～
～
～
～

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 追僧輕迫 つゐそうけいはく

第一章 追劇 つゐげき（一七九〇）

第二章 生臭坊 なまくさばう（一七九一）

第三章 門外漢もんぐわいかん 〔一七九二〕

第四章 琴の綾ことあや 〔一七九三〕

第五章 轉盜てんたう 〔一七九四〕

第六章 達引たつびき 〔一七九五〕

第七章 夢の道ゆめみち 〔一七九六〕

第二篇 迷想癡色めいさうちしき

第八章 無遊怪むいうくわい 〔一七九七〕

第九章 踏違ふみちがひ 〔一七九八〕

第一〇章 荒添あらしひ 〔一七九九〕

第十一章 異志佛いしほとけ 〔一八〇〇〕

第十二章 泥壁どろかべ 〔一八〇一〕

第十三章 詰腹つめばら 〔一八〇二〕

第一四章	障路 <small>しやうろ</small>	〔一八〇三〕
第一五章	紺靈 <small>こんれい</small>	〔一八〇四〕

第三篇 慘嫁僧目さんかそうもく

第一六章	妖魅返 <small>よみがへり</small>	〔一八〇五〕
第一七章	夢現神 <small>むげんしん</small>	〔一八〇六〕
第一八章	金妻 <small>こんさい</small>	〔一八〇七〕
第一九章	角兵衛獅子 <small>かくべゑしし</small>	〔一八〇八〕
第二〇章	困客 <small>こんきやく</small>	〔一八〇九〕

〔 〕

序文 じよぶん

山河草木さんかさうもくの續篇ぞくへんとして、更に十二卷じふにくわんを千山萬水せんざんばんすゐと命名めいめいして口述こうじゆつすることにした
します。大正十四年十一月七日龜岡たいしやうじふよねんじふいちくわつなぬかかめをかにおいて一日間いちにちかんだけ口述こうじゆつし、種々の用務しゆじゆに妨さまた
げられて、今日こんにちまで中止ちゆうしいたしてをりましたが、大正十五年たいしやうじふごねんの節分祭せつぶんさいも數日すうじつの後のち
に迫せまりましたので、一月三十一日ひとつきさんじふいちにち、二月一日にぐわついちじつの二日間ふつかかん口述こうじゆつを續つづけ、やうやく子の
卷まきの口述こうじゆつを終了しうれういたした次第しだいであります。

惟神靈幸倍坐世。
かむながらたまちはへませ

大正十五年二月一日 於月光閣

編者序言 本卷は編輯の都合に依り、山河草木戌の卷（第七十一卷）として出版
する事になりました。

稀代の妖僧玄眞坊は、せつかく掌中の玉と信じてタニグク山の岩窟に連れ込
だダリヤ姫に逃げ出され、シヤカンナの部下を借り受け、八方へ搜索隊を差向け
ながら、自分は泥棒の小頭コブライを伴ひてこれを追跡し、途中神谷村の玉清別
が館にバルギーと潜んでゐるダリヤ姫の消息を知りつつも、玉清別の倅神の子の
言靈に追ひ拂はれて其の意を達せず、更に小盗兒コオロを部下として泥棒稼業に
逆轉し、持前の色と欲とに再三失敗を重ね、現幽二界に憂目を嘗め、遂に照國別
一行に救はるる經路を本巻の骨子とし、これに關する中途の喜劇や悲劇乃至千草
の高姫、竝びに妖幻坊の出現等興味を新たにするもの尠なからず。かつ女色や金
錢欲に對する靈界の戒飭など、吾人の省みて體得せざるべからざる教訓が深刻に
與へられてあります。

ああ惟神靈幸倍坐世。

大正十五年二月一日 於月光閣

第一篇 追僧輕迫

第一章 追劇〔一七九〇〕

神の恵みの豊かなる

言靈開く天恩郷

その頂上に聳え立つ

銀杏の大木は天を摩し

黄金の扇子をかざしつ

これの聖場は萬壽苑

五六七の御代の果までも

變ることなき瑞祥閣

四方は錦の山屏風

引立てまはし綾の機

經と緯とに織りなして

我が日の本は言ふもさら

大地のあらむ果までも

神光照らす光照殿

いよいよ茲に落成を

告げし菊月上八日

南桑田の平原を

一目に瞰下す要害地

天正二年のその昔

織田の右府に仕へたる

土岐の一族光秀が

偉業の跡を偲びつつ

神明館の奥の間に

千年を因む松村氏

三五の光の瑞月が

暗き此世を照らさむと

神の御言を蒙りて

何時もの通り横に臥し

褥の船に身を任せ

疊の波に浮かびつつ

太平洋を横断し

印度の海を乗越えて

往古文明と聞えたる

七千餘國の月の國

タラハン城に仕へたる

左守の司の隠れ處に

スガの港のダリヤ姫

言葉たくみにそそのかし

誘き出したる天真坊

悪鬼羅刹に憑依され

タニグク谷の山奥に

その醜態をさらしたる

滑稽悲惨の物語

千山萬水（山河草木）子（戌）の巻の

初頭しよとうにこまごま記しるしゆく

ああ惟神かむながらかむながら々々

御靈幸みたまさちはへましませよ。

稀代きたいの賣僧坊主まいすばうず奸佞邪智かんねいじやちの曲者くせものながら、どこともなく間のぬけた面構へ、頭あたまは仔細しさいらしく丸まるめてゐるが、元來毛ぐわんらいけのうすい性たちで、別べつにかみそりの御節介ごせつかいに預あづからなくとも濟すむはずのピカピカ光ひかつた調法てうはふな頭あたまの持主もちぬし、鼻はなの先さきが妙めうに尖とがり、目めは少すこしばかり釣つり上あがり、前齒まへばが二本にほん、厚あつい唇くちびるからニコツとはみ出し、何なにほどオチヨボ口ぐちをしゃうとしても、この二枚にまいの前齒まへばだけは雰圍氣ふんみきぐわい外とつしゆつに突とつ出して、治外法權ちくわいはふけんの状じやう態たいである。川瀨かはせの亂杭らんぐひよろしくといふ齒は竝なみに、茹損ゆでぞこなひの田螺たにしのやうな齒はくそだらけの齒はをむき出し、ダリヤ姫ひめの搜索そうさくに兩眼りやうがんを血走ちばしらせ、谷間たにあひの坂道さかみちを息使いきづかひ荒あらく、泡あわを吹ふき飛とばしながら、數多あまたの小盜兒連せうとるれんを四方しはう八方はつぱうに間配まくばり、自分じぶんはダリヤ姫ひめが逃にげたらしいと思おもはるる山路やまみちを選えらんで、泥棒どろぼうの中なかでもチツとばかり氣きの利きいたらしいコブラいを引ひき具ぐし、猪ししの通とほつた跡あとを洋犬かめが嗅かぎつけるやうな調子てうしで、この山中さんちうに名高なだかい立岩たていはの麓ふもとまでやつて來きた。時々ときどき毒蟲どくむしに驚おどろかさされ、猛獸まうじうに肝きもをひ

しがれつつ、夕陽のおつる頃、足が棒になつたと呟きながら、根氣盡きて路傍の草の上に、座骨の突出した貧弱な尻をドスンと卸した。

天真坊「オイ、コブライ、どうだ、ちよつと一服やらうぢやないか、交通機關にチツとばかり油をささなくちや運轉不能となりさうだ。どうもこの急坂を夜晝なしに踏破したものだから、膝坊主がチツとばかり抗議を申し出でて、やむを得ず休養を命ずる事にしたのだ。エエ汝はこの間にそこら中を、一寸、偵察して来てくれないか、あのダリヤだつて、何ほど足が速いといつても女だ、餘り遠くは行くまいからのう」

コブライ「成るほど、そりやさうかも知れませぬな、しかしながら吾々はもう暮六つ下つてをりますから、目の角膜院が就寢の喇叭を吹きかけました。夜分まで日當は貰つてをりませぬから、コブライも化身さまと一所に休養さしてもらひませうかい、何といつてもタカが人間です、天帝の化身ともあらう聖者が、根氣盡きて行倒れを遊ばすといふ此の場合、どうしてコンパスが働きます。そんな事はいはずに休む時にや氣良う休まして下はいな、こんだけ廣い山野を一人の女を何

時まで搜さがしたつて、さう易々やすやすと見付みつかるものぢやありません。かうして一服いっぶくしてをると、ダリヤさまが後あとからバルキーと一緒に意茶いちやつきもつて通とほるかも知れませぬ。さうすりや、居ゐながらにして、目的もくてきの瑞寶ずゐほうを手てに入れるも同然どうぜんですからなア

「エー、泥棒どろぼうのくせに弱音よわねをふく奴やつだな。エ、しかしながら人間萬事塞翁にんげんばんじさいをうの牛うしの尻けつといふから、何が都合つがふになるとも分わからない。今日けふは特別とくべつの恩典おんてんをもつて黙許もくきよしておかうかい、ウツフフフ

「天真坊てんしんぼうさま、笑わらひごつちやありません。僕は、私わたくしは眞劍しんけんに弱よわつてるのです。かな。エ、しかし人間萬事塞翁にんげんばんじさいをうの牛うしの尻けつと仰おつしや有ありましたね、塞翁さいをうの馬うまの糞くそとは違ちがひますか

「馬うまでも牛うしでも可よいぢやないか、俺おれが牛うしの尻けつというたのは、物識ものしりといふ意味みだ」
「なるほど、天帝てんていの化身けしんさまだけあつて、何なんでも能よく物ものを知しつて御座ござるといふ謎なぞですな」

「きまつた事ことだ、三千世界さんぜんせかいの事ことなら、宇宙開闢うちうかいびやくの初はじめから、小せうは微塵みぢんに至いたるまで、

漏れなく落ちなく、鏡にかけたる如く知りぬいてゐる名僧知識だ、オツホン」

「エツへへへ、それほど何もかも能く分る牛のケツ先生が、あれほど大きいダリヤ姫の行方を捜すのに、シヤカンナ頭目の部下二百人まで借用して、搜索せにやならぬとはチツと矛盾ぢやありませんか」

「馬鹿をいふな、戀は異なるもの乙なもの、オツとどつこい、戀は曲者といふぢやないか、久米の仙人でさへも、女の白い脛をみて空中から墜落したといふ話がある。何ほど天帝の化身でも、女に迷うた以上は咫尺暗澹、全く常暗となるのは當然の理だ」

「ヘーン、さうですかいな、妙ですな、怪體なことをいひますな、不可思議千萬、奇妙頂禮、古今獨歩、珍々無類、石が流れて木の葉が沈んで、天が地となり、地が天となりさうな鹽梅式だ。女といふ奴ア、これを聞くと實に恐ろしい代物だワイ。さうすると天真坊さま、お前さまを盲にするだけの器量を持つてゐるダリヤ姫は、よつぽど偉い者ですなア。婦人は孱弱き男子なりといふ熟語は聞いてをりませんが、婦人は最も強き男子なりと言ひたくなるぢやありませんか」

「そこらにゴロゴロしてゐるコンマ以下の女と違ひ、何といつても天の河原に玉の舟を浮かべ、天降り遊ばした棚機姫の化身だもの、そりや當然だよ」

「なるほど、それぢや一つ七夕さまをお祈りしてダリヤ姫の在處を判然と知らしめていただかうぢやありませんか。お前さまも天帝の化身で、七夕姫と夫婦ぢやと仰有つたことを覚えてゐますが、なんぼ何でも天帝の化身様が女帝の行方が分らないとは、チツと理窟に合はないやうに思ひますがな」

「きまつた事だい、七夕姫と彦星の俺とは昔から年に一度より會はれない規則だから、分らぬのも無理はない。それを毎日日日會うて楽しまうといふのだから、チツとはこちにも無理があるといふものだ。しかしながら一旦思ひ込んだ事はやり通さなくちや、男子の意地が立たない、いな天真坊の威嚴に關する問題だ」

「なるほど、いかに、ご尤も千萬、エ、萬々一、ダリヤ姫が肱鐵をかました時は貴方どうするお考へですか」

「ヘン、馬鹿いふな、そんな事があつて堪らうかい、ダリヤはぞつこん俺にラブしてゐるよ」

「ウツフフ、それほどラブしてゐる者が、なぜお前さまの寝てゐる間を考へ、顔に落書までして遁亡したのですか」

「そりやお前の解釋が違ふ。ダリヤもあまり長い山道を歩いて來たものだから大變にくたぶれてゐよつた。そこへメツタやたらに酒を呑ましたものだから、グツタリと寝込んでしまひ、目がくらんで人間違ひをしよつたのだ。バルギーの奴、酢でも葎蕪でもゆかぬ惡黨だから、ダリヤや俺たちの寝た間に、そつと面に落書をいたし、一見俺の面とみえないやうにしておき、その間にダリヤをゆすり起し、俺の聲色を使ひ、甘く夜陰に紛れ、をびき出しよつたものと察する。ダリヤは今朝あたり、ハツキリ人の面がみえるやうになつてから、バルキーのしやつ面を眺めて、さぞ案に相違しびつくり仰天した事だらうよ。ダリヤに限つて、俺を見すてるやうな心は微塵毛頭も持つてゐやう筈がない、きつとバルギーが俺に化けて、寝とぼけ眼を幸ひ、ゴマかしよつたのだ。何といつても、世界の女は、一度俺の面を拜んだが最後、決して忘れるものぢやない。いはんや甘つたるい言を一口でもかけてもらつた女は、なにほど蜂を拂ふやうにしたつて、俺にや能う放れない

のだ、エへへへへ」

と口角よりツーツーとさがる絲のやうな、ねんばりしたものを、手の甲で手繰つてゐる。

「イツヒヒヒヒ、こいつア面白い、奇妙奇天烈、珍々無類だ」

日は西山に沈んで天から暗が碎けたやうにおちて来た。暗がりはゴムをふくらしただやうに四方八方へ擴がつてゆく。時鳥の聲は彼方あなたより競争的に聞えて来る。二人は止むを得ず、立岩の凹みに體をもたせかけ早くも鼯の幕がおりた。

シヤカンナの部下と仕へてゐた四五人の小盗兒連は、これもヤツパリ、ダリヤ姫の搜索を頼まれて、彼方あなたに密林をかきわけ、蜘蛛の巣だらけになつてやつて来たが、背丈にのびた道傍の草や、深い木かげに星一つ見え、進退谷まつて、一同ここに枕を並べやうと横になつた。何だか暗がりで見えぬがグツグツグツと雑炊でもたいてゐるやうな聲がする。

甲「オイ何だか妙な音がするぢやないか。ここは立岩といつて、昔から化州の出る所だ、チツと用心せななるまいよ」

乙「なるほど、こいつア厭らしい。しかし時鳥があれだけないてゐるから、マアちよつと其方へ耳を傾けてグツグツを聞かないやうにすりや可いぢやないか、俺やモウ、そこらが寒くなつて、體が細かく活動し出した。寢ても立つても居られないやうだ、エーエー、モツと時鳥が啼いてくれると可いのだけれどなア」
「ヒヨツとしたら、天真坊さまがこの邊に躰をかいて寢てゐるのぢやあるまいかな。さうでなけりや、時鳥の爺イが齒がぬけて、あんな啼きざまをしてゐやがるのだらう」

「エー、かふいふ時にや歌を唄ふに限る。一つ肝をほり出して、土手きり唄つてみやうぢやないか」

甲「よからう、それが一番だ、オイ皆の奴、汝も唄はないかい」

丙「こんな所で歌でも唄うてみよ、立岩の前に人間ありと化物が悟り、四方八方から一つ目小僧や三つ目小僧が押しよせ來たらば、汝どうするつもりだ。黙つて寢ろよ、のう丁、戊、さうぢやないか」

丁と戊とはウンともスンとも言はず、小さくなつて慄うてゐる。乙は憐れつぽ

いふるい聲を出しながら、カラ元氣をおつぽり出し唄ひ出した。

夕日はおちて御空から 暗はくだけておつるとも

虎狼や獅子熊や 如何なる悪魔が襲ふとも

いかでか恐れむ泥棒の 大頭目のシヤカンナが

乾兒と現れし哥兄さままだ 幽靈なりと何なりと

居るなら出て来い天真坊 天帝の化身の命令で

御用に出て来た俺だぞよ 何ほど偉い悪魔でも

此世をお造り遊ばした 天帝さまには叶ふまい

一の乾兒の俺達は 取りも直さず八百萬

神の中なる一柱 もしも曲津が居るならば

十里四方へ飛びのけよ マゴマゴ致してゐよつたら

手足をもぎ取り骨くだき 肉をだんごにつき丸め

禿わし共に喰はずぞや 天下無雙の豪傑が

五人ごにんの中うちに一人ひとりをる 恐れおそれよおそれ曲津まがつども

ああかむながらかむながら惟神かみ々々 神かみの眞まことの太柱ふとばしら

天真坊てんしんぼうの御家ごけらい來こに 楯たてつく惡魔あくまは世よにあらじ

さがれよさがれトツトとさがれ 暗やみよ去され去され一時いちじも早はやく

月つきは出でて來こい星ほしも出でよ 此世このよは神かみのゐます國くに

惡魔あくまの住すむべき場所ばしよでない ああかむながらかむながら惟神かみ々々

御靈みたま幸さちはへましませよ

と蚊かのなくやうな聲こゑで囀さへつつてゐる。 甲かひはドラ聲こゑを張はりあ上げながら、 燒糞やけくそになり唄うたひ出しただ。

どつこいしようどつこいしよう 天帝てんていさまの御化身ごけしんは

今いまや何處いづこにましますか ここは名なに負おふ立岩たていはの

山中さんちういち一の化物場ばけものば 化物退治ばけものたいぢにやつて來きた

俺は英雄スカンナだ
俺の言ふことスカンなら

早く何處なと逃げなされ
天真坊の生神が

やがて此處をば通るだろ
そしたら悪魔の一族は

旭に露の消ゆるごと
淺ましザマをさらすだろ

何だか知らぬがこの場所は
自然に體が慄ひ出し

小氣味の悪い暗の路
ああ惟神々々

御靈幸はへまして
天帝様の御化身が

一時も早く御光來
遊ばすやうに願ひます

ああ惟神々々
叶はん時の神頼み

天真坊はこの聲にふつと目をさまし、

「ハハア小泥棒の奴、ここまでやつて来てへコたれよつたと見えるワイ。何奴も

此奴も仕方のない奴だな、しかしながらダリヤをうまく掴まへてくれよつたかな

と息をこらして考へてゐる。コブライもまた目をさまし、天真坊が身を起して何

事か考へてゐる様子なので、暗を幸ひ、自分は三間ばかり立岩のうしろへ廻り、優しい女の声色を使ひ、

「天真坊さま、待ちかねました。バルギーの悪人にたばかられ、あなたと間違ひ、夜の路、来てみれば、案に相違の蛙面、こら如何せうかと思案のあまり、バルギーの鞆丸をしめつけ、途中に倒し、この立岩のうしろに隠れて一夜を明さむと待つてをりました。戀しい師の君様、どうぞ此處までお出で遊ばし、妾の手を引張つて下さいな。ジャツケツいばらに體を取りまかれ、身動きが出来ませぬワ」

天真坊はこの聲を聞いて小躍りしながら、やや少時考へ込んでゐる。スカンナ外四人もまた息をこらして様子を考へてゐたが、この連中はテツキり化物と早合點し、面をグツスリとタオルで包んでしまひ、俯むいて慄つてゐる。

コブライ「モシ天真坊さま、ダリヤでございます、どうぞ早く来て下さいな。エー好かぬたらしい、お前さまはコブライさまぢやないか、あなたに用はありませぬよ、お前さまに助けてくれとはいひませぬ、天真坊さまに助けて欲しいのだもの」

コブライは今度は自分の地聲を出し、

「コレ、ダリヤ姫様、私は決してお前さんに野心を有つてはをりませぬ。天帝の化身さまは、勿體ない、自ら、かやうな茨室へお越しになる譯に行きませぬから、私がチツとは茨掻きをしてもかまはぬ、犠牲となつてお救ひに來たのだ。エーエーさうすつ込んで、よけいに茨が引つかかるぢやありませんか……、（女聲で）
「イエエ何と仰有つても私は天真坊さまに來てほしいのですワ。チツとばかり、怪我をなさつたつて何ですか、眞に妾を愛して下さるなら、たとへ火の中水の底、茨室、どこだつてかまはないと、仰有つたことがあるのですもの、今こそ誠意のためし時、この茨室へ暗がり飛込んで救うてくれないやうな誠意のない天真坊様なら、妾の方からキツパリとお斷わり申しますわ。ねえ天真坊さま、キツと妾を愛して下さいませう。アイタタ、面も手も足も茨がきだらけよ、早く助けて欲しいものだワ、ねえ……。（今度はコブライの地聲で）さてさて合點の悪い姫さまだ。では僕は貴女のお世話はよう致しませぬ。モシモシ天真坊さま、お手づから親切を盡して上げて下さいな」
天「いかにもダリヤ姫の聲には似てゐるが、どこともなしに怪しい點がある。コ

リヤ化物ではあるまいかのう」

コ（女聲で）「エーエー辛氣臭い、天真坊さまとしたことが、妾は遠い山坂をかけ巡りお腹がすき、聲はかれ、疲れはててをりますから、本當のダリヤの聲は出ませぬよ。どうか御推量して下さいませ、決して化物ぢやございませぬから」

天真坊は聲のする方に向かつて、二足三足進むをりしも岩をふみ外し、三間ばかりの草茫茫々と生え茂る眞黒の穴へ、「キヤツ」と言つたぎり落ち込んでしまつた。スカンナ外四人はいよいよ化物と早合點し、四つ這ひとなつて坂路をのたりたりと命からがらころげゆく。コブライも天真坊の聲に驚いて聲する方を目當に歩み出す途端、又もや踏み外し、天真坊の落ち込んだ穴へと一蓮托生、迂り込んだ途端に柔らかいぬくい物が體にさはつたので、ギョツとしながら、

「イヤア助けてくれ助けてくれ」

と大聲に叫ぶ。天真坊は落ちた途端に氣絶してゐたので、コブライの落ち込んだのは少しも知らなかつた。少時あつて天真坊は息ふき返した。

天真坊「誰だ誰だ、俺をこんな所へつきはめやがつて」

コ「モシ天真坊さま、しつかりして下さい。暗の陥穽へ、あなたも私も落ち込んで
だのですよ、モウかうなりや夜の明けるまで、ここに逗留するより途がありません
ぬワ」

「いかにも、さう聞けば確かにそんな感じもする、しかしあの時、たしかにダリ
ヤ姫の聲がしてゐたやうだが、惜しい事をしたでないか」

「本當に惜しい事をしましたね、たしかにダリヤさまに間違ひありませんだ。

大變にあの方は貞操の固い方ですなア、私が助けやうとしても、指一本さえせ
ないんですもの」

「エへへへ、そらさうだらうよ、しかしダリヤは心配してゐるだらうよ。先づ先
づ夜が明けるまで仕方がないな、あれくらゐ親切な女だから、夜が明けるまで、
俺たちの安否を考へながら、立岩のはたに待つてゐるに違ひないワ、ああ惟神靈幸
はへませ」

(大正一四・一一・七 舊九・二一 於祥明館 松村眞澄録)

第二章 生臭坊（一七九一）

オーラの山に立て籠り

天來唯一の救世主

天帝の化身と觸れこみて

女盜賊ヨリコ姫

シーゴアの二人と共謀し

三千人の賊徒らを

四方八方に間配りて

七千餘國の月の國

占領せむと大陰謀

企らみゐたる折りもあれ

三五教に名も高き

梅公さまに踏み込まれ

常磐堅磐の岩窟を

打ち破られて降伏し

ヨリコの姫やシーゴアは

誠の道に歸順して

天下公共のそのために

餘生を捧げ奉らむと

眞心盡すに引き換へて

一旦歸順を装ひし

賣僧坊主の玄眞は

ハルの湖横斷し

スガの港の富豪と

世に聞えたる薬屋の

娘ダリヤに戀着し

言葉たくみに誘惑し

タニグク谷の山奥に

左守の司のシヤカンナが

數多の手下を従へて

籠りゐるよと聞くよりも

又も一旗あげむとて

さも鷹揚な面付きで

ダリヤの手をば携へつ

一夜を明かし振舞ひの

酒に舌をばもつらせつ

グツと寢入つたその隙に

ダリヤの姫は泥棒の

バルギーと共に踪跡を

晦ましたるぞ可笑しけれ

天帝の化身と誤魔化せる

玄眞坊は矢も楯も

たまりかねてかシヤカンナの

二百の部下を借用し

姫の後をば尋ねむと

小才の利いたコブライを

引具し谷道トントンと

喘ぎ喘ぎて立岩の

麓にズツポリ日は暮れぬ

闇の陷穽におち入りて

淋しき一夜を送りつつ

藤ふぢの蔓つるをば辿たどりつつ やうやく虎こ口こうを免まぬれて
草くさ茫ぼう々ぼうと生はえ茂しげる 羊やう腸ちやうのこ小み徑ちを辿たどりつつ
交さ尾かり期りので出でて來きた犬いぬ猫ねこが 牝めすのお尻しりを嗅かぐやうに
夢ゆめ路ぢを辿たどる憐あはれさよ 暗やみの扉とびらは上あげられて
東あづまの空そらは茜あかね刺さし 草くさ葉はの露つゆはキラキラと
七しち寶ぼうの光ひか輝かがける その眞ま中なかを二ふ人たり連つれ
ダリヤダリヤと一ひと筋すぢに 岩いはの根ね木きの根ね踏ふみさくみ
汗あせをタラタラ流ながしつつ 苦くるしき坂さかを苦くにもせず
心こころを先さきに上のぼり行ゆく。

天てん「オイ、もうよほどテクツて來たやうだから、一つこの見晴らしのよい處で暫ざん
時休じきゅう養やうしやうぢやないか。この山頂さんちやうから四方よもの連山れんざんを見渡みわたす景色けしきといつたら、ま
るで夢ゆめの國くにを辿たどつてゐるやうだのう」
コ「本當ほんたうに夢見ゆめたやうですな、昨夜さくやだつて、ダリヤさまの夢ゆめを見みて深ふかい陷おとし穿あなへな

だれ込んだ時なんざ、ホントに生きた心地もなく、これが夢だつたらなアと、このやうに思ひましたよ。あの時ア、ホントに、どうなる事やらと、チツとばかり心配いたしましたワイ」

「夢の建築者は皆人間だからな、夢がなければ人生は淋しいものだ。人生の虹は夢だからな、かうして夢想郷に遊んでゐる間が人間は花だ。春の若葉に銀風のそよぐごときダリヤ姫の風情、見るもスガスガしい思ひがするぢやないか。その艶な姿にあこがれてゐる間が、人生の花だ、夢の建築だ、人生の虹だ」

「なるほど、さうすると、この世の中は何もかもサツパリ夢と解すれば可いのですか」

「尤もだ、夢の浮世といふぢやないか、しかしながら夢にも忘れられないのは、ヤツパリ、ダリヤ姫だ。」

夢になりとも會ひたいものは

小判千兩とダリヤ姫

だ、アツハハハハハ

「これだけ四方開展した山の上で、それだけタツプリお惚氣を拜聴する吾等は實に光榮でも何でも、ありませぬわい。アツタ、ケツタ糞の悪い、とも何とも申しませぬ。さぞ山の神さま等は涎をくつて貴方の清いお姿を拜顔してることとせう」

「ウツフフフフ天下の幸福を一身に集めて天帝の化身、天來の救世主、玄眞坊の又の御名天真坊様だもの、泥棒仲間の貴様とは、チツとばかりクラスが違ふのだからなア」

「へん、ヒ、ヒーンだ」

「ヒ、ヒーンとは何だ、まるで馬のやうな事をいふぢやないか」

「ヒ、ヒーン、ボトボト馬の糞だ、牛の穴の天真坊さまとは、いい相棒でせう、イツヒヒヒヒヒ」

「何でもいいわ、どこかここらにダリヤの花が咲いてみさうなものだなア、風が持ってくるダリヤの香氣が鼻について、何とも知れぬ床しみを感ずるやうだ。これから先は、ク「ダリヤ」坂だ、足も軽いだらうよ、ウツフフフフ」

「モシモシ電信棒さま、この山道は昔から有名な腥草の名所で、秋になると随分
楽しい旅が出来ますよ。泥棒稼ぎを行つてみたわれわれ同類も、この邊を通過す
る時には、優美なデリケートななま臭の咲き匂ふ花を見て、悪徒が善人に墜落し
たやうな心持ちになりましたよ」

「そりや何んといふ脱線振りだ。俺の名は電信棒ぢやない、天帝の化身天來の救
世主玄眞坊と申すのだ。天帝の天の一字と玄眞坊の眞の一字を取つて天眞坊とい
ふのだ。そして今お前は腥臭が咲き匂ふ山道だと言つたが、それもまた脱線だよ。
七草というて、秋の日の景色を添へたり種々の薬品になる重寶な草花だ」

「天眞坊さま、コンナ山道に生へる草花が薬になるとおつしやつたが、一體全體
何の病に利きますかい。惚れ薬にでもなりませぬかな」

「七草と言へば、萩に葛に尾花に撫子に女郎花に桔梗に藤袴、これで七種ある、
それゆゑ七草といふのだ。秋の山野といふものは極めて詩的なもので、そぞろに
哀愁の念を感じるものだ。釣瓶落としに暮れて行く夕日を浴びた路傍の草花は淋
しき秋の名残りとし、人の心を傷ましめ且つ慰むるものだ。薬用植物としても中々

の効力があるものだ」

「萩は何の薬になりますか」

「萩は秋の七草の書出しで、莢果植物亞屬の胡蝶花科で、一名荳科植物の一種だ。

この葉を摘んで日光で乾かし茶の代用品とするのだ。あまり興奮もせないので子供や老人の飲料には極めて理想的だ。お前のやうな青春の血に燃えてゐる性悪男子は、平素情欲鎮壓薬として、毎日服用したが可からうよ、アハハハハ」

「天真さま、あなたチツと服用されたら如何ですか。眼の色が血走つてゐますよ、イヒヒヒヒ。それから葛の效能を教へて下さいな」

「又しても葛々と譯もない質問を發する奴ぢやなア。アタ邪魔くさい、しかしながら天帝の化身ともいふべき天真坊さまが、七草ぐらゐの説明が出来ぬと思はれちや、神の威嚴にも關する大問題だから、チツとばかり解明の勞をとつてやらう

かい、アーン」

「葛の解釋ぐらゐにサウ前置詞が多いのでは實に閉口ですワイ。しかしながら後學のために大切な耳を暫時貸しませうかい」

「アハハハ八ずるぶん負けしみの強い野郎だなア。そもそも葛は萩と同じく荳科植物の一種で、昔から葛根といつて盛んに漢方醫の山井養仙などに使用されて来たものだ。發汗劑、下熱劑として使用したり、胃腸の粘滑劑として使用し、または諸藥の配劑として調法なものだ。葛は葛根より搾取したもので最上等の澱粉だ。色々の料理や、夏季における汗打粉としての材料となる。それだから美人には無くてならない好植物だ」

「又しても美人が引合ひに出ましたな。一層のこと葛を澱粉に製造して、ダリヤ姫女帝の土産物となし、その歡心を買つたら如何でせう。これが女帝の心を動かす唯一無二の秘策でせう、エへへへへ」

「クツクツ言ふな。サアこれから一ツいやらしい奴を説明してやらう。幽霊に因縁の深い尾花だ。……幽霊の正體見たり枯尾花……といつて随分ゾツとする代物だ。直ちに石塔の裏を思ひ出す奴だ、アハハハハ」

「エエ天真さま、モウ止めて下さい。こんな山道で気分が悪いちやありませんか。ヒュードロドロと化けて出られちや堪りませぬわ。モツと眞面目に言つて下さい」

な
□

□ヨシヨシ俺もあまり心持が良くないのだ。尾花は禾本科植物で、こいつの穂を集め、日光で乾燥すると立派な綿のやうなものが出来る。この綿は軽い擦過傷や、切傷の口にふりかけると血止め薬になる。夜具にでも使用すると軽くて暖かくて大變に工合の良いものだ□

□ダリヤ姫さまとの結婚式に御使用になるお考へですか、エへへへへ□

□エエーツーツ何とか彼とかいつてダリヤ姫に喰付けやうと致すのだなア□

□ヘンお氣に入りますねかな、それよりもモツとモツと優美な撫子の説明をして下はいな。ちよつと撫子なんて乙な名前前でせう□

□エヘン、撫子は石竹科の一種で、日光に全草を乾燥させ、一日に四五匁ばかりを煎じて利尿劑となし、第一腎臟病、脚氣、水腫なぞの他の難病に用ゆると特效が顯はれるものだ□

□いやはや感心々々、大いに感心いたしました。今度は最も粹な名の付いた女郎花の效能の説明を願ひます□

「女郎花は茜草植物亞屬の敗醬科の一種で、その根を秋季に採取し水によく洗ひ、日光に乾かして貯はへておき、用に臨んで一日に四五匁ばかりを煎じて服用と、婦人の血の道の順血薬として特效ありといふことだ。婦人に趣味を持つ男子は、如何しても女郎花ばかりは氣をつけて平素から用意しておくべきものだ、アハハハハ」

「エへへへさすがは女殺しの後家欺しの天真坊さま、何事にも抜目はありませぬな。ますますこのコブライ奴感珍いたしましたわい。サアこれから桔梗の效能を説明していただきませう」

「桔梗は桔梗科の植物で、その根を秋季に掘り日光に乾燥したものを桔梗根といふ。風邪の時、鎮咳去痰薬として用ゆると効がある。一日に四五匁を水に煎じて飲むと良い、エヘン。血液を溶解するサボニンが含まれてゐるのだ。その根から近時フストールやエバニンといふ新薬が製造されるのだ。ついでに藤袴も説明しておくが、これは菊科植物の一種で、この葉を日光に乾燥して煎じて飲めば、撫子と同じく利尿劑として效能があるのだ。貴様のやうな痲病の問屋さまは秋が來

たら忘れずに採取しておくが可からうよ、アハハハハ
コウフフフフ、小便のタンク奴破裂しさうだ。天真さま、御免下さい
と言ひながら、オチコを立ててジャアジャアと行り出した。
二人はやうやく下り坂となつたので足許も速く、やや展開した野村へ出た。こ
こには二三十戸の百姓家が淋しげに立つてゐる。二三人の腕白小僧が小川に竿を
垂れ小魚を釣りながら歌つてゐる。

水はサラサラ 野は青い

長い堤の木の影で 今日朝から小魚釣り

晴れた空には何處やらで 雲雀でも鳴いてゐるやうな
時折り聞こえる眠さうな 牛の呻きも午后

流れサラサラ 野は青い

つれない竿を 投げ出して

眺めてゐれば水すまし

水をすまして舞ふばかり

そこへ天真坊が頭をテカテカ日光に輝かしながらコブライを従へやつて來ると、
腕白小僧は遠慮會釋もなく、頭の光つてるのを怪しみながら歌ひ出した。

モシモシ禿よ禿さんよ

世界の中でお前ほど

光の薄いものはない どうしてそんな何暗いのか

ナーンと仰有る電気さん そんならお前と光りつこ
向かふの小山に太陽が出たら どちらがよけいにピカつくか

どんなに禿をみがいでも どうで僕より暗いだる

ここらで一吋一休み ブラブラブラブラ ブーラブラ

これはしまつた夜が明けた　　ピカピカピカピカ　　ピーカピカ
あんまり暗い電気さん　　サツキの自慢はどうしたね」

天真坊はこの歌を聞いて、ヤヤ悄氣氣味になり、錫杖をガチヤン　ガチヤンと、ワザとに手荒くゆりながら、

「コーラ、我太郎、今言つたこと、ま一度言つて見い、場合によつては承知せないぞ。餓鬼大將奴が」

小供「アツハハハハ、オイ坊主、この村はなア、昔から三五教の占有地だ、そんな怪體な風をした化物は一寸も入れる事は出来ないのだよ。どつかへ早く姿をかくさないと線香を立てるぞ」

天「チエ、青大將が座敷へ這入り込んだやうな事ぬかしやがる、子供だつて油斷のならぬものだ。子供、オイ、坊主、ここを美しい女が、通らなかつたかのう」
「通つたよ。一人の奴さんを連れて、互ひに背中を叩いたり、頬邊をつめつたり、イチヤつきもつて、ツイ今先き、ここを通りよつたはずだ。俺を今、坊主といつ

たが俺おれヤ坊主ぼうずぢやないよ、お前まへこそ坊主ぼうずぢやないか。俺おれはなア神谷村かみたにむらの庄屋しやうやの息むす子こで、神かみの子こといふ神童しんどうだ。世界せかいの事ことなら何でも俺おれに聞きいて見みよ。何なんでも彼かんでも掌たなこころを指さす如ごとくに知しらしてやるよ。お前まへはオーラ山さんに立籠たてこもつて大山子おほやまこをやつてゐた玄眞坊げんしんぼうのなれの果はてだらうがな。スガの港みなとのダリヤ姫ひめに戀着れんぢやくし、うまく誤魔化ごまくわしてタニグク山やまの岩窟がんくつにつれ込こみ、寝ねてゐる間に顔かほを草紙さうしにされ、トカゲ面づらの男をとこと一いつ緒しよに逃にげられて泡あわを吹ふき、昨夜さくやは立岩たていはの側そばで人造化物じんざうばけものに誑たぶらかされ、深ふかい陷穽おとしあなへおち込こんで向むかふ脛すねをすりむき、泣なき泣なき山上さんじやうまで辿たどりつき、七草ななくさの講釋かうしやくをえらさうにおつ始はじめ、それから、ここまでダリヤの後あとをおつてやつて來きたのだらう。どうだ違ちがふかな

「ウン、いかに、お前まへの言いふ通とほり、俺おれの聞きく通とほり、森もりで鳥からすの鳴なく通とほり、受取うけとりは右みぎの通とほり、その通とほりだ、アツハハハハ」
「オイ、禿はげチヤン、もう締あきめたがよからうぞ。ダリヤ姫ひめなんて、お前まへの性しやうに適あはないや。今いまの間に改心かいしんして俺おれの尻拭しりふきになれ、さうすりや又また浮うかぶ瀬せもあらうぞ。いつまでも惡業あくごふをつづけてゐると、八萬地獄はちまんぢごくの釜かまの焦こげおこしに落おとされてしま

ふぞ
』

『オイ子供、そのダリヤ姫は、お前の家にかくしてあるのと違ふか』

『ウン、隠してある、たしかに、かくまつてあるのだ』

『そりや、どこに隠してあるのだ。一寸言つてもらへまいかな』

『バカを言ふない、かくしたものを言ふ阿呆があるかい。隠した以上は、どこまでもかくすのが本當だ』

コブライ『もしもし天真坊さま、この子供は本當に神様見たやうな子供ですな。』

貴方ももういい加減に兜を脱いだらどうですか。ダリヤさまを諦めては如何ですか。あなたの額には悪相が現はれてゐますがな、改心するのは今の時ですよ。私
はここまですつて來ましたが、あなたが改心するとせないとに拘らず、もう此處
でお暇をもらつて此の神さまのやうな子供にお尻拭きにでも使つてもらひますよ』

子『神の子は神に仕ふる清きもの』

誰が泥棒に尻を拭かすか』

コブライ「これはしたり失禮なことを言ひました

泥棒どろぼうの身みをも辨わきまへずして」

天てん「小賢こざかしく神かみの子こらしく申まをすとも

天真坊てんしんぼうにはトテも敵かなふまい

それよりもダリヤの姫ひめの在ありか所かをば

早はやく知しらせよお錢かねやるから」

子こ「尻けつくらへ觀音くわんおんさまの化身けしんぞや

嘘うそをこくなよ玄真げんしんの枉まが」

と言いひながら、プスツと象ざうが屁へをこいたやうな音おとを立てたて白い煙けむりとなつてしまつた。

つれの子供も影も形もなくなつてしまつた。

(大正一四・一一・七 舊九・二一 北村隆光録)

第三章 門外漢(一七九二)

千年の齡を保つ丹頂の鶴は枯木に巢は造らない、空を飛ぶ鳥さへ突かれた巢には怖れて歸らず、地を潛る獸も一たん狙はれた穴には再び近づかぬ道理、バラモン教の惡神に根城を覆へされ、タラハン城下を立ち出で、打ちもらされし殘黨を集めて、人跡稀なる谷蟻山の蜂つづき神谷の平原に三十餘戸の家をつくつて、あくまでも祖先傳來の三五の道を遵奉し、晝夜孜孜として家業を勵み、時を得れば再び三五の法城を築いて天下に雄飛せむものと、日の出別の宣傳使に仕へたる玉清別は此處に千代の住家を定め、遠大な望みを抱いて時期の到るを待つてゐた。玉清別には神の子、玉の子といふ二男子があつた。神の子は幼少より神童と呼

ばれ、村内に其の神名を轟かしてゐた。玉清別の妻玉子姫は夕餉の用意をなさむと、門先の井戸端に出でて釣瓶に片手をかけ水を汲まむとする時しもあれ、異様の托鉢僧が錫杖を「がちや」づかせながら、三文奴を従へ、さも鷹揚な態度で現はれ來たり、玉子姫の美貌を不出來な目鼻を一つに寄せて微笑しながら眺め、手鼻をツンとかみ、

天真坊「拙者は天帝の化身天來の救世主天真坊と申す名僧知識でござる」

と、さも鷹揚に出齒をむき出して語る。玉子姫は一目見るより思はず吹き出さむとする臍茶の苦痛を奥齒にかみ殺して、しみじみ見れば見るほど醜男も醜男、不男も不男、これほど念入に出來上がった面がまへでは、横町の雌犬にけしかけても叶はぬはずの戀、ましてづうづうしく人間の美人、匿ひおいたダリヤ姫に向かつて慕うて來るとは、戀なればこそと可笑しさに堪へ兼ね、「ホホホホツ」と笑へば、天真坊はますます居丈高になり、

天「これはしたり、當家の奥様とあらう者が吾々の顔を見て、一言の挨拶もなく冷笑するとは何事でござる、あなたの御心底心得申さぬ」

玉「これはこれは天帝の化身様とやら、何用あつてお越し下さいました。エー御用があらば手つ取り早くおつしやつて下さいませ。エーちよつと御様子を伺へば貴方は他宗のお方と見えますが、當家は宗旨が違ひますから、どうぞお歸りを願ひます」

天真坊は……八八ア最前の化小僧がこの村は三五教と言ひよつたが、これや一つ三五教に化けてやらねばなるまいと態と素知らぬ顔をしながら、

天「エー宗旨が違ふといま仰せられましたが、要するに宗旨なんかは枝葉の問題でございます。神様は元は一株、時代とエー、國との都合によつて、あるひは神と現じ、あるひは佛と現じ、自由自在の活動を遊ばすのが誠の神でございます。拙者はかやうな僧形をしてをれど眞實は三五教を信仰いたすもの、拙者の弟子には照國別、梅公、照公などの宣傳使もございませから、何宗か知りませぬが、暫く拙者の申す事を一應お聞き下されたい」

玉「アア左様でございますか、有名な照國別の宣傳使のお師匠様とおつしやる以上は、貴方はお名前は何とおつしやいますか、それを承つた上、都合によつては

お話を聞かしてもらひませう」

「拙者は最前も申す通り、天來の救世主、天帝の化身シーゴローヨリコ別の命でござる」

「ホホホホ。まるきりオーラ山の山賊みたやうなお名前でございますな」

「これは怪しからぬ、拙者はオーラ山に立ち向かひ、シーゴロー、ヨリコの頭目を言向和し一泡吹かせ、天下の禍を除き、記念のために彼ら頭目の名を吾名と致した剛のものでござる」

「あら左様でございますか、エー、オーラ山には天帝の化身天來の救世主玄眞坊とかいふ山子坊主がをつたやうに噂に聞いてをりますが、その玄眞坊はどうなりました。定めし貴方の御神力によつて打ち滅ぼされたことでございますねえ」

コブライは天真坊の袖をグイグイ引きながら、

「もし天真さま、駄目ですよ。足許の明るい中に【とつと】と歸りませう。この女一通の女ぢやございませんよ。グズグズしてをると化が現はれませう」

天真坊は小聲で、

「馬鹿いふな、ダリヤ姫が當家に匿れて居るといつたからは、何とか彼とか言うて彼女を引張りだすまで、ここを動かないつもりだ。貴様去にたければ勝手に去ね」

玉子姫は耳ざとくも二人の囁き話を聞き終り、

「ホホホホ、やつぱり貴方はオーラ山の玄眞坊様でせう。實は奥座敷にお前さまの尋ねてござるダリヤ姫さまが、バルギーといふ氣の利いた男さまと休んでをられますよ。それはそれは睦まじさうな御夫婦ですわ。玄眞坊といふ修験者がやつて來たら、どうぞ入れないやうにして呉れとくれぐれも頼まれてをりますから、どうぞお歸り下さいませ。妾は夕飯のお仕度で大層忙しうございますから」

天「いかに拙者は天帝の化身玄眞坊でござる。一度はオーラ山において惡神に嗾され、ちよつとばかり善からぬ事をいたしたなれど、惡に強ければ善にもつよい道理、今日の玄眞坊は清淨無垢、昔日の玄眞坊ではござらぬ。それゆゑに天帝より天眞坊と神名を賜はつた者、拙者を一夜お泊め下されば家の御祈祷にもなり、子孫長久、福德圓滿疑ひなし、まげて一夜の宿をお願ひ申したい」

玉「左様ならば一寸まつて居て下さい。妾一了簡には行きませぬ、主人に相談して参ります」

と言ひながら足早に奥にかけ込んだ。

何時までまつても手桶に水を汲んで入つたきり、ピシヤリと中から錠を卸し、猫の子一匹顔を見せぬ。玄眞坊は門口に立ち、三五教の宣傳歌を歌つて主人の疑ひを晴らさむものと、皺枯聲を張りあげ仔細らしく歌ひ出した。

「朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

たとへ大地は沈むとも 誠の力は世を救ふ

誠の力と言ふことは 天地造化の初めより

世の末々に至るまで 此世を獨り守ります

宇宙唯一の神人の 珍の力といふ事だ

ああ惟神々々 靈幸倍ひましまして

天來唯一の救世主 産土山の聖場に

現はれ給ふ瑞靈あら たま みづみたま 神素盞鳴の大神かむすさのを おほかみの

化身とあれし玄眞坊けしん げんしんぼう 天帝の化身と言ふことをてんてい けしん い

この家の主人委細かにこのや あるじつばら 悟らせたまへ惟神さと かむながら

愼み敬ひ願ぎまつるつし めやま ね 神が表に現はれてかみ おもて あら

善と悪とを立てわけるぜん あく た そもそも神は何者ぞかみ なにもの

際限もなき大宇宙さいげん だいうちう 作り給ひし造物主つく たま ざうぶつしゆ

これこそ誠の神なるぞまこと かみ そもそも神は無形なりかみ むけい

無聲に居ますその限りむせい いる そのかぎ 何ほど力があるとてもなに ちから

そのまま此世を守るてふこのよ まも 仕組は到底むつかしいしぐみ たうてい

それゆゑ神に選ばれしかみ えら 地上唯一の豫言者をちじやうゆいつ よげんしや

神の機關と相定めかみ きくわん あひさだ 神素盞鳴の精靈にかむすさのを せいれい

珍の聖靈を宿しましうづ せいれい やど 下らせたまひし肉の宮くだ にく みや

これこそ世界の太柱せかい ふとばしら 神の柱は天真坊かみ はしら てんしんぼう

決して間違ひござらぬぞけつ まちが 早く疑ひ晴らしませはや うたが は

神は此の家に幸ひを

與へて靈肉もるとともに

天國淨土に救はむと

門の戸たたき立ちたまふ

心の暗き人々は

神の柱を見誤り

門の戸開いて迎へ入る

禮儀を知らぬ愚かさよ

後の後悔間に合はぬ

早く心を改めて

二つの眼にかけたまふ

青赤黒の眼鏡をば

外して吾が身の顔を見よ

さすれば疑ひ晴れるだらう

總て化身といふものは

人間竝みの顔ぢやない

五百羅漢か不動さま

惡鬼羅刹の相をして

人の心をひくために

現はれ出づるものなるぞ

何ほど顔がきれいで

心に潜む枉神に

注意せなくちや臍をかむ

やうな失敗出来るぞや

省みたまへ玉子姫

この家の主玉清別の

ために化身が宣示する

ああ惟神々々

「靈幸倍へましましてよ」

神の子は窓から二人の姿をのぞき、この歌を聞いて吹き出しながら、小さい手を拍つて弟の玉の子と共に歌ひ出した。

「お化のやうな坊さまが

泥棒の乾兒をつれて来て

誠に嘘ぢや化身ぢやと

甘いことをば言ひ竝べ

家のお父さまをごまかして

此の家に一夜とまり込み

ねてもさめても夢現

忘れられないダリヤさまを

連れて歸らうと企みつつ

嘘八百を竝べたて

目玉をむき出し嘴を

無性やたらにとがらして

臭い呼吸をば吐きながら

屋敷の空気を汚しよる

もはや観念するがよい

萬劫末代門口は

お前のためには開かない

三五教に化けて来て

甘い事せうとはそれや何だ

お尻喰ひの観音だ

早く歸つたがよからうぞ

お杓に水を汲んで来て

頭の上からぶつかけよか

尻尾を股へ捻ぢこんで

一時も早く歸れかし

女を逐ふよな面でない

早くいんでくれ貧乏神

アハハハハハハあの面を

一寸見なされお母さま

小田の蛙の鳴き損ね

夜食に外れた梟鳥

形容の出来ないスタイルだ

ほんとに怪體な賣僧坊主

神の館を逸早く

尻に帆をかけ去んでくれ

お前の去んだその跡で

お鹽の三俵も振り撒いて

隅から隅まで大掃除

致さにやならぬ厄介な

山子坊主が来たものだ

イヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

と腮をしやくり頭を窓から突き出し、小さい足音を刻みながら奥に引っこんでし

まつた。

コブライは馬鹿らしくてたまらず、「チエツ」と齒がみをなし、睨みつけながら、斜になつて門口を出た。天真坊も「チエツ」と舌うちしながら駆けだす、待ち構へてみた下男は手早く門の門を箝めてしまった。

夕陽傾いて暗の扉は四方より擴がつて来る。執念深き玄眞坊は現在戀慕ふダリヤがこの館に居ると聞いては、たとへ命を的にかけても目的を達せねばおかぬと、門先の石の上に腰をうちかけ、雙手を組んで思案に暮れてゐる。埒求むる夕鳥、近所の森の上から阿呆阿呆と「おちよくる」やうに頭の上から喚いてゐる。

(大正一四・一一・七 舊九・二一 於祥明館 加藤明子録)

第四章 琴の綾(一七九三)

四方に堅牢な高塀を圍らした玉清別の神館の門外へ追つぱり出された天真坊は、

現在自分の戀慕うてゐる最愛のダリヤ姫が小泥棒のバルギーと共に、情緒濃やかに喋々囁々と暖かい夢を見てゐるかと思へば、妬けてたまらず、如何にもして、翼あらば此の塀を乗り越え、二人の居間に飛込み、バルギーの面を搔きむしり、鬢を引まはし、鬱憤を晴らさむと雄猛びしながら、ウンウンと唸りつめ、拳を握つて自分の太股のあたりを、無性やたらに擲つてゐる。コブライはこの體を見て可笑しくてたまらず、

「モシ、天真坊様、御化身様、大變な偉い雄健びですな。そらさうでせう、お肚の立つのはご尤もだ。つぶしに賣つたつて千兩や二千兩の値打のある美人を、まんまと、バルギーぐらゐに占領され、自分は門外に追ひ出され、指を喰はへて見てるのも餘り氣の利いた話ぢやありませんな。私だつて世が世なら、あのダリヤ姫を女房にして見たいやうな心も起らぬではありませぬワ。ダリヤ姫の倂は、どこともなく優しい親しいところがありますなア。私だつて一度はあの白い手を握つて、共に山雲海月の情を語りたいやうな氣もいたしますワイ。縦から見ても横から見ても、優美で高尚で艶麗で、しかも宗教的熱情に富んだ純朴な心が、あの

下膨れのした垂れ頬に現はれてをりますからなア」

天真坊は太い吐息を漏らしながら、

「俺は天性この通りの面構へ、さうだから別に戀といふのでもないが、コリヤ實際俺の心から出たのではない。戀は凡て神から來たるものだ、結婚は人間のする仕事だ。神さまから命ぜられた神聖の戀と感じてよりの心機一轉のこの行脚、思はず知らず花のかけを踏んで驚く足を上げたとき、一般のよそ目にはさぞやさぞ、バカの白癡の骨頂とも見えるだらうが、神の命じ玉うたこの戀愛は、どうあつても成功しなくちやおかない筈ぢや。玄眞坊自身としては、たとへ水中の月、手にとるを得ずとも、せめては岸上の一念、うたたこの境遇を甘んずるだけでも結構だが、何といつても、御本尊の神様が御承知遊ばさぬのだから辛いものだ。丸切り只今の心持ちは、あたら名玉碎けて粉となり失せし心地だ。あーア、天來の救世主も戀にかかつたら、からつきし駄目かいな」

「コ、ハハハハ、天真坊さま、大變な御愁歎ですな。初めは龍虎の如く、終りは脱兔の如し……とは貴方の心底、御境遇、誠に早察しまするワイ、イヒヒヒヒ」

「コリヤ、コブライ、バカにするない。世の中は夜ばかりぢやない、また晝もあるぞ。なにほど失戀の淵に沈んでをつても、又もや起上がる時節があるから、さう見下げたものぢやないワイ」

「それよりも夜明を待つて、ダリヤが庭園をブラつき始めたら、すき堀の穴から御面相なりと拜顔して、悶々の情を消すのですな」

悪戯小僧の神の子は、門の節穴から、ソツと外を覗いてみると、うす暗の中に二つの影が一閒ばかり閒隔を保つて、愁歎話に耽つてゐる。

神の子「オイ、天真さま、何を言つてるんだい。ダリヤさまはな、お前さまが此處へ尋ねて来たといふ事を聞いてビックリし、裏口から一人の「おつさま」と、たつた今の先東の方を指して逃げ出したよ。お母さまに内證で、あまり可哀さうだから、ちよつと知らしに來てやつたのだ。ダリヤに會ひたけりや、早く行かつしやい、モウ今頃は吾子山の麓あたりまで行つてゐるだろ」

天「ナアニ、ダリヤが逃げたといふのか、そいつア大變だ」

「金城鐵壁に圍まれてゐるダリヤよりも、外へ飛び出したダリヤの方が、お前の

ためには都合が可いだらう」

「そりやまた本當かい、嘘ぢやなからうな」

「嘘なら嘘にしておけやい。人が親切に、この眠たいのに知らしてやるのに、勝手にしたがる、イヒヒヒヒ」

と笑ひながら、屋内深く隠れてしまった。後に天真坊は雙手をくみ、少時思案にくれてゐたが、

天「オイ、コブライ、どうだろ、本當だろかな。あんな事言つて、うるさいから俺たちを追ひ出す手段ぢやなからうか」

コ「子供は正直ですよ、ダリヤだつて、現在天真坊さまが、ここへ来てゐられるのに、安閑としてはをれますまい。私がダリヤだつたら、キツと逃げ出しますよ」

天「いかにも尤もだ、サア、コブライ、半時の猶豫もならぬ、サア行かう」
と薄暗がりの野路を、轉つ輾びつ、吾子山の方面さして驅りゆく。

ダリヤ姫は離れの間に、平氣の平左で、スガの港へ歸るまでは、巧くこのバルキ―をチヨロまかしおかむものと、一生懸命に酒をすすめて機嫌をとつてゐる。

ダリ「最も敬愛するバルキーさまえ、本當に天真坊といふ奴、氣の利かねい賣僧坊主ぢやありませんか。妾と貴方と玉清別さまのお館にかうして、ゆつくりとお酒を汲みかはし、戀の未來を楽しんで遊んでゐるに、此の家の奥さまに追ひ出され、門の外でベソをかいてゐるといふこと、本當に一掬同情の涙をそそいでやりたくなるぢやありませんか」

バルギーはあわてて、

「ソソそりや何を仰有る、ヤツパリ姫さまは天真坊に一掬同情の涙を注ぎたいやうな心持がするのですか、そりや大變だ。私だつて、姫様のお心持がそんな事だつたら、安心は出来ないぢやありませんか、たとへ一命をすてても姫様のために悔いがないといふ私の決心ですのに……」

と血相變へる。

ダリ「ホホホ嘘ですよ、世間に對する義理一遍の辭令ですワ。たとへ心の中は如何でも妾は女ですからね、男さまのやうな赤裸々なこた言へないでせう」

バル「ウン成程、分つてる。エー、それで俺もチツとばかり安心した。然しな

がら姫さま、僕に對する御誓約もその傳ぢやありませんか。厭なら厭と、赤裸々に今の間に言つてもらはなくちや、最後の壇の浦まで行つたところで、エツパツパとやられちやたまりませぬからな。何といつても僕の面は戀愛に對しては險呑千萬な御面相だから、氣がもめて堪りませぬワ」

「ホホホそんな御懸念は御無用にして下さいませ。何ほど容貌がよくても、氣甲斐性のない男子はダメですワ。今の世の中は一程二金三容貌ですからね、何ほど容色が悪くつても、金がなくつても、程さへよけら女が吸ひ付きますよ。私だつてバルギーさまに惚れたのは、容色でもなし、金でもなし、又金や容色を望んだところで、からきし、ダメですもの、肝腎要の戀男になくってはならない第一の美點、程のよいのに惚れたのですワ」

「ソソそれほど、僕は程が好くみえるかな。よつぽどお氣に入つたとみえるな、エへへへ」

「金や容色はどうでもよいが

程ほどのよいのにわしや惚ほれた

といふやうなものですワイ、ホホホホ

「ナールほど、程ほどなる哉かな程ほどなる哉かなだ。これほどまでに惚ほ込んだ女をんなをみすてやうものなら、女をんな冥みやう加がに盡つきやうほどに、梵ぼん天てん釋たい自じ在ざい天てん、オツとドツコイ、三五あななひけう教けうの大神おほかみさまに誓ちかつて、萬まん劫ご未ま代だいダリヤの君きみはすてませぬ。どうか御ご安あん心しんなすつて下くださいませ、おん嬢かかだいみやうじん大明だいみやうじん神かみ様さま」

「イヤですよ、おん嬢かかだいみやうじん大明だいみやうじん神かみなんて、未み來らいの女によう房ぼうと言いつて下くださいな」

「その未み來らいだけ除とつて欲ほつしいな、肩かた書がきがあると何なんだか窮きう屈くつでたまらないワ。海かい軍ぐん大だい將じやうだとか、何なに々なに局きよく長ちやうだとか肩かた書がきがあると、知しらず識しらずの間あひだに官くわん僚れう氣き分ぶんになつて、心こころまでが四し角かくばつて仕しか方たのないものだ、どうか未み來らいといふ肩かた書がきをこここで削さく除ちよして頂いたけませぬかな、ダリヤ姫ひめの君きみ様さま」

「ホホホホ氣きの短みじい事ことおつしやいますこと、一いち秒べう間かん先さきでも未み來らいですよ。未み來らいと言いつたら、さう遠とほいものぢやありません。どうぞこころぞスガの港みなとまで送おくつて下くださ

いましたら、妾がお父さまやお兄さまにお願いして、合衾の式を挙げたいと思つてみますのよ。どこから見ても申分のない程のよい殿たちだこと、ホホホホ、頬邊が知らぬ間に赤くなりましたわ。心臓の動悸が烈しくなり、警鐘亂打の聲が胸に響いてみますワ

頬邊が赤くなつたのは葡萄酒を呑んだ加減ぢやないか、甘いこと言つて、僕を……俺を誤魔化すのぢやあるまいな

「どしてどして、孱弱い女の身でゐながら、仁王の荒削りみたいな、程の好い殿たちを騙してすみませるか、男冥加に盡きますからね」

「どうか、御變心なきやうに頼んでおきますよ、猪鹿つきて良狗煮らるる事のないやうにね」

「ホホホ、御念には及びますまい、羽織の紐ですから……ね」
「妾の胸においてあるといふのか、よし、分つてる。しかし姫さま、クラヴィコードが此處にあるぢやないか、一つ弾じてもらふわけにや参りますまいかな」

バルギーは自分の女房にしたやうな氣もするなり、また何處ともなしに犯し難

き氣高い他人の嬢さまのやうな氣もするなり、きたなく言葉を使つてみたり、丁寧ねいに言つてみたり、妙な心理情態しんりじやうたいに陥つてゐる。ダリヤは傍かたはらのクラヴィコードを手にとり、絲いとをしめ直しながら、無聊ぶれうを慰なぐさむるため、さしかまへのない、子供の時ときに覺おぼえておいた唄うたを唄うたひ出した。

唄うたはどこでもかけ行く 子供こどもと仲なかよくはねまわる。

シヤシヤシヤンシヤン 歌うたは花はなさく木きにみゆる

小鳥ことりがそれをついばむよ シヤシヤシヤンシヤンシヤン

歌うたは月夜つきよの笛ふえの音ねに 合あはせて遠とほく響ひびきます

シヤシヤシヤンシヤンシヤン 歌うたは心こころの噴水ふんすいよ

涙なみだにみちる微笑ほほえみよ シヤシヤシヤンシヤンシヤン

歌うたはきらめく玉たまの音おと やさしく清きよき思おもひ出ひでよ

シヤシヤシヤンシヤンシヤン 唄うたは世界せかいを洗あらふ波なみ

舟ふねは勇いさんで出でかけます シヤシヤシヤンシヤン

歌はすべての息よ 命の終る鐘の音よ

シヤシヤシヤーンシヤーン

モウこれで忪へてもらひませう、永らく弾かないので、絲のねじめが思ふやうになりませぬからね」

バル「ヤア感心々々、生れてから初めて、クラヴィコードの音をきいた、何とマア琴といふものは殊の外よい音の出るものだな。それに姫の聲といひ、様子といひ、程といひ、なかなか素敵滅法界な天下の逸品だつたよ」

ダリ「ホホホホ、あなた何ですか、クラヴィコードの音を聞いた事がないとは、あまり無風流ぢやありませんか。スガの港邊では、裏長屋のお婆さまでも琴を弾じない人はありますよ。男だつて大抵の人は彈奏の術には馴れてみますからね」

「イヤ、成程、なるほど、なるほど、よい音の出るものだ。それで琴をひく女を、よい【ねい】さまといふのだな、分つてる」

「ホホホホ、琴のよい音が出るから、【ねー】さまなんて、よいかげんに呆けて

おきなさいませ。殊ことのほか文盲もんまうな男をとこさまですな、妾あたいそんなこと聞きくと、さつぱり厭いや氣けがさして來きますワ〆

バルギーはあわてて、手てをふりながら、

「イヤイヤ、さうぢやない、さうぢやない、ちよつとテングに言いつてみたのだ、俺おれだつてクラヴィコードは知しつてるよ、天下てんかの妙手めうしゆと評判ひやうばんをとつた俺おれだものなア〆

ダリ「成なるほど……鼠捕ねずみとる猫ねこは爪つめかくす……とか言いひましてな、人ひとはどんな隠藝かくしげいを持つてゐるか分わかりませぬな。本當ほんたうに琴ことの名人めいじんでありながら、知しらぬ面かほをして御座ござるそのゆかしさ、程ほどのよさ、それが第一だいいち、妾あたいは氣きに入いつてますのよ。今いまの世よの中なかの人ひとは、知しらぬ事ことでも知しつたらしう言いひたがるものですからな〆

バル「ウン、そらさうだ、よく分わかる、イヤ、分わかつてる、知しつても知しらぬ面かほするの〆が床ゆかしいのだ、そこに男子だんしの價値かちが十二分じふにぶんに伏在ふくざいしてると言いふものだ。いはゆる謙遜けんそんの美德びとくといふものだ、謙遜けんそんの美德びとくすなはち人格じんかくをなす所以ゆゑんのものだ。時世ときよじせ時節つで、泥棒どろぼうの仲間なかまへ入はいつてをつたものの、元もとが元もとだからの〆

「ホホホ何だか知りませぬが、泥棒の小頭では、人格問題を云々するわけにもゆきまずまい。それはさうと、妾が弾奏しました返禮として、一つ貴方唄をうたひ、コードを弾じて、程好い音色を聞かして下さいな」

「ウーン、コトと品によつたら弾じない事はないが、これはお前と四海波謠ふ時まで保留しておこうかい、でないと隠藝とは言はないからな。お前の親や兄弟をアツと言はせる仕組だからな」

「ホホホホ、何とマア程のよい御挨拶だこと、サ、今となつた時にや、お酒に酔ひつぶれたやうな顔して、寝込んでしまふ今から野心でせう。その指先ではどうもコードを扱はれた形跡がないぢやありませんか、妾の指をみて御覽、この通り堅い筋が出来てをりますよ」

「俺のはな、素搔といつて、爪の先ばかりで弾奏するのだ。それが名物となつてゐるんだ。爪の奴伸びるでチヨイチヨイ切るものだから、今は爪先に筋がないのだ。マア、疑はずに待つてくれ、俺のは御神前か何かでやるのだからな、シャツチンシャツチン　シャツチンと、そら本當に可い音色だよ」

「御神前でシヤツチン シヤツチンやるのは、そら八雲でせう」

「八雲でも小雲でも琴に間違ひはないぢやないか」

「あ、そんなら、この八雲琴を拜借して、妾を平和の女神さまと假定し、一つ弾奏してみて下さいな」

バルギーは頭をしきりに搔きながら、

「ヤア、ダリヤ殿、實のところは嘘だ嘘だ、琴なんか持った事もないのだ。こればかりは閉口頓首する」

ダリ「ホホホ、それ聞いて、妾安心しましたワ、琴なんか女の弄ぶものですワ。

男が琴を弾ずるのは伶人ばかりですワ、伶人なんか何時も貧乏で、祭典の時なんか、横の方に席を拵へてもらひ、「ミヅバナ」たらしして慄うてるのですもの、そんな者に口クな者はありませんからね。男子は男子でヤツパリ荒つぽい事好む方が、なにほど立派だか知れませぬワ」

バル「へへへへ、なるほど御尤も、分つてる、そらさうだ、お前の仰有る通り、俺の聞く通りだ。荒つぽい事と言つたら、高塀をのりこえ、大刀を引提げて大家

へ飛び込み、コラツと一聲かけるが否や、何奴も此奴もビリビリツとちぢみ上り、生命より大切に貯はへておいた山吹色をおつぱり出して手を合して拜むのだから、偉いものだる」

「貴方ヤツパリ泥棒やつてみたのですね、泥棒なんか夫にもつこた厭ですワ」

「ヤ昔は昔、今は今だ。改心して三五教に入り、薬屋の主人となつた以上は泥棒

なんかするものか。お前の内は富豪だから何時泥棒が入るかも知れない、その時

は俺が泥棒の要領を覚えてるを幸ひ、反対に泥棒を赤裸にひきめぐり、他所で盗

つて来た物を捲上げてしまつてやるのだ。これからスガの港まで歸るには、まだ

大分道程もあるから、もし途中で泥棒でも出よつてみよ、俺が一目睨んだら、何

奴も此奴も蜘蛛の子を散らす如く逃げるのだから、本當にこんな夫と道伴れにな

つてをれば安心なものだよ」

「成るほど、それ承つて安心いたしました。サアモウ夜も更けましたから、やす

もうぢやありませんか、お泥さま」

「チエツ、要らぬ事いふものぢやない、意地の悪い姫様だな」

二人は間をへだてて漸く寢についた。

（大正一四・一一・七 舊九・二一 於祥明館 松村眞澄録）

第五章 轉盜（一七九四）

玉清別夫婦は神の子、玉の子と共に、まだ夜のあけぬ中から神殿の大掃除をなし、山野の供物を獻じ祝詞を奏上してゐる。

高天原の聖場に元津御祖の大神の大神言もちて、天かけり國かける天使八百萬神集ひに集ひます、東の都は日出る國の御名も高き、いと清々しき小雲の川を圍らせる綾の聖地の八尋殿、又西の國に至りては、パレスチナの國の御名も高き工ルサレムの都、オリブ山の頂に宮柱太しく立てて鎮まります嚴と瑞との二柱従ひ玉ふ神使、朝夕に天かけり國かけりまし、ウブスナ山の聖場には神素盞鳴の尊、

ときはかきは常磐堅磐に御あとを垂れさせ玉ひ、四方の青人草は言ふも更なり、草木蟲族の端に至るまで、恵みの露を垂れさせ玉ふ尊き清き大御心を拜み奉り、朝な夕なに此の神床に嚴の御魂を齋き奉りて仕へまつる事の由を、いと平らけく安らけく聞召し相諾なひ玉ひて、バラモンの枉神に退はれたる三五の神柱玉清別をして、再び世の光となり、鹽となり、花ともなりて、天晴れ大御神の大神業に仕へ奉らしめ玉へ、仰ぎ願はくばこれの家内をして諸々の枉事、罪穢あらしめず、日々業務を勵み勤めて、ゆるぶ事なく、怠る事なく、神谷の村の鑑として常磐堅磐に臨ませ玉へと畏み畏み祈願み奉らくと申す。三五の大神守り玉へ幸はへ玉へ、惟神の御魂幸はへましませ」

と祝詞を終り、庭園を親子四人連れ新空気を呼吸すべく逍遙し初めた。

バルギーはダリヤ姫が寢息を窺ひ、ソツと裏口よりかけ出だし、どこかの家へ忍び込み、澤山な黄金をせしめてダリヤ姫を驚かせ歡心を買はむものと、無謀にも飛び出してしまった。

ダリヤ姫は玉清別が祝詞の聲にフツと目をさまし、あわてて手水を使ひ神殿に
簡単なる祝詞を奏上し、終つて吾が居間へ歸り、クラヴィコードをいぢつてゐる
と、そこへ玉清別夫婦が襖を靜かに押しあけ、入り來たり、

玉清 「ダリヤ様、お早うございます」

玉子 「朝も早うから丹精な事でございますな、ほんとうにお手際がよく冴えて
ますワ」

ダリヤはクラヴィコードを床に直し、一二尺後しざりしながら丁寧に兩手をつ
き、

「これはこれは御主人様、奥様、お早うございます。いかいお世話に預かりまし
て誠に申し譯がございませぬ」

玉清 「姫さま、何を仰有います、此處は神様の家、お世話さして頂くのは神様へ
の御奉公でございます。お禮を申されましては却つて困ります、どうぞ氣を使は
ずにユルユル御逗留下さいませ」

ダリ 「ハイ、有難うございます。お言葉に甘へて、ユツクリとお世話に預かつて

をりまする』

「しかしダリヤ様、貴女のおつれになつたバルキーとかいふ方は、何處へ行かれ
ましたか御存じでせうなア」

「ハイ、夜前、妾のクラヴィコードをお聞きになり、直ぐおやすみになつたやう
に思つてゐますが」

「ハテ、姫様は御存じがないのですか、今朝からお姿が見えないのですよ」

「ハ、左様でございますか」

と平然としてゐる。

玉清 「姫様、一寸お伺ひいたしたいのですが、あの男の素性は御存じでございま
せうね」

ダリ 「あれはバルギーと申しまして、タニグク山の泥棒の岩窟に小頭をやつてゐ
ましたのだが、妾が、昨夜参つた玄眞坊といふ妖僧にそそのかされ、泥棒の岩窟
に囚れ、どうかして逃げたいと考へ、悪僧の酒に酔うたのを幸ひ、あのバルギー
を色をもつてちよろまかし、うまく虎口を逃れたのでございます。まだ家へかへ

るまで道程もございますので、腹の悪い事と知りながらスガの里にかへるまで、何とか彼とか申して送らしてやらうかと考へ、道連れになつてるのでございます。實のところは、實際の事を御夫婦様に打ち明けたいと存じましたが、バルギーが何といつても側を離れないので申し上げる機会を得ずにをりました。御夫婦様は妾が悪い男を連れてゐると、さぞお蔑みでございませうが、右のやうな次第でございますから、何卒よろしく願ひ申します」

「いかに、吾が家へお訪ねになつた時から妙な夫婦だと思つてゐました。どうして、まあ、貴女のやうな淑女と泥棒面の三品野郎と御夫婦で旅行されたのか、まるつきり……木馬嘶いて石女が子を産むやうな話だといつて家内と囁いてゐたところでございます。ヤアそれ聞いて安心いたしました。かのバルギーは、最早ここへは歸つて來ますまい。キツと吾々夫婦がお宅まで送つて上げますから御安心なさいませ」

「どうしてまた、あのバルギーが此處へ歸らないのでせう。あなたに送つて頂けばあのやうな危険な者に道連れにならずによいから一安心ですが、彼はまた何か

よからぬ事でも致したのでございますか」

「エー、彼は昨夜深更に、村内の空兵衛が家に覆面頭巾で暴れ込み、家族をフン縛り、金銭を残らず奪ひとり逃げ出す途端、門口の深井戸に落ち込み、バサバサと騒いでをつたところ、不寝番が見付け出し、井戸より引き上げ彼を引縛つて、空兵衛の家に、つないであるさうでございます。今の先不寝番からさう訴へて参りました」

ダリヤはビツクリしながら、

「エー、何とマア悪い奴でございますな、たちまち天罰が報うて来て吾と吾が手に深井戸に陥込んだのでございませう。しかしながら泥棒とは言へ、この山坂をタニグク谷から此處まで送つて来てくれた男、見捨てておくわけにもゆきませぬから、一目會はして下さいませぬか。彼に誠の道を説き聞かせてやりたうございませぬから、それとも村の掟で御成敗なさるのなら是非はございませぬ」

玉清「此の村は三十三戸でございしますが、何れも三五教の信者で、人間を裁くといふ事を致しませぬ。誠の道を説き聞かせて、この村外れまで送り追放する事

になつてをります。幸ひ姫様が御訓戒を與へて下さることなら、彼も満足するでせう。然らばこれへ連れ参りますから」

ダリ「ハイ、お邪魔ながらさう願へれば結構でございますが」

玉清「然らばこれから不寝番に申し付け、ここへ引張つて参りませう。暫くお待ち下さい」

と言ひながら足早に出でて行く。

玉子姫も夫の後に従ひ軽き目禮を施しながら吾が居間へと歸り行く。あとに残つたダリや姫は悪人とは言ひながら、何處ともなしに憐れを催し、どうかして彼の心を改めしめむと、クラヴィコードを弾じながら神に祈つてゐる。

「天と地とのその中に 生きとし生ける物は澤あれど

神の形に造られし 人は靈の子靈の宮と言ふ

そも人生の行路を尋ぬれば 川瀬の水の流るる如く
朝夕べに變り行く 浮きつ沈みつ倒けつ轉びつ又起きつ

人生の波を渡り行く
善きも悪しきも押しなべて

何れも人は神の御子
なすべき業は澤あれど

人の寶を掠めとり
月日を送る人こそは

人にして人に非ず
人の皮着る獸ならめ

バルギーだとして生れついで
盗人には非ざらめ

浮世の波に襲はれて
聞くも嫌らし盗人の

群に入りたる事ならむ
人の情けは彼も知る

吾を慕ひて山坂を
此處まで送り來たりしは

戀とは言へど一片の
誠心の輝きあればこそ

スガの港に至りなば
悪しき心を改めて

眞人にならむと誓ひたる
その舌の根の乾ぬ間に

アアあさましや人の子の
家に忍びて黄金を

盗む心は何事ぞや
吾が身を戀ふるその餘り

黄金の寶を奪ひとり
吾が歡心を買はむとや

てもあさましの心かな
三五教の大御神

彼が心に光明を
射照り通らせ片時も

早く眞人の群に入り
生きて此世の用に立ち

死しては神の常久に
あれます國に上り行き

永久の生命を樂しげに
送らせ玉へ惟神

バルギーの男の子に相代り
ダリヤの姫が眞心を

こめて祈願み奉る
ああ惟神々々

恩頼を垂れ玉へ
恩頼を垂れ玉へ

かかるところへ村人の聲ガヤガヤと、バルギーを引立てながら門口に送つて來た。

バルギーは庭の植込の中に蹲みながら、ダリヤ姫に合はす顔なしと、顔をも得あげず落涙してゐる。ダリヤ姫は庭下駄を穿き、ツカツカとその側により、扇子もて二つ三つ彼の頭を軽く打ちながら、涙の聲を張り上げて、

「これ、バルギーさま、お前さまは、妾に改心したといった事はスツカリ嘘だつたのですね、何といふあさましい事をなさいました。世の中に爲す業は澤山あるに、夜陰に紛れて人様の家に忍び入り、悪虐無道にも人を括り上げ嚇し文句を竝べ立て、汗や膏で貯はへた金を盗らうとは實に男子の面汚し、何といふ悪魔が貴方に魅つたのでせう。妾は貴方のやうな方とたとへ三日でも道連れになつたのが残念でございます。しかし妾も貴方にお断わり申さねばならぬ事がございます。三五教のピュリタンでありながら、如何かしてあの岩窟から身を逃れむと、今まで心にもない事を言つて貴方を騙つてみました。決して私は貴方に戀慕してはあませぬ。腹の底をたたけば、いやでいやで堪らないのですよ。しかしながら、スガの里へ歸るまで貴方をうまく利用しようと思つた私の罪、幾重にもお詫びをいたします。お前さまが此の村へ来て赤恥をかくのも、ヤツパリ私があつたため、私が悪いのです。どうぞ只今かぎり心を改めて眞人間になつて下さいませ。そして又スガの里の方へでもお越しになりましたら、どうぞ吾が家へ訪問して下さいや。此の村は三五教の信者で、人のよい方ばかりだから貴方の罪を許して下さい

さうですから、サア早くどつかへおいでなさいませ。必ず必ず道で悪い事をなす
つちやいけませぬよ。これは少しばかりですが路銀に使つて下さい」

と襟に縫ひこんであつた小判を一枚とり出しバルギーの懐に捻ぢこみ、「左様な
ら」と言ひつつ、しやくり泣きしながら與へられた吾が居間へと歸り行く。村人
はムラムラとバルギーの周囲をとりまき、青竹持つて大地を叩きながら、

「サア立て、歸れ」

と後をおつたて、村外れをさして送り行く。

玉清別夫婦はヤツと胸を撫で下し、再びダリヤ姫の居間に入り來たり、

「ダリヤ様、貴女の見上げたお志、側に聞いてゐた吾々二人は心の底から泣かさ
れましたよ。あの御訓戒によつてバルギーも改心するでございませう」

ダリ「ハイ誠に赤面の至りでございます。バルギーさまが、あのやうな【ザマ】
になつたのも、もとを訊せば私が悪いのでございます。お館に迷惑を掛けて相濟
みませぬ。穴でもあればもぐり込みたいやうな気分がいたします」

玉子「何おつしやいます、ダリヤ様、貴女の立場としては、時と場合によつて、

バルギーを騙しなされるのも止むを得ませぬ、何事もみな神様のなさる業でございます。然しながら天真坊といふ奴、途中に待ち受け、どんな事をするかも知れませぬから、二三日逗留なさつてお歸りなさつたら安全でございませう。その時は、屈強な村人を二三人つけて送らせますから御安心下さい。』

ダリ『なにかから何まで、お世話になりましたして誠に有難うございます。何分よろしくお願い申します。』

(大正一四・一一・七 舊九・二一 於祥明館 北村隆光録)

第六章 達引(一七九五)

戀に狂うた妖僧の 天真坊はどこまでも

ダリヤの行方を探らむと コブライ引きつれ夜の道

普門品をば唱へつつ 毒蛇の禁厭しながらに

スタスタ行けば山の根に いつの間にやら突き當り

行手の道を失つて やむを得ざれば立往生

明くなるまで待ちあたる かかるところへ向かふより

一人の男がすたすたと 息せききつてはせ來たり

小石につまづきバツタリと 二人が前に倒れける

玄眞坊は怪しみて よくよく見ればこは如何に

岩窟の中に見覚えの 泥棒の顔と見るよりも

得たりと矢庭にひつ掴み こぶしを高くふりあげて

これやこれや貴様はバルギーと 示し合せてダリヤ姫

逃がした奴に違ひない 早く白状いたさねば

貴様の命は朝のつゆ 忽ち消えて後もなく

なるが承知かこれや如何ぢや すつぱりこんと白状せよ

言へば男は顔をあげ アイタタタツタ アイタタツタ

お前は名高き天真坊

三千世界の隅々も

一目に見通す神様だ

お前さまの爲に頼まれて

ダリヤの行方を探すもの

見違へられては堪らない

眞偽の程は言はずとも

神さまならば知れませう

どうぞ許して下さんせ

決して神の御前で

毛頭嘘は言ひませぬ

言へば玄眞うなづいて

顔色和らげ聲低う

そんならお前はダリヤをば

探しに行つてくれたのか

これやこれやコブライ間違ひは

なからうか調べて呉れよ

言へばコブライ首をば

上と下とに振りながら

こいつはバルギーの配下だが

シヤカンナさまに頼まれて

ダリヤとバルギーを探すべく

先頭一に出た奴だ

決して嘘ではありませんせぬ

安心なさが宜しかる

言へば玄眞頷いて

なるほど貴様の言ふ通り

此奴の言葉は眞だらう

ダリヤの行方は分つたか　バルギーの様子は探つたか

早く知らしてくれないか　気が気でならぬ此の場合

言へば盗人は首を振り　私はコオロといふ男

一番槍の功名を　致さんものと取るものも

取りあへずして飛び出し　神谷村をのり越えて

ハル山峠の頂上に　登つて見れば行く人の

話の中にダリヤ姫　バルギーによう似た二人連れ

神谷村の神の家に　匿れて居るといふ事を

敏くも耳に入れました　それゆゑ後へすたすたと

引き歸したる次第です　屹度二人は神谷の

村に匿れてゐるでせう　アイタタツタ　アイタタツタ

向かふ脛をばすりむいて　これこの通り血糊めが

ぼとぼと流れてをりまする　早く助けて下しやんせ

お前のためにこんな目に　遇うた私を捨てたなら

忽ち神の罰當り　ダリヤの姫は手に入らず
あなたも終にや谷底へ　スツテンドウと轉げおち
えらい目見るに違ひない　アア叶はぬ叶はぬかなはない
目玉とび出すやうだわい　アイタタタツタ　アイタタツタ

玄「エイ、碌でもない役にも立たぬ蠅蟲めツ、こればかりの創に泣き面をする奴があるかい、よう今まで泥棒を稼いでをつたものだなア。これやコブライ、貴様がしやうもない子供の言うた事を眞に受けて飛び出さうとするものだから、こんな目にあつたのだ。エエもうかうなりや仕様がな、どうせ此處を通らにやならぬ一筋道だ。神谷村に居るとすりや、いづれ此處にうせるだらう、ほんとに譯のわからぬ野郎だなあ」
コ「勝手になさいませ、天來の救世主天帝の化身と大看板を打つたお前さまが、ダリヤ姫の所在くらゐ分らぬといふのはテツキリ此の世を騙る賣僧坊主だ。お前さまも、もつとは天眼通が利いてゐるかと思つたに、交際へばつき合ふほど金箔

が剥げて、おまけに鼻持ちのならぬ糞坊主だ。もうこんな事は止めますわ、サア
今までの日當をどつさり下さいませ。のうコオ口お前も確りして立ち上がれ、此
奴の懐中の金をぼつたくらうぢやないか。泥棒はお手のものだからのう」

コオ「それやさうだ、俺ももつと氣の利いた坊主だと思つてゐたに愛想がつきた。
慈悲も情けも知らぬ糞坊主だ。俺がこの通り向かふ脛をやぶつて苦しんでをるの
に、お經の一口も言うてくれるぢやなし、惡口を叩くといふ不敵の惡僧だ。どう
だ二人してバラしてやらうぢやないか」

「エン、こんな惡僧をバラすぐらゐは筭で蝶を押さへるよりも容易い事だ。お前
は其處へ立つて見てをれ、俺が荒料理してやる。もうかうなりや破れかぶれぢや、
ヤイ賣僧坊主、きりきり懐中物をすつかり渡せ、【四】の【五】の言ふと【六】
な事は出来ないぞ。【七】轉【八】倒【九】るしみもがいて【十】（澁）面つく
つてももはや【百】年目だ、なにほど迷惑【千】萬な顔をしても此の儘にして
【をく】（億）といふわけにや行かぬ。サア懐中物を残らず【ちよう】（兆）戴
せうかい」

玄げん「アハハハハ。おい小盗人野郎、俺をどなたと心得てをる。オーラ山において三千の部下を擁し、泥棒の大頭目としてその名も高き玄真坊だぞ。名を聞いてさへ驚くシーゴー、ヨリコ姫は俺の部下だ、見事お前等の細腕で盗れるなら取つて見よ。ある時は泥棒となり、ある時は救世主となり、千變萬化の活動をいたす天真坊だ。素より天眼通なんか分つて堪らうかい」

コ「ヤアそいつは一寸氣が利いてをる、ヤ大いに分つてをる、そんなら追撃は一段落をつけて、改めて玄真坊頭目の片腕とならうぢやないか、のうコオ口、お前だつて泥棒より外にする所作がないのだから、よもや不足はあるまい」

コオ「何分兄貴、宜しう頼むわ、玄真坊頭目の前、お取りなしを願ひます」

玄「アハハハハ、面白からう、併しながらここ暫くは猫を被つて天帝の化身で澄まし込んでみなくては仕事が出来ないからう。ダリヤ姫をどうしても吾が手に入れなくては肝腎の仕事が出来ない。彼奴はスガの港の富豪の娘だから甘く彼奴をひつつかまへ、ウンと言はしたが最後、一躍して長者の主人だ。さうなりや貴様等は一の番頭二の番頭に抜擢してやらう。アアいう富豪のレツテルを被つて泥

棒ぼうをしてをりや滅多めったに足あしのつく事ことはないからのう」

ココ成なるほど、お説せつご尤もつとも、如何いかにも左様さやう候くらへ、名案めいあん名案めいあん」

玄真坊げんしんぼうは兩手りやうてを振り握にぎり拳こぶしで胸板むないたを交かはる交かはる打うちたたき雄猛をたけびしだした。

アハハハハツハアハハハハ 幼少えうせうの時ときからこの俺おれは

どてらい事ことが大好きだいすきで 何かなに大きな芝居しばいをば

打うつてやらうと朝夕あさゆふに 思おもひ込んだがやみつきで

ヨリコの姫ひめをちよろまかし オーラの山やまに三年みつとせぶり

岩窟いはやを構かまへていろいろの 手段しゆだんを廻めぐらし三千さんぜんの

部下ぶかを集あつめて月の國つきくに 七千餘國しちせんよこくを己おのが手てに

掌握しやうあくせむと企たくらみし その魂膽こんたんも水みづの泡あわ

三五教あななひけうの梅公うめこうに 肝腎要かんじんかなめの牙城がじやうをば

荒あらされ今は是非いませひもなく 第二だいにの策戰計さくせんけい劃かくを

遂行すゐかうせむとハルの湖うみ 浪押なみおしわけて打うち渡わたり

スガの港みなとの富豪ふうがうが
娘むすめのダリヤに目をかけて

一旗ひとした擧あげむ吾わが企たくみ
色いろと戀こひとの二道ふたみちを

かけたる俺おれの目算もくざんは
肝腎要かんじんかなめの處ところになり

どうやら畫餅くわへいとなりさうだ
とは言いふもの人間にんげんは

七轉八起しちてんはつきといふぢやないか
一度いちどや二度にどや三度さんど四度よど

失敗しつぱいしたとて構かまはない
あくまで初心しよしんを貫徹くわんてつし

行く處ところまではやつてみる
それが男子だんしの本領ほんりやうだ

コブライ コオ口の兩人りやうにんよ
天下無雙てんかむそうの英雄えいゆうは

玄眞坊げんしんぼうより他ほかにない
世よの諺ことわざに言いふ通とほり

勇將ゆうしやうの下もとに弱卒じやくそつは
決けつして無ないのはあたりまへ

お前はまへこれから強卒きやうそつと
なつて一肌脱ひとばだぬいでくれ

俺おれの天下てんかになつたなら
貴様きさまの要求えうきうは何なんなりと

二つ返事ふたへんじで聞きいてやる
わが成功せいこうの曉あかつきを

指折ゆびをり數かずへ樂たのしんで
涎よだれを手繰たぐつて待まつがよい

アア勇ましや勇ましや

人は心の持ちやうだ

なにほど失敗したとて

心の土臺が確りと

据つてをれば構はない

ああ惟神々々

梵天帝釋自在天

大國彦の御前に

畏み畏み願ぎまつる

エへへへツへエへへへ

愉快の事になつて来た

既に天下を取つたよな

何とはなしに心持ち

ダリヤとバルギーが出て来た

此度はぬからず引つ捕へ

ウンと言はしてくりよ程に

バルギーの奴は懲戒に

手足も指もバラバラに

バラしてしまはにや後のため

吾が目的の邪魔になる

そこをぬかるな合點か

エへへへツへ面白い

いよいよ面白なつて来た

なぞと、元氣よく大法螺を吹いてゐる。そこへバルギーは村人に腰骨を叩かれ

た痛さに竹杖をつきながら、ヒヨロリヒヨロリとやつて来た。玄眞坊は大喝一聲、
「コリヤ泥棒奴、ダリヤ姫をどういたした。早く白状いたさぬと貴様の命がないぞよ」

バル「ヤアこれは天帝の御化身様、ようまあお迎ひに来て下さいました。ダリヤ姫ですかい、彼奴はさつぱりです。私ももう締めました、安心して下さい」

玄「こりや、バルギー、何を言つてをるのだ。俺の女房を連れ出しやがつて、何處へ匿したのだ。さあすつぱりと白状せい」

「俺は又、天帝の御化身様に女房があるとは知らないものだから、ダリヤ姫に頼まれて「スガ」の港に送るべく途中までやつて来たところ、神谷村の村端まで出て来ると、白い煙となつて天へ上つてしまひ、何ほど喚いたとて呼んだとて、春風の梢を渡る聲ばかりだ。本當にあのダリヤといふのは人間ぢやなかつたらしいよ」

「馬鹿申せ、左様の事を言つて何處かに匿しておいたのだらう、白状せないと貴様の命を取らうか」

「何ほど命を取られても恩人の行方を貴様らに知らしてなるものか、男の口から一旦言はぬと言ふたら舌を抜かれても言はないのだ。そんな安つばい男と思つてもらつては、このバルギーさまもいささか迷惑だ。こりや賣僧坊主、それに不足があるのならどうなりと勝手にしたがよい。こりや其處にゐるのはコオロにコブライぢやないか、まだこんな賣僧についてゐるのか、もうよい加減に目を醒せ」
コブ「俺も賣僧だ賣僧だと思つたが、今聞いて見れば大變な抱負をもつた偉丈夫だから、いま親分乾兒の約束をしたのだ。もうこの上親分に毒づいて見よ、命令一下、貴様の命は貰うてやるぞ」

バル「ハハハハハ、猪口才千萬な、サアかかるならかかつて見よれ。俺はかうして腰骨を打つて杖に縋つて居るものの、貴様等の三匹や五匹は物の數でもない。さあどうなりと爲たがよいワ。首から斬るか腕から斬るか、さあ何處からなつと斬つて見よ」
と體一面龍の刺青をした肌を脱ぎ叢の上にどつかと坐し、三人の面を瞬きもせず睨めつけてゐる。

(大正一四・一一・七 舊九・二一 於祥明館 加藤明子録)

第七章 夢の道(一七九六)

空一面に漲つた灰色の雲は所々綻びて落ちさうな紅い雲が、所斑覗いてゐる。山下の破れ寺の軒には椶の大木が凧に吹かれて、一枚一枚羽衣を剥がれ慄うてゐる。白黒斑の烏が二三羽、縁起の悪さうなダミ聲でガアガアとほえてゐる。赤茶氣になつた瓦や壁の落ちた高い塔が、あたりの全景を獨占してゐる。諸行無常を告ぐる梵鐘の聲は、この寺からとも見え遠く遠く響いてゐる。霜柱の立つた半ば朽ちたる木造りの土橋をトボトボ渡る一人の男、青竹の杖をつきながら、腰を屈めて「頼も頼も」と力なげに呼ばはつてゐる。破れ障子をサラリと引きあげ、ニユツと面を出したのは、形相の凄じい尼僧であつた。尼僧は汚なさうに面をかめながら、

尼あま「お前まへは何處どこの者ものだい、何用なにようあつて此處ここへふん迷まようて來きたのだ。お前まへさまの來くる處ところぢやない、とつとと歸かへつて下ください」

男をとこ「私わたしはバルギーと申まをしまして、チツとばかり名なの知しられた男をとこです。お尋たづねしたもの者があつて此處ここまでやつて參まゐりました。玄眞坊げんしんぼうといふ和尚おしやうは此この寺てらに參まゐつてをりませぬか」

「そんな方かたは知しりませぬよ。とつとと歸かへつて下ください。お前まへさまは此處ここを何處どこだと思おもつてゐるか、尼あまばかりの住すんでゐるお寺てらで、男禁制をとこぎんせいの場處ばしよだ。「男子だんし不可入いゐるべからず」と立札たてふだが立たつてゐるのに氣きが付つかないのかい」

「アア左様さやうでございましたか、つい、日ひの暮くれまぐれに慌あわてたものですから、つい見當みあたりませず失禮しつれいな事ことを致いたしました。然しかしながらかやうに日ひは暮くれはて、あたりに人家じんかはなし、男禁制をとこぎんせいかは存ぞんじませぬが、どうかお庭にはの隅すみでも宜よろしいから、一夜いちやの宿やどを願ねがひたいものでございます」

「絶對ぜつたいになりませぬ。男子だんしにものを言いつてさへも佛ほとけの冥罰めいばつを被かうむりますから、お前まへさまの目めには何どう見みえるか知しらぬが、ここは極樂ごくらくの淨土寺じやつどじといふ立派りっぱなお寺てらでこ

ざいますよ、サアサア早くお歸りなさいませ」

と言ひながら、ピシヤリと破れ障子をしめ、プンプンとして姿を隠した。バルギーはまたもや橋を渡り、力なげに何處を當ともなく、ヒヨロリヒヨロリと歩んでゆく。半時ばかり北へ北へと進んだと思ふ時、後ろの方から「オーイオーイ」と皺枯聲を張上げながら、髪をサンバラに振り亂し、八十ばかりの黒い面した婆アが飛んで来る。バルギーはツと立止り、怪訝な面をしながら、

「私を呼んだのはお前さまかな、何用あつて呼び止められたか」

婆「私はあるの藪の畔に、グレ宿をしてゐるお熊といふ婆アだ。どうか今晚は私の所へ来て泊つて下さるわけにはゆこまいかな」

バル「ヤアそいつア有難い、しかしお婆さま、小さいといつても宿屋をしてる以上は、二間や三間はあるのだらうな」

「御心配なさるな、小さいといつても木賃ホテルだ。お前の一人や二人は、どこ

の隅でも泊めて上げる」

「宿賃は幾らだな」

「幾らでも可いから、お前のやらうと思ふだけ下され、別に欲なこた言はないかな」

「ヤア、そんなら、宿屋がなくて困つてたところだ、泊めて頂かう」

と婆アの後ろについて、雑草茂るシクシク原を四五丁ばかり従いて行くと、家のぐるりには牛馬の糞が堆く積み上げられ、臭氣紛々として鼻をついて来る。

バル「婆さま、どうも臭い家だな。牛馬もゐないのに、なぜこのやうに澤山牛糞や馬糞がたまつてゐるのだい」

婆「毎日泊らつしやるお客さまが、牛糞や馬糞をドツサリたれて歸るものだから、これこの通り……塵も積れば山となるといつて、糞の山が出来たのだよ」

「フフン、こいつア妙だ、人間が牛グソをたれ馬糞をたれるとは聞き初めだ。そんな人間の面が見たいものだなア」

「今の人間はみんな獣だよ、それだから狐グソもたれる、馬糞もたれる、狸の夕メ糞も裏の方に澤山放りたれてあるから、何なら御案内せうかな」

「イヤお婆さま、モウ結構です。とにかく雨露さへ凌がして頂けば結構だから、

どうか門の戸をあけて下さいな」

「ヨシヨシあけて上げやう、ビツクリをしなさるなや」

と破れ戸をガタつかせ、パツと開けた。見れば牛頭馬頭の妖怪が何十とも知れず、庭一面に荒蓆を敷き、胡座をかき、人間の太腿や腕の血のたれる奴を甘さうに齧つてゐる。こいつアたまらぬと、バルギーは逃げ出さうとすると、お熊は俄かに眞黒けの大熊となり、黒い太い爪でバルギーの頭をグツと握り、

「コリヤコリヤ泥棒、逃げやうと言つたつて、いつかないつかな、逃がしはせぬぞ。汝も味の悪いやせつぽしだけれど、まだチツとばかり血が通うてゐるやうだから、ここで一つ荒料理をして食つてやる。あの通り澤山なお客さまが泊つてござるけれど、まだ一人前足らぬので、あれあの通り、大きな口をパクつかせて待つてゐらつしやる、汝がよい餌食だ、イヒヒヒヒ、何とマア、バカ野郎だな、尼寺では突き出され、木賃宿へ泊つたと思へば體を食はれる、何といふお前は頓馬だらう、憐れな代物だらう。然しながらここにゐる、牛頭馬頭のお客さまは何れも汝に金と命を奪られ、畜生道へおち込んで、行く所へも行けず飢渴に迫り、こ

の木賃宿で蝨だらけになつて逗留してござるのだ。かうなるも皆汝が作つた罪業の報いだから、誰に不足はあらうまい」

バル「もしもしお熊さま、そんな殺生なことを言はずに、どうぞ見逃して下さいな。一生の願ひですから、キツと御恩は酬いますから」

熊「バカを言ふない、泥棒をするやうな奴に、そんな徳義心があつてたまらうかい。お前はスガの里のダリヤ姫に戀慕の心を起した揚句、彼が歡心を得むとして、空兵衛の家へ泥棒に入り込み、家内中をふん縛り、有金を残らずひつ攫へ、門口の深井戸へ落ち込み、袋叩きに會つて追放された代物だらうがな。そんな奴は萬古末代助けるわけにはゆかぬのだ。この婆がそんな事をせうものなら、惡魔の大王様よりヒドいお目玉を頂戴せなくちやならないのだ」

「いかにも、せぬとは申しませぬ、泥棒に入りました。しかしながら盗つた物はすつかり返したのですから、返した後まで罰せられちや耐りませぬワ、返せば元々ぢやありませんか」

「この問題は問題として、汝はこれまでずるぶん澤山な女を強姦し、人を殺し、

金を盗つたであらうがな、あの牛頭馬頭のお客さまをみよ、みな覚えがあらうがな。ここは汝の作つた地獄だから観念したが可からうぞや」

牛のやうな角を生やした眞黒けの毛だらけの男、のそりのそりと、お熊、バルギーの前ににじり來たり、カラ　カラ　カラと大口をあけて打ち笑ひ、

男「コーリヤ、バルギー、俺の面を見知つてゐるか、ヨモヤ忘れは致そまいがな。

二十三夜の月待の夜、俺の大事の娘を二三人の小盗人と共に奪ひ取りにふん込んだ矢先へ、俺は娘を渡さじと力かぎり抵抗したら、汝は牛刀を引き抜いて、俺の

腹をグサツとつき、苦しむ俺を尻目につけ、悪口を叩いて歸つた事があらうがな。サ、よい所へ來た。これから俺がその恨みをはらすために鬪り殺しにした上、肉

も骨も叩いて、この牛腹に葬つてやるつもりだ。俺も折角人間と生れて、汝のために命を奪られ、その怨恨が重なつて、牛頭の魔王とまで成り下つたのだ、修羅

の妄執をはらすのは今この時だ。イヤイヤ俺ばかりでない、此處にゐる連中は、どれもこれも汝の毒手にかかつた憐れな人間の成れの果ばかりだ。ジタバタして

も、モウ逃れつこはないぞ、念佛でも唱へて覺悟をしたが可からう。てもさても

小氣味のよい事だな、アハハハハ

と一同の牛頭馬頭の怪物は聲を揃へて、天地もわれむばかりに鯨波の聲をあげた。

バルギーは進退維谷まり、一生懸命にダリヤ姫から聞覚えた三五教の數歌を、

細いかすつた聲を絞つて、「一二三四五六七八九十百千萬」と、やつとの事で唱

へ上げた。牛頭馬頭およびお熊など、一同の妖怪は次第々々に影うすくなり、遂

には跡形もなく消え失せた。あたりをみれば、枯草生え茂る細路の傍に自分は着

衣を泥まぶれにして倒れてゐた。バルギーはやうやくにして立上がり、

「ヤーア、大變な夢を見たものだ、コラ一體何處だらう。暗さは暗し、斯様なシ

クシク原にねるわけにもゆかず、道通る者はなし、困つたものだ。エー仕方が

ない、コンパスの續く所まで行つてみやう。又此のやうな所に横たはつてゐて、

あんな恐ろしい夢を見ては仕方がない

と呟きながら、屠所に曳かるる羊のごとくヨボヨボとコンパスの運轉を始めかけ

た。道の傍に以前古寺で出會つた尼僧がただ一人、青黒い面をニユツと枯草の中

から現はしながら、

『モシモシ』

と呼んでゐる。バルギーはギョツとしながら、

『ヤア、お前さまは最前お目にかかった尼僧ぢやないか、こんな所に何して御座るのだい』

尼『私ですかいな、貴下よく御存じでせう、ダリヤ姫でございますよ』

バル『ヘーン、馬鹿にしなさんな、ダリヤさまはそんな青黒いしなびたお面ぢやありませんわ。お前さまは大方豆狸だらう、最前の尼僧に化けてゐるのだらう』

『イエイエ、決して決して、私は豆狸でも何でもございませぬ。タニグク谷の泥棒の岩窟に玄眞坊がためにおびき出され、その急場を遁れむと鬼心を出して、自分の美貌を楯に、お前さまに惚れたと見せかけ、吾が家まで送らさうとした悪念の強い、私は副守の靈でございます。どうぞ一言許してやると仰有つて下さい。さうでないとは私は浮かばれませぬから、神様の世界はチツとの不公平もございませぬ。あなたを欺いただけの罪はどうしても償はねばなりませんので、かやうな所にウロついてをりまする』

「いかにも、よくよく見ればどつか似た所があるやうだ。ヤ、私も貴女に對しては實に濟まない無禮な事を申しました。然しながら許すも赦さぬもありませぬ、どうぞ安心して下さいませ」

「妾は貴下をウマウマと騙した上、畏れ多くも罪の身を有ちながら、あなたに御意見を申すつもりで神様の宿りたまふお頭を三つばかり叩いたでございませう。

その罪で頭はこの通り禿テコとなり、かやうな所にウロついてゐるのでございませう。頭を打つべき資格なくして頭を打つたのが大變な罪となつたのでございませう。

「何とマア、神様の規則といふものは難しいものですな。そんなら畏れながら、私に加へた無禮の罪を、更めて赦しませう」

「ハイ有難うございます。どうぞ貴下のお手でこの扇子をもつて私の頭を三つ打つて下さい」

「ヤア、これはこれは御均等さまに、左様ならば仰せに従ひ御免を蒙りませう」といひながら、軽くポンポンと扇子の胸で三度打つた。これつきり尼僧の姿はパツと煙のごとく消えてしまつた。「オーイオーイ」と向方の山の端から吾が

名を呼びとめる者がある。その聲に何となく聞覚えがあるので、バルギーは引きずらるる如き心地しながら、聲する方に何時とはなしに進んで行つた。忽ち天を焦がして東方より一大火光が現はれ、バルギーの面前に落下し、ドンと地響うつて爆發した途端に氣がつけば、自分はハル山峠の麓の草原に雁字搦みに縛られて倒れてゐた事が分つた。バルギーは縛められたまま、漸くにして身を起し、草の上へ胡座をかき、空ゆく雲を眺めてゐると、そこへスタスタとやつて來たのは、ダリヤ姫、玉清別、および數人の村人であつた。

ダリ「オヤ、バルギー様、おいとしや、何者にさう縛られたのでございますか、サアサア皆さま、早く縛めを解いて上げて下さい」

バル「ハイ有難うございます、思はぬ奴と諍ひをやり、何分腰骨を打つて弱つてゐたものですから、脆くも敵にくくられ、氣を取失つてゐたやうです。ようまあー來て下さいました」

ダリ「バルギーさま、あなたは本當に義の固い方ですね。玉清別の神司に神素蓋の鳴大神降らせ玉ひ、ハル山峠の麓において、玄眞坊その他の者に責られ、妾の在

所を詰問されながら、命を的にお隠し下さったその義侠心、神様も大變おほめ遊ばし、一時も早く助けに行けよとの御宣示、取るものも取り敢ずお助けに参りました。どうか御安心下さいませ」

バル「イヤ、これはこれは恐入りまする。御禮の申し上げやうもございませぬ。

只この通りでございます」

と落涙しながら合掌する。

玉清「バルギー様、あなたの男氣には感心いたしました。どうか私の家へ引き返し、腰の傷が癒るまで御養生なさつたら如何ですか、今に駕が参りますから」

バル「私のやうな悪人をそこまで思うて下さいますか、ヤ、モウ之かぎり悪い事はいたしません。天性の善人に返り、社會のためお道のために一生を捧げる考へでございます。何分宜しうお願い申します」

これよりバルギーは村人に擔がれ、ダリヤ姫と共に玉清別の神館に病を養ひ、ダリヤ姫の手厚き介抱を受けながら、一ヶ月ばかり逗留する事となつた。ああ惟

神靈幸倍坐世。

(大正一四・一一・七 舊九・二一 於祥明館 松村眞澄録)

第二篇 迷想癡色

第八章 無遊怪(一七九七)

オーラ山に立籠り、星下しの藝當を演じ、三千人の小盗兒を集め、印度七千餘國を吾が手に握らむと雲を掴むやうな泡沫に等しく、天に輝く星を竿竹でガラチ落とすやうな空想を描いて、不格好に出来あがつた鼻つ柱をピコつかせてみた玄眞坊は、三五教の梅公別に踏み込まれ、最愛の妻ヨリコには愛想をつかさね、兄弟分と頼むシーゴーには絶交され、折角の策戦計畫もいよいよ畫餅に歸し、わづ

か三百の悪黨輩を引具し、第二の作戦計畫を遂行せむと、門の女が又しても男を
好くやうに彼方此方とウロつき廻り、遂にはスガの港のダリヤ姫に現を抜かし、
數多の部下に別れ、タニグク山のシヤカンナが岩窟に天晴れ救世主と化けこんで
罷越し、シヤカンナには荒肝を挫がれ、ダリヤには御丁寧に顔に落書までされ、
その上後足で砂をふりかけ、ドロンと消えられた悔やしさに、シヤカンナの部下
の應援を頼み、自分はコブライと共に山坂を駆けめぐり、玉清別が館にダリヤ姫
の忍びある事をつきとめ、執念深くも姫を奪取せむと蛇が蛙を狙ふやうに、鎖さ
れた門の前にコブライと共に夜警の役を勤めてゐた。そこへ玉清別の倅に身を現
じた神の子の言靈に打ちまくられ、ダリヤ姫は既にすでに玉清別の館を逃げ出し
たりと信じ、ハル山峠の麓までやつて来たが、同じシヤカンナの部下であつたコ
オロと出會し、バルギーを叩き伸ばし、ここに三人は手を携へて、ダリヤのこと
は兔も角も鉢巻締直し、一奮發をやつて天下の耳目を驚かすやうな大事業を遂行
し、天晴れ英雄豪傑ともてはやされなば、ダリヤのごとき美人は求めずとも雨の
降るごとく寄つて来るだらうと獨り合點し、不細工な目鼻を一所へ集中させ、出

齒をむき出し、禿茶瓶から湯氣を立ててニタリと笑ふたその御面相は、平素苦蟲をかねだやうな難かしい男も、思はず吹き出さずにはをられないやうなスタイルであつた。

玄眞坊はコブライ、コオ口の兩人を後前に従へ、ハル山峠の頂上に辿りつき、東南の方を瞰下すれば、タラハン城は蕞高く壁白く夕陽に輝いて、何ともなく壯大な氣分が浮いて來た。玄眞坊は頂上の右側なる大岩の上にドツカと團尻を卸し、夏の夕べの蟻の蚊を吸ふやうな調子で口をパクパク開閉し、腮をしゃくりながら獨り言、

「ヤア見渡すかぎりの連山は樹木繁茂し、土地肥えたる原野は際限もなく展開し、タラハン城市は何となく殷盛を極めたやうな光景が目映つてゐる。大丈夫たる者當に此の世において永住し、天下に覇をなすべきである。シヤカンナも、かのタラハン城の左守として時めいてをつた奴、あれくらゐな男が左守になれるくらいなら、吾が法力と才智をもつて臨めばタラハン城を吾が手に入れるくらいは何の手閒ヒマが要るものか、オオさうぢやさうぢや、これから一つ頭の改造をなし、

大計畫に取りかかつてやらう。ついでには棟梁の臣がなくては叶ふまい、何とかして好い家來が持ちたいものだが、三千の部下を引きつれたこの玄眞坊も、今日のところでは實にみじめなザマだ。榮枯盛衰常ならざるが人生の経路とはいひながら、泥棒の小頭をやつてみたコブライや小盗兒のコオ口兩人が左守、右守ではたうてい駄目だ。アア何とかして、せめてはシャカンナの部下を糾合し、またオーラ山からひつぱり出した三百の部下を集めて、種々の訓練を施し、天下を取つてみねば、自分の肚の蟲が治まらない。ダリヤ姫も捨て難いが、タラハン城も捨て難い、ナアニ精神一到何事か成らざらむやだ」

と岩上に突つ立上がり、東南の空をハツタと見下したその眼光、どこともなく物凄く見えた。コブライはこの様子を見て、吹き出しながら、

「ウツフフ、もし玄眞坊さま、何だか知りませぬが、大變な雄猛びでございませぬ。まるきり枯木に花が咲くやうな御計畫のやうに、ちよつと盗み聞きをいたしました、一體どんな御計畫ですか、タラハン城なんか到底駄目でせう。あの城内には綺羅星のごとき名智の勇將が林のごとく竝んでをりますれば、なにほど

玄眞坊さまが天來の救世主でも、ちよつと挺には合ひますまい。空想にふけるも結構だが、ここは一つ相應の理といふ事をお考へにならないと、御身の破滅を招くかも知れませぬよ。私は忠實なる臣下として、あなたの將來のために御忠告を申し上げます

玄「ナア二、盗人の分際として英雄の心事が分るものか、まづ細工は粒々、俺のする事を見てをれ」

コブ「盗人の分際とおつしやいますか、あなただつて盗人の親分ぢやありませんか。殊勝らしく數珠を爪ぐり、金剛杖をつき、救世主と化けこんでござるが、心の中はやはり虎狼に等しい大泥棒、かういふと、チツタお氣にさはるか知りませぬが、あなたの御面相には凶兆が現はれてゐますよ。匹夫の言にも亦眞理ありで、吾々の言ふ事もチツとは耳を傾けて聞いてもらひたいものですな」

「ソリヤお前の言ふ事も聞かねばなるまい、然しながら俺だと一足飛にヒマラヤ山の上まで上がらうといふのぢやない。これから順を逐うて味方を増やし、力を養ひ、其の上においていよいよ實行に取掛るつもりだ。何といつても三千人の

部下を統率して來た腕に覺のある玄眞坊だからのう」

「なるほど、ソラさうでせう、あなたの御器量はコブライといへども、毛頭疑ひはいたしませぬ。然しながら何をやるにも金が先立つぢやありませんか、その金は何れどつかに隠してあるのでせうなア」

「ソリヤ祕してあるとも。あのタラハン城を見よ、町の所どころに白い藏の壁が見えるだろ、あれは残らず俺の財産がしまひ込んであるのだ」

「アハハハなにほど財産がしまひこんであつても、自分が所有主でない限り、公然とひつぱり出して使ふわけにはゆきません、如何なさるお考へですか」

「そこが天帝の化身、天來の救世主だ。この地の上にとあらゆる財産はみな神の造つた物、手段をもつて取り出し使ふつもりだ」

「あ、さうすると、あなたも矢張り、天來の救世主の假面を脱ぎ、元の泥棒の親方と還元なさる御計畫と見えますな」

「千變萬化變現出沒きはまりなきが、大英雄の本領だ。キリストも言つたでないか……人は神と金とに仕ふることは能はず……と、大宗教の法主が不渡手形を發行

したり、貴族院議員が詐欺廣告をやつて貧乏人の金を絞つたりする世の中だ。何といつても金が元だ。汝も俺の目的が達したなれば、キツと重く用ゐてやる。それまではどんな事でも俺のいふ事は、善にまれ悪にもあれ服従するのだ。第一お前の肚さへ定まれば、この玄眞坊は神算鬼謀のあらむ限りを盡し、大望を起してみやうと思ふのだ」

「なるほど、こいつア面白からう。然しながら貴下が天下を取つた時や、このコブライは、キツと左守か右守にして下さるでせうなア」

「ウーン、又その時やその時の風が吹くだらう」

「その時の風の吹きやうによつては、どんな運命に陥れられるかも知れませぬな。そんな頼りないお約束は出来ませぬワ」

「今から取らぬ狸の皮算用を行つてをるよりも、まづ實行力が肝腎だ。實行さへすれば、お前が嫌だといつても、俺の方から頼んで左守になつてもらふワ、論功行賞は成功した後の事だ。サ、これから一つ、俺も數珠を投げ捨て、金剛杖をへし折り、天晴れ泥棒の張本石川五右衛門の再來となつて、大活動をしてみやう」

といひながら、數珠をズタズタにむしつて、岩上にブチつけ、百八煩惱にかたどつた、百と八つの菩提樹の玉は雨霰と四方に飛び散り、金剛杖は三つにへし折られ、恨めしさうな面をして大岩の麓に倒れてゐる。玄眞坊はさすがに數珠に幾分の執着が残つたか、飛びちる數珠の玉を眺めながら、

南無百八煩惱數珠大菩薩、南無大救世主遍照金剛杖如來、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

と手向けの言葉を残り、岩上を降つて、峠のあまり廣くない赤土の道へ出た。コオロは旅の疲れで、コロリと横たはり雷のごとき鼾をかいてゐた。玄眞坊はこれを眺めて、

「オイ、コブライ、コオロといふ奴、氣樂な奴ぢやないか、こんな所に何時追手が來るかも知れないのに、雷のやうな鼾をかいて寝てゐやがる。一つ揺すり起してみたらどうだ」

コブ「玄眞坊さま、このコオロといふ奴、何が何だか分りませぬぜ。ワザとに狸の空寝入りをして、貴下と私の計畫を残らず聞取り、タラハン城へでも行つた時

にや、恐れながらと内通をする奴かも分りませぬ。どうも此奴のそぶりが變だと思つて、始終注意を怠らなかつたのですが、こんな所で躰をかくとはますます怪しいぢやありませんか。災ひを未然に防ぐは智者のなすべきところ、二葉で禍根を刈り取るが將來の安全策と心得ます。斧鉞を用ゐても手に合はないやうになつてからは、最早いかんともすることが出来ずまい」

玄「さう深案じをするものでない、この面で何が出来るものか、マア心配をするな、俺に任しておけ」

「ヘーン、さうですかいな、そんなら私の提案をどうぞこのコオロに話さないやうにして下さいや」

「ウンよしよし、いらざる事を喋つて、同僚間に内証を起させるやうな拙劣な事はやらないよ、マ、安心したが可いワ」

コオロは「ウーン」と手足を伸ばし、ワザと三つ四つビリビリとふるひ、「アーアー」と缺伸をつづけて後、目をこすり、どん栗眼をギロリとむき出し、「アーアーよう寝たよう寝た、たうとう華胥の國の國王殿下になりかけてゐたの

に、惜しい夢が醒めたものだ。……命にも替へて惜しけくあるものは、みはてぬ夢のさむるなりけり……だ。ヤ、玄眞坊さま、ア、コブライの哥兄、えらい失禮をしたな」

玄「よく寝たものだな、しかしお前は華胥の國の國王になつた夢をみたといふが、そらよい辻占だ、その夢を俺が買つてやらう」

コオ「ハイ、有難うございます、しかしながらこんな夢を金銭で賣るわけにはゆきませぬ。所はハル山峠の頂上、常磐堅磐の岩の根で見た夢ですから、キツとこれは實現するでせう、絶対に賣る事は出来ませぬ」

「何といつても夢ぢやないか、元がかかつてゐるのぢやなし、百兩やるから賣つてくれ」

「……………」

コブ「モシ、玄眞さま、そんなバカなこた、おいたら如何ですか、折角の計畫が夢になつちや約りませぬがな。無形の夢を有形の寶で買はうとは、チツと貴方も頭が悪いですな」

玄げん「バカを言いふな、夢ゆめは無むといふ、無むは無むなり、無むより有うを生しやうず、有うにして無むなり、無むにして有うなり、これ即すなはち言げん靈れい學がく上じやう【ア】の言げん靈れい活くわつ用ようだ。【ア】は天てんなり父ちちなり、大だい宇う宙ちゆうなり、大だい權けん威ゐなり、どうしてもこの睡すゐ眠みん中ちゆうに見みた靈れい夢むを俺おれの手てに入いれねば、目もく的てきが成じやう就じゆせない。こらキツと神かみさまがコオロにお見みせなさつたのだる。お前まへと俺おれとがタラハこく國せんりやうを占せん領りやうし、國こく王わうにならうとまで計けい畫くわくを立ててゐる、その足あし許もとで見た夢ゆめだから、現げん幽いう一いつ致ちだ、こんな瑞ずゐ祥しやうは又またとあるまい。それだから、コオロが賣うらないと言いへば、その夢ゆめをこの玄げん真しんが取とつてしまふのだ。元もとより人ひとの物ものを奪とるのは俺おれの商しやう賣ばいだから、アハハハ」

「なんぼ泥どろ棒ぼうが商しやう賣ばいだといつても、人ひとの夢ゆめまでふんだくるとは、あまり念ねんが入いりすぎるぢやありませんか」

「水みづも洩もらさぬ仕しく組みといふぢやないか、念ねんには念ねんを入いれ、細さいより微びに入いつて、注ちゆう意いをめぐらすのが、正まさに智ち者しやのなすべきところだ。至し大だい無む外わい、至し小せう無む内ないの活くわつ用ようが即すなはち神かみたる者ものの資しかく格かくだ」

「貴あな方たは今いま、數じゆ珠ずを捨すて、金こん剛かう杖じやうをへし折をり泥どろ棒ぼうに還くわん元げんし、天てん帝ていの化け身しんを廢はい業げふな

さつたぢやありませんか。最早只今となつては、神様呼ばはりは通用いたしませ

ぬよ

「アハハハ、神にもいろある、俺は正神界は辭職したが、これから邪神界の神となるのだ。泥棒にも神さまがあるよ、俺はこれから泥棒の神だ、ボロンスの神だ」

「へー、フンさうすると貴方は天國淨土の死後の安住はお望みにならないのですか」

「オイ、泥棒の分際として、あるひは人の國を占領するといふ豺狼の心を抱持しながら天國淨土もあつたものかい、靈肉ともに地獄の覇者となつて活動するのだ。極樂淨土へ行つて百味の飲食を與へられ、蓮の臺に安逸な生活を送り無聊に苦しむよりも、地獄の巷に驅け入つて、命を的の車輪の活動の方が何ほど楽しいか知れやしないワ。極樂なんか俺たちの性に合はないところだ」

「ウンなるほど……チギル秋茄子、地獄ご尤もだ。そんなら私も玄眞坊の惡鬼羅刹が乾兒となつて修羅の巷に突入し、獅子奮迅、暴虎憑河の勢ひをもつて、夕ラ

ハン城を根底から、メチャメチャに覆へし、お目にかけて御覽に入れませう、イツヒヒヒヒ

玄「オイ、コオロ、どうしても俺に賣つてくれないか」

コオ「ハイ、賣りませう。その代り私に一つの注文があります。金は要りませぬ。私に命令権を與へて下さい」

「よし、與へてやる。その代り夢は確かに此方へ受取つたぞ」

コオ「口は横を向いて一寸舌を出し、素知らぬ面して、

「ヤ、有難い、サ、これから玄眞坊だらうが、コブライだらうが、俺の命令に服従するのだ」

といひ、肩を聳かし、にはかに元氣づく。

玄「ハハハ仕方のない代物だな」

コブ「ヘン、こんな奴の命令を聞いて堪るか、イヤンチヤラ可笑しい、臍茶の至りだ。しかし玄眞さま、こんな山の上に何時まで居つても、食物もなし、何處の人家を襲うて腹を拵へやうぢやありませんか。日も西山に傾いたし、麓の里ま

ではまだ三里もございますよ、サ、参りませう[㊦]
とコブライは勝手覚えし山路を、先に立ち、三人急坂を降り行く。

(大正一五・一・三一 舊一四・一二・一八 於月光閣 松村眞澄録)

第九章 踏違ひ(一七九八)

春山峠の南麓に春山村といふ全戸數七八戸の小部落が彼方あなたに散らばつて
ゐる。いづれの家も軒は傾き、壁はおち、別に煙突はなくとも壁の落ちた碁盤形
の壁下地の穴から、赤黒い煙が朝晩に立上つてゐる。この村の一番高い景勝の位
置を占めた一軒家にはカンコといふ一人の男が名のつかぬ病にかかつて、日々な
す事もなく破れ蒲團の上に息づいてゐる。太陽が七つ下りと覺しき頃、カンコの
友人キンスがやつて来て、斜になつた戸をガラリと開けながら、
キンス「オイ、兄貴、エー、人の噂に聞けばこの頃は、お前も何だかブラブラと

體からだが勝すぐれぬやうだが、一體いったいどうしたといふのだい。俺おれア昨日きのふ夕ゆふラハン市しから歸かへつて來きたのでチツともお前まへの事ことも知しらず訪問ほうもんにも來こないで、本當ほんたうにすまなかつたよ
カンコ(元氣げんきない聲こゑで)「オー、お前まへは友達のともだちキンスだな、そらよう來きてくれた。
ママママ茶ちやでも沸わかして飲のんでくれ。そして序ついでに俺おれにも、一杯いっぱい、うまさうな
處ところを飲のまして欲ほしいものだな」

「ヨシ、お前まへの事ことなら茶ちやも沸わかしてやろう、鰹やめめ暮ぐらしでは、飯めしたき焚たきにも困こまつてゐるだ
らう、早はやう、いい嬢かかでももらつたがよからう。獨身どくしん生活せいかくもよいやうなもの、人にん
間げんといふものは、何時なんどき體からだに變へん化くわが來くるか分わかつたものぢやないからのう。乞食こじきの子こ
でもいいから女をんなと名なのついたものを探さがして來きてお前まへに世話せわしてやろうと思おもふがな、
今時いまどきの女をんなは、何どいつ奴こいつも此こいつ奴こいつも生意氣なまいきになつてゐやがつてな、風かせがふいたくらゐぢや、
其處そこらあたりには落おちては居をりくさらぬのだ。俺おれの親父おやぢの話はなしによると、昔むかしは女をんなと
いふ奴やつは三界さんかいに家いへなしとかいつて、本當ほんたうに男をとこに對たいしては頭あたまの上あがらないものだつ
たさうな、ほとんど奴隸どれい扱あつかひ玩具おもちゃ扱あつかひをされてをつたさうだが、今時いまどきの女をんなは體からだの
達者たつしやな奴やつは工女こうぢよになつて大會社だいくわいしやに抱かかへられよる、電話でんわの交換手かうくわんしゆから自動車じどうしやの運轉うんでん

手、役場の書記から巡查にまで採用され、一人前の男と肩を並べて歩くのみか、自分の人間として一番快樂な事をするにしても、男子から金をとり、高等内侍になつたり、辻君になつたり、それはそれは女の職業といふものは、あり餘つてゐるのだから、なかなか女の廢物がないので、俺もヤツパリ獨身生活を續けてゐるのだ。この頃の男子といふものは、それを思ふと、女にはチツとも頭が上りはせないワ。まるつきり女の世界だ。この間も愛國婦人會を覗いて來たが、何奴も此奴も女ばかりだつたよ」

「そら、さうだらうのう、俺は、もう、何だか、バーツとしてしまつたのだ」
「バーツとしたつて、どこがバーツとしたのだい、病氣が起つたと言ふのか」
「ウン、トツト、モウ、何の事アない、バーツとして、ネツから氣分が勝れぬのだ」

「フン、さうすると、病氣だな」

「病氣か何か知らぬが、俺は病だ」

「病も病氣も同じ事ぢやないか」

「それが、パンツとした病だ」

「パンツとした初まりは如何ぢやつたのだい」

「パンツとした病の初まりは健康體だ」

「健康體は定つてるぢやないか、パンツとした原因を聞かせと言ふのだよ」

「原因か、ウン、ヤツパリ、淫だ、淫欲から起つてパンツとしたのだ」

「淫欲から起つてパンツとした、根つからパンツとしないぢやないか。お前と俺

との間だから、何も隠す事はない、お前のためには、どんな事でもする覺悟だ。

竹馬の友ぢやないか、おほかた心の煩悶病だらう、包まず隠さず俺に言つて聞か

せる」

「笑はへんか、おほかた笑ふだらう、ヤツパリ、やめとこか、あーア、パンツと
した」

「なに、笑ふものかい、しつかり言ひ玉へ」

「そんなら、どこまでも笑はせんな」

「ウン、斷じて笑はぬ、サアサア言ふたり言ふたり」

「そんなら、言ふがな、俺が去年の夏だつたか、タラハン市の三つ丸屋へ禪を一丈買ひに行つたのだ。そしてところが、その三つ丸呉服屋の娘さまに、インジ」といふ別嬪があつたのだ。それから……：……：……：「ブーツとしたのやな」

「アツハハハハ、何故また一丈禪を買ひに行つたのだい」

「七尺は禪にして、残りの三尺を手拭にしようと思つてな、一丈の禪を切つて下さいといつたら、インジンさまが、俺の名を、細こう聞いてな、「春山村のカンコさまですか、お金はいいから、まア持つて歸つて下さい」と言つてな、キレイな白魚のやうな手でな、禪を御丁寧に包んでな、俺の懐に突込んで下さつたのだ。それからやさしい、何ともいへぬ目付をしてな、「また来て下さいよ」と仰有つたのだ。その顔見るなり、俺はな、ブーツとして目がまひさうになつたのだ。それからヤツとのことで宅へ歸つて来て、この禪は自分の股にするのは勿體ない、手拭にするのも勿體ないと、床の間にブラ下げて毎日日日拜んでゐるのだ。さうすると、その禪の中からインジンさまの、やさしい姿がボーツと顯はれて来る、その度ごとに俺の體がボーツとするのだ。それから月末になると、カラニコロン

カラシコロシと駒下駄の音がしたと思へば、やさしい聲で「あのカシコロシさまのお宅はここでございますか、私はタラハシ市の三ツ丸屋のエンジンでございませう。一寸ここあけて下さい」と言ふ聲がするので、夢か現か幻ぢやないかと思ひながら門の戸を開けて見ると、鬼でも搦むやうな男衆つれて、やさしい聲で「ア、カシコロシさま、毎度御贔屓に」と言つて、何だか書いたものを下さつたのだ。何だかあまり長くない、人のいふ三行り半くらゐだから、これは不思議、まだ結婚してゐないのだから、これは離縁状ぢやあるまいし、結婚の申込みぢやないかと思つた途端に、バツとして、そこへ倒れてしまつた。やつとの事で、氣がついて見ればエンジンさまの姿は見えず、隣村の藪井竹庵さまが見えて、介抱してくれておつた。それから毎日日々體はやせるばかりで、コレ、この通り體も骨と皮ばかりになり、竹細工に濡紙を貼つたやうに筋ばかりになつてしまつたのだ」

「オイ、その書物を見せて見よ、俺が讀んでやらう、お前は無學だからかう」

「竹庵さまに讀んでもらはふと何遍思つたかしのないが、あんまり恥づかしいから隠してゐたのだ。笑はんでくれ、そして秘密を守つてくれよ」

と大切さうに懐から書物を捻ぢ出す。キンスは手早く、書物をとつて、

覺

一、白木綿一丈

右代金四拾八錢也

三つ丸屋

春山村のカンコ様

と読み上げ、

「ハハア、こいつア禪の妄念だ、四十八錢の金を受取りに來たのだ。戀文でも結婚申込書でも何でもないワ。チツと夢を覺さないか、何だ、戀病をしやがつて、

あまりバツとせないぢやないか」

「掛金は掛金、戀は戀だ。たとへインジンさまが惚れてゐなくても俺の方は十分惚れてゐるのだ。それだから、どうでもかうでも、インジンさまと添はなくちや、バツとした病の病氣が癒らぬのだ」

「エー、困つた奴だ。しかし俺もお前のお父さまには命のないところを助けてもらつたのだから、助けねばなるまい。氣の病を癒すには申の年の申の月の申の日のは申の刻に生れた女の生肝を取つて飲ましたら直ぐに癒るといふことだ。俺の妹は丁度それだ。待つとれ、お前の病氣を癒すために、これから歸んで、妹の生肝をとつて來る」

と言ひながらスタスタと驅出し、吾が家に歸つて見ると、妹のリンジヤンは嬉しさうに表へ出て迎へ、

「お兄さま、どこへ行つてゐらしたの、大變心配してゐましたよ」

キンス「ヤア一寸、あまり景色がいいので春山峠の中途まで上つてそこらの眺望を見てゐたのだ、アー、いい氣持だつたよ。しかしな、今日はお前と俺と一杯飲みたいのだが、酒を一本つけてくれないか」

リンジヤン「兄さま、今日に限つて兄妹が杯をするとは、變ぢやありませんか。何で又そんな事を仰有るのです、これには何か深い様子がありさうに思はれます。どうぞハツキリ言つて下さいな」

「實のところは俺の友人のカンコがタラハン市の三つ丸屋の娘さまに戀慕し戀病を煩つてゐるのだ。これを癒すにはお前の力をかるより外にないのだ。どうだ兄が一生の願ひだから聞いてくれまいか。俺もカンコの父親に恩になつてゐるのだから、御恩報じをするのは此の時だからのう」

「私が、どうすればいいのですか」

「妹、こらへてくれ、實はお前の肝、イヤイヤ肝煎りで一つ、カンコの病氣を癒してもらひたいのだ」

「ともかく、兄さまの友達が悪いのだから、私がお見舞に上がりませう」

「ヤア、そりや有難い、善は急げだ、サア行かう」

「ここに兄妹二人はカンコの破家さして急いで行つて見れば、カンコは破れ疊の上で大の字になつて倒れてゐる。キンスは友達の危急を見て躊躇するに忍びず、思ひ切つて妹に向かひ涙ながらに、

「オイ、妹リンジヤンよ、お前は母に聞いてみたが、申の年、申の月、申の日、申の刻に生れた女ださうだな。お前の生肝をとつてカンコに直ぐのませばカンコ

の病氣びやうきは本復ほんぶくするといふ事ことだから、どうぞ、兄あにの顔かほを立てて生命いのちを呉くれないか」

「そら、兄あにさま無理むりぢやございませぬか、なんぼ何でも肝玉きもとままでとらいでも病氣びやうき本復ほんぶくの方法ほうはふがございませう、どうぞ私の命いのちだけは助たすけて下さい」

「イヤ俺おれも男をとこだ、友達の病氣びやうきを助たすけてやらうと言いつたかぎりは、後あとにはひかれぬ。兄あにがお前まへの肝きもをとり出してカニコに飲のましてやらねばおかぬのだ」

「そら、兄あにさま、あまりでございます。どうぞお許ゆるし下さいませ」

かく話はなししてゐるところへ玄真坊げんしんぼう、コブライ、コオ口の三人さんにんが、何處どこでぼつたく

つて来たか三尺さんじやくの秋水しうすいを抜ぬき放はなち、粗末そまつな一枚戸いちまいどを蹴けり破やぶり飛とび込こんで来た。リ

ンジャンはこの姿すがたを見るよりアツと驚おどろき、

「兄あにさま、助たすけて下さい、ア恐こはい、肝きもが潰つぶれましたワ」

キ「エー腑ふ甲斐がひない奴やつだ、肝きもが潰つぶれたなら、もうお前まへに用ようはないわい。エー、何

處この泥棒どろぼうか知らぬが、要いらぬ時に、來きやがつて……コラ泥棒どろぼう、ケツタイな面つらしや

がつて斷ことわりもなしに人ひとの家いへへ來るといふ事ことがあるものか、エー、出でて行ゆけ出で

行ゆけ」

コブライ「人の家に抜刀で這入るは俺達の商賣だ。ゴテゴテぬかすと、笠の臺が飛び出すぞ。こんなチツポケな家に来て、金があらうとは思はない、御飯を焚いて出せ、この盜公は、チツと小盜兒と違ふのだ、決して貧乏人は苛めない。飯を五六升ばかり焚いてくれ、代金は拂つてやるから」

「どうかお前勝手に焚いてくれないか、實は俺は、此家の者ぢやない、この主人が人事不省に陥つてゐるのだから、介抱に来てゐるのだからのう」

「さうすると、貴様は此家の主人ぢやないのか、ウン、割りとは親切な奴ぢやのう。それではお泥棒様がお手づから御飯をお焚き遊ばしてやらうかのう、どつこへも出てはいけないぞ。又どつかへ密告でもすると、面倒いからのう」

「ヨシヨシ逃げも隠れも致さぬわい、マア、ユツクリと飯でも焚いて行つてくれ。その代り此の村ばかりは、脅かさぬやうにしてくれ」

「ヘン、あまり見損ひをして貰ふまいかい。未來のタラハン城の左守司様だぞ」と言ひながらコオ口と共に黍の搗いたのを二升ばかり桶で炊ぎ、釜をかけて夕飯の用意を始めかけた。カンコはヤツパリ蟲の息で倒れてゐる。玄眞坊はリンジャヤ

ンの美しい顔をツラツラ眺め涎をたらし、目を細うし、心猿意馬にかられて又もや持病を起しかけてゐる。カンコはキンスの手厚き介抱によつて漸く回復し疊の上に起き上がり、見馴れぬ男が來てゐるのに、又もや肝を潰し、

「オイ、キンス、どこの人ぢや知らぬが、又どうやら、ブーツとしさうだわい」

玄「コレコレお女中、何を慄うてゐるのか、決して御心配なさるな。此奴ら二人はお見掛け通りの泥棒でござる。當家へ暴れ込み、飯を喰はせと言つてゐるのは實は偽りだ。本當の腹をたたくと、お前さまがこの家に來たのを嗅ぎつけ、否應なしに手込にせむと、拙者が木陰に休んでゐるのを知らず話しあつてゐるのを聞いて、お前さまの危急を救ふためにやつて來たが、此奴らが凶器をもつて對つて來たから、私も劍を抜いて應戦したのだ。此奴ら二人は金箔付きの泥棒だが、俺は天來の救世主天帝の化身天真坊といふ名僧知識だ。この天真坊に身も魂もお任せなさい。さうなれば神佛のお加護により、福德圓滿壽命長久疑ひなしだ」

リ「ハイ、何分よろしく御保護を願ひ上げます、世の中に泥棒くらゐ恐ろしいものはございませんせぬからな。地震、雷、火事、親爺よりも恐ろしいのは泥棒で

「ございますワ」

コブライは黍を研ぎながら玄眞坊の顔を手ラリと眺め、

「チエツ、玄眞坊さま、あまりひどいぢやありませんか」

玄眞坊は大喝一聲、

「バカ、氣の利かぬ野郎だな」

コオロ「拙者が命令する。玄眞坊は娘を世話するがよい、コブライは御飯の用意

をせつせと致せ」

コブライ「チエツ、馬鹿にしやがる」

と言ひながら襷十字にあやどり、鉢巻を横にねぢ、せつせと飯焚きの用意にかか

つてゐる。

リンジヤンはマジマジと玄眞坊の顔を見守り、ハツと呆れて反りかへり、

「ヤア、お前はオーラ山に立籠り、星下しの藝當をやり、私の妹を手込めにした

賣僧だな」

玄「ハツハハハ手込めにしても、生命は決して奪らないよ。命まで打ち込んで

惚ほれてゐたのは、これも神様かみさまの結むすんだ縁えんだらう。つながるお前まへは俺おれの女房にようばうとなつて然しかるべき神様かみさまからの縁えんが結むすばれてあるのだだ」

リンジヤンは、

「エー、けがらはしい賣僧坊主まいすぼうず、これからお役所やくしよへ訴うったへて、妹いもつとの敵かたきを打うたねばおかぬ、覺悟かくごしやや」

と裏口うらくちより飛とび出だし、勝手かつて覺おほえし田圃道たんぼみちを、何處いづこともなく驅かけ出だしてしまつた。玄眞坊げんしんぼう、コブライ、コオ口の三人さんにんは、

「こりや、かうしては居をられぬぬ」

とまたもや裏口うらくちより月夜つきよの野原のほらを、空腹くうぷくを抱かかへて何處どこともなく逃にげ出だしてしまつた。

(大正一五・一・三一 舊一四・一二・一八 於月光閣 北村隆光録)

水草の平一面に生え茂つてゐるジクジク原の足を没する田圃道を、玄眞坊、コ
ブライ、コオ口の三人は、追手の危難をおそれて行歩に艱みながら、一生懸命に
走つて行く。道の兩側は、あちらこちらに浅い水が溜り、靜かに月や星が映つて
ゐる。行くこと三町ばかり、路傍に古井戸があつて何者かが落ち込んだやうな氣
配である。コブライは恐々ながら月の光をたよりに古井戸を覗いて見ると、最前
カンコの家で見た美人によく似たものが、命かぎりに這上がらうとして井戸端の
水草を掴んで落ち込み、掴んでは落ち込みしてゐる。泥棒稼ぎの三人も人の危
難を見ては見のがしも得せず、コブライは自分の帯を解いて古井戸の中に吊り下
した。溺れむとするものは毒蛇の尻尾も掴まむとする譬、吾が身に危害を加へむ
とする泥棒の群とは知らず、リンジヤンはその帯に確りとくらいついた。コブラ
イ、コオ口、玄眞坊の三人は汗をたらたらしながら、漸くの事で救ひ上げ、
よくよく見れば玄眞坊が野心を起した掘出しものの美人である。美人は殆んど無
我無中になり、何者に救はれたかといふ事さへも知らぬ態であつた。玄眞坊は二
人に目配せしながら、濡鼠のやうになつた女の衣服を身につけたまま、あちらこ

ちらと壓搾し、雫をたらし、かたみに擔いで脛まで没する難路を西へ西へと急いで行く。行く事ほとんど一里半ばかり、月夜に浮いたやうに【こんもり】とした森が眼前數町の處に横たはつてゐる。三人はとも角あの森へ行つて休息せむものと、汗をたらたら流しながらあへぎゆく。やつと森の前に近より見れば、古ぼけた堂が淋しげに立つてゐる。

コブライ「アア随分骨を折らしやがつた。もし玄眞さま、ここの森で一夜を明しませうかい。さうしてこの美人を實意丁寧親切をもつて介抱し、人情義理づくめでウンと言はせ、お前さまの一時のお慰みものとしようぢやありませんか。いやお前さまばかりでなく吾々が拾ひ上げて擔いで來たのだから、共有物としておきませうかい。なかなかお前さまが惚れた女だから、捨てたものぢやありませんか。このコブライだつて、いささか食指が動かぬぢやありませんか。」

玄眞坊「何はともあれ、角もあれ、この女を正氣づかした上の事ではなくては、かうしておいては緯れてしまふではないか。」

コブ「いやそんな御心配には及びませぬ。ちつとばかり水を飲んでゐますが命に

は別條はありませぬ。今の間に共有物にするか、但しはコブライの専有物にするか、後でする喧嘩を先にしておかなくちや、この美人が氣がついてから、こんな相談を聞かれては見つとも好くない。玄眞さま、私の専有物として下さるか……サアどうだ。お前さまは自分の専有物としたさうだが、さう勝手にはゆきませぬよ

何といつても初めて懸想したのは俺だ。正に俺の靈がこの女に憑依してゐる。又この女とは閨門關係からすでに因縁が結ばれてゐる。いはば此方は縁者、お前は赤の他人ぢやないか。そんな事は言はなくても定つてゐる、きつと玄眞さまのものだよ

縁者か、閨門關係があるか、そりや知りませぬが、このコブライが見つけて助けなんだら、この女は已に命が無くなつてをるのだ。さうすれば命の親はこのコブライさま、ドツと讓歩したところで拙者が二晩使へば玄眞さまは一晩お使ひなさい。権利の上から言つてもそれが至當だと思ひますわい

「ハハハハハ、お前のシヤツ面で、何ほど命を助けてもらつたといつてこの美人

が靡なびくと思おもふか、自惚うぬぼれもよい加減かげんにしておけ。何なんだ蛙かはづの鳴なき損そこねたやうな面つらをして、【こい】の【うす】いのは片腹痛かたはらいたい、この女をんなのことは一切いっさい玄真げんしんに任まかすがよからう。】

「いや、そりやなりませぬ、そんならこのナイスに自ら選みづかましたらどうでせう。お前まへさまだつて餘あんまりバツとした顔かほぢやありませんよ、きつと女をんなに選えらましたら拙者せつしやが最高さいかうてん點てんを得えて月桂冠げつけいぐわんを頂いたくは火ひを見るよりも明白めいはくな事實じじつです、エへへへ」

コオロ「コーラ兩人りやうにん。俺おれの命令めいれいを聞きけ、この女をんなは一旦いつたんカンコの家いへにおいてコブライの面つらを見て肝きもをつぶし、玄真げんしんさまの顔かほを見て愛想あいそづかし裏口うらぐちから逃にげ出した代物しろものぢやないか、さうすりや已すでにすでに兩人りやうにんに對たいする戀愛れんあいの脈みやくは上あがつてゐる。さうすりや黙だまつてゐてもこのコオロさまに札ふだがおちるのは當然たうぜんだ。そして兩人りやうにんに對たいして命令めいれい權けんをもつてゐるこのコオロは絶對ぜつたいに二人ふたりには與あたへない、コオロの宿やどの妻つまとしてこれから先さき、長ながい行路かうろの伴侶はんりよとするつもりだ、エへへへ」

三人さんにんはこんな掛合かけあひに現うつを抜ぬかしてをる間あひだに、リンジャンは元氣げんき恢復くわいふくし、あまりの可笑をかしさに「フフフフ」と吹ふき出した。

コブライ「ヤ姫さま、氣がつきましたか、ヤ、まあ目出たい目出たい、お前さま一體何の事ぢやいな、古井戸の中に落ち込んで、鮎が泥に酔つたやうにアツプアツプとやつてござつたところ、縁の絲につながれたといふものか、玄眞やコオロの後から行つた私の目にお前さまの姿がうつつたのも、深い縁が結ばれてゐるのだから、最早ない命だと思つて一生をこのコブライに任して下さい。何といつても命の親のコブライですからなア」

リン「アアさうでございましたか、私も命を助けてもらひ嬉しい事だと思つたら、あた汚らはしい、小泥棒に命を助けてもらつたとあつては、先祖の面汚し、アア残念の事をいたしました。これ【どろ】さま、その刀をかして下さい、お前さま方に助けられたとあつては、兄の顔も立ちませぬ。ここで潔う自害をしてお目にかけませう」

「これこれお女中、悪い了簡だよ、命あつての物種ぢやないか。人間はこの世に生きてをりやこそ花も實もあり愉快があるのだ。死んで花實が咲くと思はつしやるか。在來の宗教に呆けてゐる【やくざ】人足は未來が在ると迷信してをるだら

うが、科學に目覺めた現代人には未來が在るなどと、そんな事は通用しませぬか
らなア。また先祖の名折れになるとか、兄の名が汚れるとか、泥棒に助けられた
とか、不用ざる體面論に縛られて、掛替へのない可惜命を捨てやうとは時代後れ
にも程がある。とかく人間は、自分さへ好かつたらよいのだ。どうだい、一つ思
案をし直して拙者の女房になつては下さるまいか。拙者だつて生れついで泥棒
でもないし、悪人でもありません。ほんの其の日稼業に泥棒の修業をやつてゐる
のですよ」

「何と仰有つても、泥棒の名のつく人には絶対に身を任す事は出来ませぬ」
「ハテサテ、意地固い女だなア。よう考へて御覽なさい、今日の世の中の有様を、
上は左守の司より下小役人に至るまで、手をかへ品をかへて泥棒しない奴があり
ますか。砂利を噛る奴、印紙を食ふ奴、佛を賣つて食ふ奴。神の足を噛る奴、上
から下まで、隅から隅まで、泥棒の世界だ。泥棒が嫌だから男を持たぬなどとそ
んな堅苦しい事を言つてゐやうものなら、終身清淨無垢の男と出遇ふ事はないま
すまい。そこはよくお考へなさつたがよろしからう」

「そりやさうでせう、泥棒せないものは世界に一人もありますまいが、しかしその泥棒の仕様にも種々の手段があつて、世の中から智者よ學者よ、聖人君子よ、英雄豪傑よと崇められて泥棒するやうでなくては駄目ですワ。お前さまのやうに正面から泥棒を看板に大刀擔げて来るやうなものに碌なものはない。それだから御免蒙りたいのですよ」

「もし玄眞さま、此奴はなかなか手剛い奴です。どうかお前さまの雄辨術をもつて言向和して下さい。たうてい私の言靈では望みがありませんわね」

玄「ハハハハハ、いかにもお説ご尤も、よいところで諦めて下さつた。サアこれから玄眞さまの一人舞臺だ。これこれお女中、其方の言葉を聞くとこの玄眞坊も何處ともなく肉躍り血湧き、兩腕が鳴るやうだ。何とまあお前は世界無比の才媛だなあ。どうだ智勇兼備の良將と聞えたこの玄眞に身を任せ、王妃となつて暮す氣はないか、未來のタラハン王はこの玄眞坊で御座るぞや。人間の欲望は名位壽寶というて、最も貴いものは名を萬世に残すことだ。その次は位といつて人格の向上を主とする欲望だ。いはゆる後は聖人だ、君子だ、英雄だ、豪傑だ、有徳

者だ、世界の救世主だと萬民に崇められ、人格を認めらるることだ。その次が命、その次が金銭物品だ。どうだ、かかる片田舎に生れて、タラハン城の王妃となる氣はないか。世界の幸福を一身に集めて、この神的英雄の玄眞坊と一緒に暮す氣はないか。よくよく利害得失を考へたがよからうぞや」

リン「ハイ、種々と御親切有難うございますが、私はお三人さまの中において最も權威ある方と御相談が願ひたうございます」

「ハハハハハ、そりやさうだらう、如何にもご尤も、この中で最も權威あるものとは取りも直さずこの玄眞坊だよ」

と鼻を蠢かす。リンジヤンは首を左右にふり、

「イヤイヤそれは違ひませう、命令權をもつてござるコオロさまとやら、この方が一番の權威者と認めます。このコオロさまとお話したうございますから、お二人さまは森の奥で控へてもらひたうございますが」

コオロ「エへへへへ、こりやこりや玄眞坊、コブライの兩人、三町ばかり此の場より立退きを命ずる。ハハハハハ、これお姫さま、拙者の權威はこの通りでこ

ざる。何といつても天帝の化身を頭で使ふ權威者でござるから、よもや、男に持つてお前さまも不足はござるまい、エへへへへへへ」

玄「こりやコオ口の奴、なにふざけた事を言ふか、すつこんでおれ。貴様の飛び出す幕ぢやないワ、しやうもない事を言ふと主従の縁を切らうか」

「しからばあの夢をお前さまに賣つたのは元々へ取り返しますぞ。お前さまは大外れたタラハン城を占領し、國王にならうといふ陰謀を春山峠の頂上において企んで以來、依然としてその計畫をやめないでせう。その夢の計畫をやめない上はお前さまの身の上は風前の燈火だ。サア夢をかへしてもらつた上は、その夢の次第を逐一タラハン城に訴へ出るつもりだ、これでも違背があるか。サア玄眞さま、キツパリと返事を承りませうかい。お前さまの鞆丸を握つたこのコオ口は決して夢を見たのぢやありませんよ。睡つた眞似をしてお前さまの計畫を皆聞いたのですよ。夢を返してもらつた以上は如何しやうと、コオ口の自由權利だ」

と早くも驅け出さむとする。玄眞坊は慌ててコオ口に喰ひつき、

「ママママア待つた待つた、さう短氣を起すものぢやない。お前のやうに一寸俺

が「てんご」を言うても本氣になつては耐つたものぢやない。そんならお前の望みに任せ、この美人を譲つてやらう」

コオ「ヘン譲つて遣らうなんて僭越にも程がある。お前さまの女房でもなければ娘でもないはずだ。このコオ口は直接談判をする積りだから、吾が命令を遵奉して二三町ばかり暫しの間退却を願ひたい」

玄「オイ、コブライどうしやうかな」

コブ「何といつてもお前さまが鞆丸を握られてをるのだから、コオ口の命令に従はねばなりませんまい」

玄「そんならコオ口、夢は依然として此方が買うた。そのかはり命令權はお前に渡す、必ず變替へせないやうにしてくれ」

コオ「拙者の命令さへ神妙に遵奉する間、決して變替へはしない。サアこれからが俺の一人舞臺だ。これこれリンジャンさま、拙者の妻となる件については、よもや御異存はございませんア」

「ホホホホ、あのまあコオ口さまとやら蟲のよいこと、人の鞆丸を握つて否應

言はさず自分の権利を主張するやうな方は私は嫌です。本當に惟神的に權威があり徳望のある人は、そのやうに權謀術數を弄しないで世界から尊敬いたします。そんな安つばい女と見くびられては、このリンジヤンも迷惑いたしますワ。ね工泥棒さま」

かかる所へ提燈松明振りかざし、數十人の足音がザクリザクリと水草の原野を踏んで押し寄せ來たる。玄眞坊、コブライ、コオロの三人は周章狼狽なすところを知らず、思ひ思ひに草の茂みに隠れて何處ともなく消えてしまつた。

（大正一五・一・三一 舊一四・一二・一八 於月光閣 加藤明子録）

第一章 異志佛（一八〇〇）

玄眞坊はコブライ、コオロの兩人と思ひ思ひに追手に驚いて別れてしまひ、當途もなしに西へ西へと月夜を幸ひ驅け出したが、ほとんど空腹のために身體は弱

り果て、足の歩みも捗々しからず、どつかの民家を尋ねてパンにありつかむものと、煙が何處かに見えぬかと、一生懸命に空を向き、覺束なき足で歩んでみると、傍の森林の中から「オイ、オイ」と人を呼ぶ聲が聞こえて来た。玄眞坊は「ハテ訝かしゃ、かやうな所で自分を呼びとめる者はないはずだ。察するところ昨夜の捕手の奴、こんな所まで出しやばつて、吾々の先廻りをしてゐるに違ひない、コリヤうつかりしてをれぬ、三十六計の奥の手は逃ぐるに若くはなし」と、疲れたコンパスに撚をかけ、又もや草花の茂る綺麗な原野を一生懸命に駆け出す。後から二人の追手が十手を打振りながら、「オイ、オイ」と聲を限りに追つかけて來たる。トンと突き當つた前方の峻山、もはや自分は到底逃げおうすことは出来まいと、路傍の辻堂を見付けて、少時姿を隠さむと這入り見れば、等身の石佛が立つてゐる。やにはに玄眞は満身の力をこめて、首のあたりをグツと押すと、石佛は苦もなく倒れてしまった。玄眞は石佛の倒れた後の臺石にスークと立ち、不格好な羅漢面をさらしながら左の手をふりあげ、右の手を膝のあたりまでさげ、石佛に化けて追手の目を遁れむと早速の頓智、そこへ漸く駆けつけやつて來た二

人の追手は辻堂を見付けて、

甲「オイ、あの泥棒はどつか、ここらの草の中へでも沈澱しやがったとみえて、影も形も無くなつたぢやないか、こんな者探しに行つたつて雲を掴むやうなものだ、彼奴ア魔法使ひかも知れぬぞ。とも角この辻堂があるのを幸ひ、コンパスに休養を命じたらどうだい。腹も相當空つて来たなり、命がけの活動をして捉まへたところで、わづかの目くされ金を褒美に貰ふだけだ。一遍散財したら了ひだからのう」

乙「そらさうだ、俺だつてお前だつて、今かうして堅氣になり、追手の役を勤めてゐるものの、元を洗へば立派な人間ぢやないからの、グズグズしてをれば鼻の下が干上るなり、せう事なしの追手の役だ。マアこの春の日の長いのに泥棒の一人ぐらゐ掴まへたつて、あまり世の爲にもなるまいし、體が肝腎だ。ア、この辻堂を幸ひ一服しやうぢやないか」

甲「ここには妙な石佛が立つてゐるぞ、この石工は誰がやつたのか知らぬが、まるで生佛のやうだ、一つ煙草でも喫もうぢやないか」

と言ひながら、ケチケチと火打を打ち出し、煙管の皿のやうな雁首に煙草を一杯盛つて火をつけ、兩人はスパリスパリと吸ひ始めた。一服吸うては石佛の足の甲へポンポンと火を拂ひ、また煙草をつぎかへては吸ひつける。玄眞坊は熱くてたまらず、黒い面の眞中の方から、白い目を剥き出し、涙さへたらし出した。二人はフツと上むく途端に、石佛の目がグリグリと廻り、涙さへ落としてゐるので、
「ヤア、こいつ化物だ」

と驚きのあまり、アツと言つて腰をぬかし、
「アアアア、羅漢さま、どうぞお許し下さいませ。エライ失禮な事をいたしました。どうにもかうにも腰が立ちませぬワ。どうぞ一口許すと言つて下さいませ。さうすると戀しい女房の家へ歸ることが出来ます。その代り追手の役は孫子の代まで致しませぬ」
と兩手を合せて一生懸命に頼み込む。玄眞は心の中で「ハハア、バカな奴だな、此奴、本者だと思つてゐるらしい、腰が抜けたとあらばもう大丈夫だ、ソロソロ還元してやらうかな……」と臺の上からポイと飛びおり、

「コーリヤ、木端役人共、神變不思議の俺の魔力には驚いたたる、俺は泥棒の張
本玄眞坊様だぞ。ここな石佛は此の通り、俺の小指一本で押し倒し、その跡へ俺
が立てつてをつたのだ。腰が抜けたとありや、どうすることも出来まい。汝も少々
ぐらゐは金を持つてをらう。有金残らずこちらへよこせ……ナニ、ないと申すか、
腰にブラ下げてるのは、そら何だ」

甲「ヤ、コリヤ辨當の残りでございますよ」

玄「ヨシ、分つてる、俺も腹の空つたところだ。たとへ汝の食ひさしにしる、
命にはかへられぬ、此方へよこせ」

と言ひながら、無理無體にひきむしり、一人の辨當を平らげてしまひ、また次の
奴の腰の辨當をむしつて一粒も残らぬところまで、いぢ汚く食ひ終り、辨當箱は
小口から舌の川で洗つてしまつた。

甲「モシ玄眞さま、お前さまは大變な神力のある方だな、たうてい吾々の手には
合ひませぬワ。お前さまの面を見てさへこの通り腰が抜けてしまふんだもの」
玄「ワツハハハ、此方の御神力には随分驚いたたる、汝は一體何といふ奴だ」

甲「私なんか名のあるやうな氣の利いた者ぢやございませぬ。しかしながら、親が付けてくれたか人が付けてくれたか知りませぬが、私はトンビと申します。モ一人の男はカラスと申します」

玄「なるほど、トンビにカラス、こいつア面白い、そんなら俺も二人の家來が途ではぐれてしまつたのだから、お前等二人を家來にしてやらう。どうだ、改心いたして追手の役はやめるか」

ト「へへへ、やめますとも、何ほど、追手よりもお前さまの乾兒になつてる方が氣が利いてるか知れませぬワ。のうカラス、汝もさうだらう」

カ「お前の意見通りだ。モシ、玄眞さまとやら、どうか宜しう願ひ申します」
玄「ヨシ、分つた。そんならこれから俺のいふ通りするのだよ。何でも命令に服従するのだぞ。サア行かう」

ト「モシモシ玄眞さま、行かうと仰有つても腰が立ちませぬがな。どうか貴方の神力でお直し下さるわけには参りませぬか」

「エー、仕方がない、直してやる。その代りこの腰が直つたら最後、俺の神力は

認めるだらうな」

ト「へーへ、認めるどころの段ぢやありません、已にすでに腰を抜かした時から、お前さまの神力を認めて御家來にして下さいと願つてゐるのですもの」

玄「ウン成るほど、さうに間違ひなからう」

と言ひながら、兩人の腰の邊りをメツタやたらに握拳を固めて擲りつけた。二人はあまりの痛さに思はず知らず立ち上り、一間ばかり逃げ出し、又もやパタリと倒れてしまった。

玄「ハツハハ八腰拔野郎だな、このやうな者を何萬人連れてゐたつて、手足纏ひになるばかりだ。また腰が直つたらついて来い、キツと家來にしてやらう。俺は天下經綸の事業が忙しいから御免を蒙らう、てもさても憐れな代物だなア」

と腮を三つ四つしやくり、坂路を元氣よく鼻唄歌ひながら登り行く。

これより玄眞坊は彼方あなたに、晝は山野に寝ね夜は泥棒を稼いで、百日あまりを過した。又もやダリヤ姫の事を思ひ出し、會ひたくて堪らず、何とかして甘く彼女を手に入れたいものだと、少々懐が温くなつたので、夕ラハン城市へ變装

して忍び込み、タラハン市中でも一等旅館と聞こえたる丸太ホテルに泊り込んでしまった。玄眞坊は奥の二間造りの別室に居を構へ、種々とタラハン城轉覆の夢を辿つてゐる。そこへ下女が茶を汲んで出で來たり、

「モシお客様、主人から、ネームを承つて來いと仰せられました、どうかこの宿帳にお記し下さいませ」

玄「アアよしよし」

と言ひながら、スラスラと宿帳に記した。宿帳の面にはバリヨンと書き記し、玄「俺はな、ハルナの都から遙ばると大黒主さまの命令によつて、諸國視察のため行脚に出て來てゐる者だが、もはや七千餘國は遍歴済みとなり、當家においてゆるゆると二三ヶ月ばかり休息さしてもらふ積りだから、主人に宜しく言うてくれ。そして宿賃には決して心配かけないから、朝夕の膳部にはな、氣をつけるやうに頼んでおく」

と言ひながら、宿帳を二三枚繰返してみると、二三日前から、コブライ、コオロが泊つてゐると見えて、自筆の姓名が記してある。玄眞坊は何食はぬ面して下女

に向かひ、

「ここにコブライとか、コオロとかいふ客は泊つてゐないかのう」

下女「ハイ、泊つてゐられましたが、昨日の日の暮に、一寸そこまで見物に出ると仰有つたきり、まだお歸りになりませぬので、心配をしてゐるところでございます」

玄「アアさうか、フーン」

下「何か貴方、此の方に御關係がございますのですか」

玄「ナ―二別に關係も何もない、見ず知らずの人だが餘り面白い名だから、ちよつと尋ねてみたのだ。ヨ、これは俺の心付だ」

と言ひながら懐から鳥目を取り出し、下女に投げ與へた。下女は喜んで押し戴き、母家の方へ歸つて行く。後に玄眞坊は腕を組み吐息をつきながら、

「ア―ア、世間といふものは廣いやうでも狭いな。三月以前に追手にかかり、彼等兩人にはぐれてしまひ、何處へ行つたかと思つてをれば、しかも同じ宿に泊つてゐたとは實に不思議だ。ア、察するところ、彼等兩人はこの俺がタラハン市へ

大望遂行のために来てゐるに違ひないと目星をつけ、彼方こなたと行方を捜してゐるのだらう。何れ今日明日の内には歸つて来るだらうから、様子も分らうし、マア緩り休養せうかい』
と獨ごちつつ肱を枕にゴロンと横たはり、グウグウと雷のやうな鼾をかいて寝てしまつた。

少時すると又もや下女がやつて来て、

『モシモシお客さま、エー、あなたのお話になつてをつた面白い名の方が二人歸つてみえました。御用がありますなら會つて上げて下さいませ』

玄眞坊は目をこすりながら、

『ナアニ、コブライ、コオ口の兩人が歸つたといふのか』

下『左様でございます。二人のお客さまに、あなたの御面相から、お背恰好をお話申しましたら、お二人さまは、どうか其の方に一目會ひたいものだと思つて、お伺ひに参りました』

玄『別にそんな野郎に會ふ必要もなし、見た事もない男だが、所望とあらば、俺

も一人だから、退屈さましに會つてやらう、ソツと此方へ通してみてくれ。首實

騷の上、言葉をかけてやるかやらぬかが定るのだ」

下「左様なら さう申し上げます」

と言ひながら別れて行く。少時すると二人はドヤドヤと玄眞の居間にやつて来た。

コ「イヤ、親方、どうも久振りだつたな、一體何處をうるついとつたのだい、

どれだけ搜したか知れないワ、のうコオロ」

玄眞坊は右手を上げて空中にふりながら、

「オイ小さい聲で言はないか、近うよれ近うよれ」

「ハイ」

と言ひながら耳許に兩人共より添うた。

玄眞「どうだ、タラハン城の様子は……偵察したか」

コブ「ハイ、大變なこつてございますよ。タニグク山の岩窟で吾々の親分になつ

てをつた、あのシヤカンナさまが左守の司となり、娘のスパール姫は王妃殿下と

成上がり、立つ鳥も落すやうな勢ひで、城下の人氣といつたら素晴らしいものだ。

今日こんにちのシヤカンナは泥棒どろぼうの親分おやぶんでなく、もはや一國いっこくの主權者しゅけんしゃも同様どうやうだ。玄眞僧都げんしんそうづの目的もくてきは、マアマアマここ百年ひゃくねんや二百年にひゃくねんは到底たうてい立ちますまいよ」

何なんと、人ひとの出世しゅつせといふものは分わからぬものだ。ウン、さうか、あの爺おやぢ、また元もとの左守さもりに還元くわんげんしやがつたな。ヨーシ、それを聞きくと、俺おれもむかつて堪たまらぬ。何なんだシヤカンナの爺おやぢが一國いっこくの棟梁とうりやうとは、チャンチャラ可笑をかしいワ。しかし兩人りやうにん、大分だいぶに稼かせいだらうな」

稼かせいでみましたが、ヤツとの事ことで兩人りやうにんが宿賃やどちんが拂はらへるくらゐなものです。しかしながら金かねの在所ありかは澤山たくさんに見届みとどけておきました。どうも大將たいしやうの知惠ちゑを借かりなくちや、吾々われわれの手に合あひませぬワイ」

「フン、さうか、それぢや今晚こんばん一つ、何處どっかの寶庫むすめを拐かどかしてみようかい」

それより三人さんにんは浴湯ゆをつかひ夕食ゆふしよくを了をはり、又またもや一間ひとまに入はいつてコソコソと大望たいまう遂行すゐかうの下準備したじゆんびの相談さうだんをやつてゐた。

三人さんにんはいよいよ左守さもり司かの屋敷やしきへ忍しのび入り、しこたま金かねをふんだくらむと覆面頭ふくめんづき巾いの扮装いでたちで裏口うらぐちからソツと抜ぬけ出し、町裏まちうらの細路ほそみちを傳つたうて、左守さもりの館やかたをさして忍しの

びゆく。折柄をりからチャン チャン チャン チャンと半鐘はんしやうの聲こゑ、瞬またたく内にうち炎々えんえん天てんを焦こがしてタラハン市の目拔めぬきの場所ばしよと聞きこえたる廣小路ひろこうぢが焼やけ出だした。ほとんど森閑しんかんとして山河草木居眠さんかさうもくゐねむつてゐたやうな星月夜ほしづきよも、俄にはかに目めを醒さましたやうに、あたりが騒さわがしくなつて、何處どこの家うちも彼處かしこの家うちも火消装束ひけししやうぞくでトビを擔かたげて飛とび出だし、危きけん險けんでたまらず、三人さんにんはある家の軒下いへ のきしたに身みを忍しのび、又またもやコソコソと相談さうだんを始め出だした。

玄げん「オイ今夜こんやはダメかも知しれぬぞ。これだけ何處どこの家いへも何處どこの家いへも一度いちどに目めを醒さまし、トビを擔かたげて飛とび出だしてゐやがるから、街道かいだうの混雜こんざつといつたら大變たいへんなものだ。こんな晩ばんに仕事しごとをしなくても又また明日あすの晩ばんがあるぢやないか」

コブ「泥棒稼どろぼうかせぎには持もつて來こいの夜よさですよ。何奴どいつも此奴こいつも火事くわじの方ほうに氣きを奪とられてるから、火事泥くわじどろといつて、何處どこかしことなし火消ひけしに化ばけて飛とび込こむのですよ。大泥棒おほどろぼうはこんな時ときに限かぎりますよ、のうコオロ」

コオ「ウンそらさうだ、今いま一番現いちばんげんナマを餘計よけい持もつてる奴やつ、左守さもりの司かみといふことだ。何時いつも彼奴あいつの家うちには衛兵ゑいへいが三四十人さんしじふにんはゐやうが、こんな時ときはよほどの大火事おほくわじだか

ら、皆火消しに出てゐやがるから家はがら空だ。サ、行かうぢやないか。ナ、千
萬兩の金をふんだくり、その次にや民衆を買収して、タラハン城の轉覆を企てる
には恰好の時期だ。玄眞さま、こんなよい機會はありませぬよ。左守の屋敷はす
つかりと調べておきましたから、私に案内さして下さい」
玄眞「成るほど、お前の命令には従はねばならぬのだつたな。ヤ、こんな命令な
ら服従する」

と言ひながら、自分の身に災難が罹るとは、神ならぬ身の知る由もなく、火事の
騒ぎに紛れて左守の裏門より、ソツと三人とも忍び込んでしまつた。

（大正一五・一・三一 舊一四・一二・一八 於月光閣 松村眞澄録）

第一二章 泥壁（一八〇一）

亂麻らんまの如ごとく亂みだれたる　　タラハこくン國ないの内政せいも

スダルマン太子たいしの即位そくゐより　　施政しせい方針はうしん一變いつぺんし

左守さもり右守うもりが朝夕あさゆふに　　治國ちこく安民あんみん國富こくふうを

培つちかひ養やしなひ民心みんしんを　　得えたれば茲こゝに國內こくないは

漸やうやく塗炭とたんの苦くを逃のがれ　　萬事ばんじ萬端ばんたん緒ちよについて

みろくの御世みよと稱たへられ　　下國民しもこくみんは一様いちやうに

新王しんわう殿下でんかを親おやの如ごと　　主人しゅじんのごとく師しのごとく

尊敬そんけい愛慕あいぼしながらも　　長ながき春はる日は闌たけて行く

山野さんやの花はなは散ちり果はてて　　新綠しんりよく滴したる野のの光ひかり

あなたよこなたたいにへい時鳥ときす　　世よの太平たいへいを謠うたふをり

好事かうじ魔多まおほしの世よの譬たとへ　　タラハじやうしン城市めぬきの目貫めぬきの場ば

行くゆ道みちさへも廣ひろ小路こうぢ　　大廈たいか高樓かうろうたちまちに

火焰くわえんの舌したに包つつまれて　　見みる見みる内うちに倒壞たうくわいし

數十すうじつ軒けんの豪商がうしやうは　　將棋しやうぎ倒だふしとなりにける

この虚に乗じて玄眞坊

コブライ コオロの兩人と

しめし合せて左守司

シヤカナナ館に忍び入り

金銀財寶を奪ひとり

日頃の大望達せむと

神ならぬ身の悲しさに

吾が身に危難のかかるをば

つゆ白煙くぐりつつ

左守が館の裏門の

くぐりを押し開け忍び入る

遠く市中を見渡せば

をりから輝く月光は

火焰に包まれ墨の如

光を失ひ慄ひる

その光景ぞ凄じき

この機に乗じて三人は

奥の間深く忍び入り

寶庫の錠前捻ぢ切つて

躍り込まむとする時しも

衛兵どもに見付けられ

一網打盡に三人は

高手や小手に縛られて

本城内の牢獄へ

投げ込まれたるぞ淺間しき。

□ 其の方の住所姓名を明らかに申せ

□ 拙者の現住所はタラハン城内の第一牢獄だ

□ 姓名は何と言ふか

此の方の姓名を聞いて何と致す。たつて名を名乗れとならば言はぬ事もない、吾が名を聞いて驚くな。そもそも吾こそは第一靈國の天人、天帝の化身、天來の

救世主、天真坊様といつて左守のシヤカンナが兄弟分だ。火事見舞のためにシヤ

カンナの館へ乗り込み類焼の難を怖れ、寶庫の寶物を安全地帯へ運びやらむと、

取るものも取敢ず錠を捻ぢ切らむとするをりしも、譯も分らぬ木端武者ども横合

より飛び出し、盲滅法界に天來の救世主を科人扱ひをなし、かやうな所へ押し込

みよつたのだ。その方のごとき青二才には、たとへ右守司でも相手にはならない。

不審があればシヤカンナを呼んで來い、トツクリと天地の道理を説いて聞かせる

程に、アーン……。こりや青二才、俺の縛を解かぬか、煙草を一服吞ませ、左守

司の兄弟分を斯やうに虐待いたすものがあるものか、不心得千萬にも程がある。

火事見舞の客か泥棒か分らぬくらゐの事で、どうして一國の右守が勤まると思ふ

か、チト確り致したがよからうぞ」

「しからばその方に尋ねるが、何ゆゑ火事見舞に出て来るのに覆面頭巾で来たのか、何ゆゑ兇器を持って飛び込んで来たのか」

「ハツハハハハ、てもさても分らぬ右守だな、空からは一面火の粉の雨、火事場へ出て働かうと思へば覆面頭巾は當然の事だ。かの消防隊を見よ、一人も残らず覆面頭巾の装束ぢやないか」

「然らば何ゆゑ三尺の秋水を閃かして這入つたか、その理由が分らぬぢやないか、てつきり泥棒が目的ぢやらう」

「アツハハハハ、譯の分らぬにも程があるわい。俄か火消の事とて鳶もなし、纏もなし、やむを得ず丸太旅館の火事羽織を身につけ、武士の魂たる刀を提げ萬一の警戒に備ふるためだ。かの左守の屋敷には數十人の衛兵がおのおの武器を携帯し、三尺の秋水を抜いて警固厳しく控へてゐるぢやないか。火事の混雑によつて衛兵は七八分まで消防の應援に出掛け、左守の館は實に不安きはまる無防備も同様、兄弟分の誼をもつて二人の部下を引率れ應援に向かつたのだ。かかる親切な

る吾々の行動に對し、青二才の分際として訊問するとは片腹痛いわい。汝ごとき木端武者に話したところで譯が分らうまい、一刻も早く左守をこの場に呼んで來い、キツと黑白が分るだらう」

「その方の伴うてゐた兩人を調べて見れば、何れも泥棒の目的で這入つたと申し立ててゐるぢやないか。何ほど汝が小利口に抗辨すると、已にすでに兩人の自白によつて強盜に忍び入つたのは明白の事實だ。たとへ左守司の兄弟分だといつても、國法は枉げる譯には行かぬ、どうぢや兩人の自白を打ち消す勇氣があるか」

「アツハハハハ、左様な愚問を發する奴があるか、かやうな事はいい加減に片付けたがよからう。よく考へて見よ。コブライ、コオ口の兩人は、もとよりシヤカシナ泥棒親分の輩下ぢやないか。タニグク山の岩窟に立籠り、民家を苦しめ財物を奪ひ取つた鬼畜生の片割だ。彼等二人は元よりシヤカシナ泥棒の輩下だから、人の家へ忍び込めば泥棒に入つたと早合點するのは見えすいた道理だ。吾は天來の救世主だ、天帝の化身だ。何を苦しんで目腐れ金に目をくれ、左守の屋敷へ忍びこむ道理があらうぞ。目が見えぬにも程があるわい」

とどこまでも押強く、さすがの右守も困り果て、

『まづ今日の調べは、これで惜いておく、また明日トツクリと調べるであらう』
と言ひながら白洲の奥へと姿をかくした。

玄眞坊は二人の小役人に引立てられ、もとの牢獄へと歸り行く。
玄眞坊は牢獄に打ち込まれながら、平氣の平左で鼻唄を歌つてゐる。

『樂焼見たやうな此方の顔に

惚れるダリヤさまは茶人さま……と

なにほど左守が威張つてみても

もとを洗へば泥棒さま……か

泥棒泥棒と偉さうに言ふな

左守が泥棒の張本ぢやないか

左守シヤカナの泥棒でさへも

娘のおかげで世に光る……と

子供こども持もつなら娘むすめを持もちやれ

親おやももるとも玉たまの輿こし…と

タニグク谷たにま間の泥どろ棒ぼうさまも

今いまはタラハンの左さ守もりとなつた

左さ守もりと偉えらさうに言いふな

井い戸どの底そこにもゐる蠓いもり

右う守もりか左さ守もりか俺わしや知しらねども

井い中なかの蠓いもりによく似にてる

井い中なかの蠓いもりは海たいかい知しらぬ

どうして天てん帝ていの心こころが分わからう

かかこころる所ところへ守しゆゑ衛いが靴くつ音おと高たかくやつて來きて、

こりこころやこりこころや坊ぼう主ず、静しづかにせぬかい、何なにを言いつてゐるのだ

玄げん 守衛しゅゑい守衛しゅゑいと偉えらさうにさらす

貴様きさまは乞食こじきの兄あにぢやないか

乞食番太こじきばんたに坊主ぼうずに兵士へいし

まだも悪いわるのは下駄直げたなほし

守しゅ 「こりや坊主ぼうず、貴様きさまは自分じぶんの事ことを言いつてるぢやないか

俺おれは天帝てんていの化身けしんの身魂みたま

頭あたまは坊主ぼうずに化ばけてゐる

たとへ頭あたまは坊主ぼうさまぢやとて

俺おれの靈たましひは天帝てんていさまだ

「エー、仕方しかたのない坊主ぼうずだな、静しづかにしろ、右守うもりさまに報告ほうこくするぞ

「オイ、守衛しゅゑい、左守さもり、右守うもりに俺おれがことづけしたと言いつてくれ、……俺おれが泥棒どろぼうなら

貴様等もヤツパリ泥棒だと言つてをつたと、これだけでいい、その外のことはいふな、貴様の身の破滅になるといけぬからのう」

守衛はプリンと體をふり、面をふくらし一言も答へず、靴の先で牢獄の戸を二つ三つ蹴りながら、足早やに何處へ行つてしまつた。

玄眞坊は退屈でたまらず、獄中に縛られたまま俄か作りの經文を讀み出した。

摩訶般若波羅蜜多心經

無限無量絶對力の權威を具備する天帝の御化身、最高第一天國の天人並びに最奥靈國の天人、天來の救世主、天真坊様は不慮の災難によつて、今やタラハン城内の狹隘なる牢獄に日夜を送る身となりぬ。そもそも人は萬物の靈長、天地の花、天人の住所なるにも拘らず極惡無道の泥棒が親分、左守司と化けすましたるシヤカンナが今日の暴状、必ずや天地の神は怒らせ玉ひ、地震雷火の雨はまだ愚か、大海嘯の大襲來によつて左守右守は言ふに及ばず、大災害の突發せむは明瞭なり。アア憐れむべし盲滅法の世の中、天に日月輝くとも、中空に黒雲塞がりあれば、

天日も地に達せざる道理なり。アアバラモン帝釋自在天大國彦命、一時も早く、天變地妖の奇瑞を示し、この城内を初めとし全國の民衆に目をさまさせ玉へ。吾はもとより泥棒にも非ず、また左守右守が如き野心家にも非ず、ただ天が命ずるままに天意を行ふのみ、歸命頂禮謹請再拜、南無バラモン天王自在天、吾が願望を納受まします。

かかる所へ右守司は玄眞坊の様子いかにと只一人、偵察がてらやつて来たがこの經文を聞いて吹き出し、

「オイ、天帝の化身殿、大變な雄猛びでござるな。一時も早く天變地妖の奇瑞が見せてもらひたいものだなア」

玄「ヤア、よい所へやつて来た、その方は右守のアリナじやないか、どうだ、左守と相談して来たか」

右「黙れ、罪人の分際として何御託を吐くのだ。何といつても泥棒の目的で忍び込みながら、千言萬語を費やしての辨解も、吾々の聰明を蔽ふことは出来ないぞ。ここ二三日の間の命だ、喰ひたいものがあるなら何なりと言へ。今に刑場の露と

消える身の上だから、この世の名残に何なりと吐いておくがよからう。その方の罪は已に死罪と定つてゐるのだ」

「ハツハハハハ、その方が何ほど死罪ときめても神の方、この方さまから見れば無罪でございだ。ともかく左守が此處へようやつて來ん事を思へば、ヤツパリ俺が恐いのだ。そらさうだ、面の皮引きむかれるのが嫌さに、莧弱の幽靈のやうに慄うてゐるのだらう。憐れな老骨だな、イツヒヒヒ。何ほど自身の娘が別嬪で、王妃殿下になつたといつても、その父親たる自分が泥棒の親方では、到底一國の政治は行はれまい。泥棒の親分になればキツと天下は取れると、國民に國民教育の手本を見せるやうなものだ。そんなことでタラハンの國家が續くと思ふか。才イ右守、タラハン國の事を思へば、さう俺が言つたと左守に言つてくれ。俺は已にすでに覺悟はしてゐる、しかし左守に一度會はねばならぬ。死罪なつと五罪なつと勝手にしたがいわ。それまでには是非とも左守に言つておく事がある。左守だつて此の世の名残に會はぬと言ふ事もあるまい」

アリ「左様な世迷言は聞く耳は持たない。ま一度白洲で調べてやらう、適確な證

據うこが上あがつてゐるのだから
と言いひながら靴音くつおと高く此この場ばを去さつた。玄真坊げんしんぼうは又またもや大おほきな口くちをあけ、無ぶ恰かつ好かう
の目鼻めはなを一いっしょ緒しょによせ、やけ糞くそになつて都々逸とどいつをやり始はじめた。

逃にげた逃にげたよ又また逃にげた 玄真げんしんさまの御威光ごゑくわうに恐おそれ

右守うもりのアリナが尻けつに帆ほかけて スタコラヨイヤサと逃にげ失うせた

さても憐あはれな代物しろものだ 左守さもりシヤカンナはさぞ今いまごろは

吐息といきつくづく机つくえに向むかひ 昔むかしの疵きずを思おもひ出だし

頭痛鉢卷づつうはちまき汗あせタラタラと 藥罐やかんもらしてゐるだらう

ア コラシヨ コラシヨと 家いえを建たてるのは大工だいくさま

壁かべを塗ぬるのはシヤカンナだ 昔むかしの古疵ふるきずゴテゴテと

泥塗どろぬり隠かくすシヤカンナだ 娘むすめの光ひかりでピカピカピカと

螢ほたるのやうな光ひかり出だす 自じぶん分ぶんは泥棒どろぼうして人ひと苦くるしめて

俺おれを泥棒どろぼうと苦くるしめる 泥棒どろぼうするならしつかりやれよ

七千餘國の月の國

大黒主の領分を

片手に握つて立つやうな

わづかたらハン一國の

番頭さまでは氣が利かぬ

左守か「いもり」か知らねども

世間の狭い親爺どの

ア コラサ コラサ

と、精神錯亂者のやうに喋り立ててゐる。格子窓の間から遠慮會釋もなく蚊軍が襲撃する。

(大正一五・一・三一 舊一四・一二・一八 於月光閣 北村隆光録)

第一三章 詰腹(一八〇二)

左守の司の館の離れ座敷には、戸障子を密閉して右守、左守が何事かひそびそ密談に耽つてゐる。

右守うもり「左守様さもりさま、此この間あひだは廣小路ひろこうぢの大火たいくわによりまして大變たいへんにお氣きを揉もましたが、その後ご何なんのお變かはりもありませぬか。あの混雜こんざつにまぎれ込み、賊ぞくがお館やかたに忍しのび込みなど致いたしまして大變たいへん御心配ごしんぱいでございませう」

左守さもり「イヤ御親切ごしんせつに有難ありがたうござる。ヤ、もう年としは取りたくないものだ。かうして床とこの間まの置物おきもののやうに左守さもりの司かみとなつてゐるが、心こころばかり焦あせるのみで「やくたい」もない事ことでござる。谷たに蟻山ぐくやまの谷間たにまに居をつた時ときは、何なんとかして再びふたたび元もとの左守さもりとなり、國政こくせいの改革かいかくをかうもやつて見みやう、ああもやつて見みやう、と十年じふねんの間あひだ心膽しんたんを碎くだいてみたが、實地じつちに當あたるとどうも甘うまく行ゆかぬものだ。自分じぶんの心こころでは確しつりしてゐるやうに思おもふが、何なんとはなしに耄碌もろくしたとみえるわい」

左守様さもりさま、何なにを仰おつしやいますか、あなたあなたの御名聲ごめいせいは大變たいへんな人氣にんきでございますよ、この右守うもりも貴方あなたの御威光ごゑくわうによつて歪ゆがみながらも御用ごようを勤つとめさして頂いただてをりますが、行き届とどかぬ事ことばかりで、さぞお目めだるい事ことでございませう。國王こくわう殿下でんかは未いまだ御若ごじやく年ねんでもあり、左守さもり様に氣張きばつてもらはねば到底たうていタラハン國こくは支ささへられますまい」

賢明けんめいなる國王こくわう殿下でんかといひ、聰明そうめいなる其方そなたといひ、タラハン國こくの柱石ちうせきはもはや

「ビク」とも致すまい。吾は老年、氣ばかり勝つて思ふやうに體が動かない、困つたものだ。政務一切を其方に打ちまかして誠に濟まないと思ふが、若い時の辛勞は買うてもせいと言ふから、どうか一つ氣張つて下さい。自分は床の間の置物であるのだ」

「何を仰有います。青二才の吾々、何が出來ますものか、みな左守様のお指揮によつて、どうなりかうなり御用が勤まつてゐるのでございますから。時に左守様、廣小路の大火災の夜お館へ忍び込んだ泥棒について昨日取調べましたところ、大變な事を申しますので、取調べを中止し牢獄につないでおきました、又しても左守様のお名を引合ひに出しますので、陪臣の手前誠に困つてをります。如何いたせば宜しうございますか」

「この左守を引合に出す泥棒とは一體何者でござるかな」

「何でも天來の救世主、天帝の化身、第一靈國の天人、天真坊だとか申してをります。そして左守様とは兄弟分だと主張しますので、一應伺ひました上取調べをしやうと思ひまして、わざわざお伺ひ致した次第でございます」

左守は當惑さうな顔をしながら、

右守殿、大方それは發狂者でござらう。ともかく拙者が明日取調べてみませう。どうか誰も來ないやうにして下さい」

ハイ畏りました。それから、もう二人の泥棒も天眞坊と同様に左守殿のお名を引合に出し、左守の親分に會はせと主張いたしてをります」

その二人の泥棒の名は何と言ひましたかな」

ハイ、一人はコブライといひ、一人はコオロと申しております」

ハテナ、谷蟻山の岩窟に……」

と言ひかけて俄かに言葉を切り、

長らくの間拙者も谷蟻山の奥深く世を忍んでをつたものだから様子も分らず、

また如何なるものが自分の顔を見知つて吾が名を騙つてゐるかも知れませう。

何はともあれ三人の泥棒を右守殿、そつと吾が館へ呼んで來て下さいませうか。

内々取調べたい事がござるによつて……」

左守様の仰せとあらば、たとへ掟に背いても呼んで参りませう」

「いや白洲で調べるのが規則であれど、この左守は知らるる通りの老體、たうてい足が續かないから、吾が館で取調べてみたいと思ふのだ。左守は一國の宰相、吾が家で調べやうと、白洲で調べやうと些つとも差支へはない筈だ。かかる例は先王の時代から幾度もあつた事だから」

「これはえらい失言をいたしました。しからは明日はこれに引き立てて参りますから、篤りお調べを願ひます。左様なら」

と慇懃に挨拶を述べ己が館へ歸り行く。後に左守は脇息にもたれ、吐息をつきながら獨語。

「アア人間の行末ぐらゐ果敢ないものはないなあ。臥薪嘗膽十年の艱苦を凌いでヤツと目的を達成し、元の左守となつて國政を改革し、新王殿下の政治の樞機に參與する身分となつたと思へば寸善尺魔の世の中、奸佞邪智に長けたる玄眞坊が泥棒となつて入り込み、右守にまでもわが古創を羅列して聞かしたであらう。ア一情けない。どうして今日の地位が保たれやうか、困つた事になつたものだ。自分

は心より泥棒の親分となつてはゐなかつたが、タラハン國を思ふあまり手段を選

まなかつたのが吾が身の不覺だ。そして今度の國政の改革について二百の部下は妨げにこそなれ、力になつた奴は一人もない。アア世の中は正義公道を踏まねば末の遂げられないものだなア」

左守は來し方行末の事など思ひ浮かべて、その夜は一目も得眠らず夜を明してしまつた。

鳥は罫を放れて嬉しげに太平を歌ひ、雀はチュンチュンと愉快氣に軒に囀つてゐる。左守はこれを眺めて又もや獨語、

「アア私は何故あの鳥に生れて來なかつたらう。自由自在に大空を何の憚る事もなく前後左右に翱翔する様はまるで天人のやうだ。雀は無心の聲を放つて千代千代とないてゐる。それにも拘らず、神の生宮と生れた人間の吾が身、何故まアこれだけ苦しみの深い事だらう」

と吐息を漏らしてゐるところへ、玄眞坊、コブライ、コオ口の三人は獄吏に護られ大手を振りながら、裏門を潜つて左守の居間の庭先へやつて來た。左守は玄眞坊の姿を見るよりアツとばかりに打ち驚き卒倒せむとしたが、吾と吾が手に氣を

取り直し、

「やア獄卒ども御苦勞であつた。三人の者はこの左守が預かつておく。早く歸つてくれ」

「ハ―イ」

と言ひながら獄卒は逸早くこの場を立ち去つた。傍に人なきを見すました玄眞坊は、遠慮會釋もなくツカツカと座敷に飛び上り、左守の前に胡座をかき默然として左守の顔を睨めつけてゐる。コブライ、コオロの兩人も玄眞坊の左右に胡座をかき、無雜作に控へてゐる。

左守「ヤアお前は玄眞坊ぢやないか、何處を迂路ついてゐたのだ。さうしてダリヤ姫は手に入つたのか、その後の経過を話してくれ」

玄眞「ハハハハハ、ダリヤはどうでもよいが、オイ兄貴、ずるぶん山カンが當つたものだのう。綺麗な娘を持つたおかげで、一國の宰相とまでなり上つたのだから、ちつとはおごつて貰つても好かりさうなものだ。この間もタラハン市の火事と聞くより兄貴の家が險呑と思ひ、この兩人と共に救援に向かつたところ、譯の

わからぬ雑兵どもが泥棒と間違へ牢獄にぶち込みよつたのだ。お前も俺の危難を聞かむでもなからうに、素知らぬ顔とはあまり蟲がよすぎるぢやないか。そしてあの右守の青二才奴、俺に對して無禮の言をほざきよつた。どうだ兄貴、兄弟の誼で俺の言ふ事を聞いてくれないか」

「一體どうせいと言ふのだ」

「外でもない、あの右守を免職させてその後釜にこの玄眞坊を直すか、それとも叶はずば、兄貴が右守となり、俺を左守に推薦するか、二つに一つの頼みを聞いてもらひてえのだ」

「外の事なら何でも聞いてやるが、オーラ山で泥棒をやつてをつたお前を、左守の司に推薦することは到底叶ふまい。殿下のお許しが無いに定つてゐるからかう」
玄眞坊は大口あけて高笑ひ、

「ハハハハハ、オイ兄貴、そりや何をいふのだ。俺はオーラ山において三千人の泥棒の大親分だぞ、兄貴は僅かに二百人の小泥棒の親分ぢやないか、二百人の親分が左守となつて、三千人の大親分が左守になれないといふわけがあるか。それ

はチと勝手な理窟ぢやないか」

左守は「ウン」と言つたきり、默念として頸だれる。コブライは膝をにじりよせ、

「もし親分、あなたは目的を達したらお前を重臣に使つてやらうと仰有つたな。

なア コオ口お前だつてさうだらう。毎日毎日日課のやうに聞かされてをつたの

だからのう。俺だつて泥棒をしてゐたい事はないが、何分親分の命令を忠實に守

つてやつて来たのだから、親分が出世すりや俺達も出世するが當然ぢやないか」

コオ「ウン、そりやその通りだ。もし親分、いや左守さま、この瘡つ節を買つて

下さるでせうなア」

左守「そりや確かににお前達にも其の約束はしておいた筈だ。しかし今日ではその

約束を實行出来ないのを遺憾とする。たとへわが館へ應援に来てくれたにもせよ、

護衛兵の目を忍び裏門から忍び込み、寶庫の錠前を捻切らうとしてゐたのだから、

誰の目から見ても泥棒としか認められない。今日は最早お前方を罪人と認める。

心易いは常の事、タラハン國の錠は枉げる事は出来ない。三人とも死罪に處すべ

きが掟をきてなれども、兄弟分きやうだいぶんや主従しゆじうの誼よしみで俺おれが見逃みのがしてやらう。サア一時いつときも早くはや裏門うらもんから姿すがたを隠かくしたらよからう。此この上うへタラハン城じやうに迂路うろつけば再びふたたび捕縛ほばくせらるるであらう、さうすりやもう俺おれの手てには及およばない」

玄眞げんしん「工工仕方しかたがない、今日けふはおとなしく歸かへつてやらう、しかし左守さもり、ずゐぶん金かねが溜たまつたらう、ちと土産みやげに出来ないか、金かねなしには何所どこへ行くわけにもゆかないからな」

左守さもり「そんなら仕方しかたがない、お前まへが忍しのび込こもうとしたあの庫くらの中なかの有金ありがねをすつかりやるから、それを持つて早くはや姿すがたを隠かくしてくれ。後あとは私わしが何なんとか始末しまつを付けておくから」

玄眞げんしん「ヤ、實じつのところはお察さつしの通とほりその金かねが欲ほつしかったのだ。さすがは兄貴あにきだ」
コブ「ヤアさすがは親方おやかた……金かねさへあれば名なも位くらゐも何なにも要いらぬぢやないか」
コオ「親分おやぶん有難ありがたう、そんなら遠慮えんりよなしに三人さんにん分配ぶんぱいして歸かへります」

これより三人さんにんは山吹色やまぶきいろの小判こばんを「しこたま」身みにつけ、裏門うらもんより木この葉は茂しげれる密林みつりんを縫ぬうて何處いづこともなく姿すがたを隠かくした。後あとに左守さもりは料紙れうしを取りよせ、筆ふでの跡あとも麗々れいれい

しく、國王、王妃兩殿下を初め右守に當てたる書置を殘し、自分は白装束となつて、三五の大神の祭りある神前にて腹搔き切り立派な最後を遂げた。

かかる事とは夢露知らぬ右守の司は、様子いかにと再び左守の館を訪ひ、案内もなく離棟の座敷に行つて見れば、左守は紅に染つて縛れてゐた。そして其處に三通の遺書が認めてあつた。アリナは取るものも取りあへず、自分宛のを封押し切つて讀み下せば左の通りであつた。

一、拙者事、國王殿下のお見出しに預かり日頃の願望を達し、國政に參與の榮を擔ひをり候處、今日玄眞坊、コブライ、コオ口の無賴漢、左守たる拙者に向かひ無禮の言を吐き候も、これを咎むるの權威なく、止むを得ず金錢を與へて逃げ歸らし申し候。かくの如き左守の處置は國王殿下の發布されたる法律を無視し、且つ蹂躪せる大罪にして、到底此のまま職に留まるべき資格なく、國家の大罪人なれば、兩殿下を初め、右守殿其の他國民一般に對し謝罪のため、皺腹切つて相果て申し候。今後は何とぞ何とぞ殿下を輔け奉り、タラハン國の基礎を益々鞏固な

らしむべく、奮勵努力あらむ事を願ひ申し候

國家の大罪人 シヤカンナより

右守殿參る

と認めてあつた。アリナは之を見るより驚きながらもわざと素知らぬ顔を装ひ、城中に參内して兩殿下に事の顛末を詳細に言上し、二通の遺書を捧呈した。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一五・一・三一 舊一四・一二・一八 於月光閣 加藤明子録)

第一四章 障路(一八〇三)

玄眞坊、コブライ、コオロの三人は左守の情けによつて、漸くに死罪を免れ、持てるだけの黄金を胴巻に押し込み、重たい腰をゆすりながら、人跡稀なる森林

を探りて、一日一夜西へ西へと駆け出して行く。三人とも身體繩のごとくに疲れ果て、最早一步も歩めなくなつてしまつた。

コブ「モシ玄眞さま、なにほど黄金を澤山貰つても體が達者になるといふでもなし、腹が膨れるといふでもなし、かうなつてみると黄金も何も役に立たないものですな。重たいばかりで、こんなこと三日も続けやうものなら、たうてい命はありませぬワ」

玄眞「馬鹿を言ふな、金さへ有れば、どんな甘い物でも食られるし、どんな別嬪でも買はふと儘だ。今日は黄金萬能の世の中だからのう、着炭議員に成らうとしても五萬や十萬の金は要る。短命内閣の總理大臣に成らうて思つても、二千萬兩や三千萬兩の金が要るのだ」

「さうかも知れませぬが、かう山林ばかり跋渉してゐては、別嬪も見付からず、甘いもの食はうにも、味無いもの食はうにも、テンで店屋も無いぢやありませぬか。一千万圓の包より一升米が貴いやうに私は思ひますわ。アア何とかして食料に有りつきたいものだなア」

「そんな弱音を吹くな。もう一日ばかり走れば安全地帯がある。そこへ行けば女郎もゐるし、どんな綺麗な着物でも賣つてゐる。百味の飲食も待つてゐる。マ、そこまで辛抱したが可からう、腹が空つて仕方なければ拇指の爪なつと甜つてをれ。さうすりや些とばかり飢ゑを凌ぐ事が出来やうも知れぬ。あの章魚を見い、章魚は食ふ物が無くなると、自分の足を皆食つてしまふものだ」

「人間を章魚に譬へられちや堪りませぬがな。お前様こそタコ坊主だから足なつと甜つてをりなさい。コブライは痩せても枯れても一人前の人間様だ。タコの眞似は出来ませぬワイ、のうコオ口。もう一足も歩けぬぢやないか」

コオ「俺も苦しうてたまらぬが、何處でこのお金をもつて甘いものを買ひ、別嬪を抱いて寝やうと思へば、また元氣が出て来て、些とばかり歩けるやうになるのだ。何といつても人間は心次第だ。もう暫時だから玄眞坊様の仰有る通り、辛抱して跟いて行かうぢやないか。こんな所で野垂死しても約らぬからの」

コブ「エー、仕方がない。またコンパスに御苦勞をかけやうかな」

と澁々ながら一二丁ばかり進んで行くと、十手指叉を持った十數人の捕手が、身

を没するばかりの萱草の中から現はれ出で、三人を取りまいてしまった。右の方は千仞の谷間、三方は捕手に圍まれ進退これ谷まり最早これまでと、三人一度に青淵めがけて、九死に一生を僥倖せむものと、命の安賣をやつてみた。捕手は「アレヨアレヨ」と眺めてをれど、名に負ふ斷岩絶壁近よることも出来ず、みすみす敵を見捨てて、ブツブツ小言を言ひながら歸り行く。

渺茫として際限もなき大原野の真中を、ただ一人の老人が蚊の鳴くやうな聲で歌を唄ひながら通つてゐる。

川の流れと人の身の行末こそは不思議なれ
タラハン城に仕へたる吾は左守の司なるぞ
いつの間にかは知らねども限りも知らぬ大野原
さまよひ來たる訝かしさ道ゆく人も無きままに
言問ふ由もなくばかりアアいかにせむ千秋の

恨み^{うら}を野邊^{のべ}に残^{のこ}しつつ あへなき最後^{さいご}を遂^とぐるのか

アア淺^{あさ}ましや淺^{あさ}ましや タラハン城^{じやう}の方面^{はうめん}は

何處^{いづこ}の空^{そら}に當^{あた}るやら 百里^{ひゃくりむちう}夢中^{むちう}にさまよひし

吾^わが身^みの上^{うへ}こそ悲^{かな}しけれ 原野^{げんや}に千草^{ちぐさ}は生^はえぬれど

花^{はな}も實^みもなき枯野^{かれのほら}原 吹^ふき來^くる風^{かぜ}さへ音^{おと}もなく

鳥^{からす}の聲^{こゑ}さへ聞^きこえず 寂光^{じやくくわう}淨土^{じゆつど}か知^しらねども

天地^{てんち}一度^{いちど}に眠^{ねむ}りたる 如^{ごと}き此^この場^ばの光景^{くわうけい}は

淋^{さび}しさたとふる物^{もの}もなし ああ惟^{かむながらかむながら}神^{かみ}々々

三五^{あななひけつ}教^{おほみかみ}の大御^{みちび}神^{たま} 導^{とこしへ}き玉^{たま}へ永^{とこしへ}久^への

住處^{すみか}と定^{さだ}めしタラハンの 城下^{じやうか}に建^たちし左守^{さもり}家^けへ

思^{おも}へば思^{おも}へば人^{ひと}の身^みの 行末^{ゆくすゑ}こそは果敢^{はか}なけれ

此世^{このよ}を造^{つく}りし神直^{かむなほひ}日^ひ 心^{こころ}も廣^{ひろ}き大直^{おほなほひ}日^ひ

ただ何事^{なにごと}も人^{ひと}の世^よは 直日^{なほひ}に見^み直^{なほ}し聞^き直^{なほ}し

身^みの過^{あやま}ちは宣^{のりなほ}直^す 三五^{あななひけつ}教^{みをしへ}の御^み教^{をしへ}は

梅公別の師の君ゆ 完全うまらに委曲つばらに聞きつれど

見直みなほす術すべも無なきままに 名なさへ分わからぬ荒野原あれのはら

吾等われらは何なんの罪つみあつて かかる處ところへ落ちたのか

合點がてんのゆかぬ世よの中なかぞ 憐あはれみ玉たまへ大御神おほみかみ

導みちびき玉たまへ吾わが宿やどへ ああ惟神かむながらかむながら々々

御靈みたま幸さちはへましませよ 旭あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも たとへ大地だいちは沈しづむとも

誠まことの力ちからは世よを救すくふ 神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと惡あくとを立別たてわける 此世このよを造つくりし神直日かむなほひ

心こころも廣ひろき大直日おほなほひ ただ何事なにことも人ひとの世よは

直日なほひに見直みなほす道みちぢやげな 誠まことの力ちからといふ事ことは

此世このよを造つくり玉たまひたる 眞まことの神かみの力ちからだる

人間界にんげんかいに身みをおいて どうして眞まことが出るものか

眞まことの力ちからの神かみさまよ 吾等われらの淋さびしき境遇きやうぐわいを

何とぞ救ひ玉へかし ひとへに願ひ奉る

三千世界の梅の花 一度に開く神の國

開いて散りて實を結ぶ 月日と土の恩を知れ

此世を救ふ活神は 高天原に神集ふ

などと尊き宣傳歌 肝に銘じて忘れねど

只一輪の梅さへも 開いて居らぬこの野邊は

地獄の道の八丁目 八衢街道の續きだる

かかる淋しき大野原 さまよひ來たる吾が身こそ

前世現界相共に 無限の罪を重ね來て

神の懲戒うけながら 身魂を研いてをるのだる

死んだ覺えのない吾は 幽冥界とも思へない

ああ惟神々々 神が此世にあるならば

何とぞ吾が身を導いて 戀しき吾が家にかやせかし

ひとへに願ひ奉る

かく歌ひながら、大野原に蚯蚓の這うたやうについた細路を辿り行くと、土の中からムクムクと頭だけが動いてゐる。シヤカンナはこの淋しい原野の正中に松露のやうな頭が動いてゐるのは合點が行かぬと、手に持った杖で二つ三つこついてみると、「アイタタ アイタタ」と言ひながら、月が山の端を昇るやうに、チクリと土から抜け出で、肩まで現はして來た。よくよく見れば玄眞坊の姿そつくりである。シヤカンナは驚いて、

「オイ、コラ、汝は玄眞坊ぢやないか。こんな所に何をしてゐるのだ」

玄眞「ヤ、私はお前にお詫びをせにやならぬ事があるのだ、確かに覚えてをらぬが、お前の館へ行つて無理難題を吹きかけ、ドツサリ金をぼつたくつて歸つた天罰で、幽冥主宰の神から澤山な黄金を罰則として體に縛りつけられ、その重みで體が地の中へにえ込んでしまひ、今ヤツとの事で首だけ地上へ現はしたところだ。どうか「許す」と一言言つてくれ。さうすりや俺の罪も輕うなるだらうから

……」

シヤ「何だか俺は足がヒヨロ ヒヨロするけれど、體が輕くて足が地上を離れさ

うで危険きけんでたまらないが、お前まへはまた體からだが重おもいとは不思議ふしぎな事ことだのう。それぢやお前まへの首くびを千切ちぎつてやるから、胴柄どうがらぐらゐ土つちに托たくしておいたらどうだ。いづれ遅おそかれ早はやかれ土つちの中なかへ這入はいる體からだだからのう

「オイ兄貴あにき、そんな無茶むちやなこと言いうてくれない。天てんいち一いちの手品師てじなしなら、首くびをチヨン切ぎつても又またつげるだらうが、俺おれのはさうはいけないよ。どうか兄貴あにき、金剛力こんがうりきを出だして俺おれの體からだをグツと引ひき上げてもらへまいかの」

「體からだを引ひき上げといつたつて、首くびから下したが埋うづもつてゐるのだから、手てをかける所ところもないぢやないか、それでも強たつて引ひき上げといふのなら、兩方りやうほうの耳みみを掴つかんで試ためしにやつてみやうかな」

「どうでも可よいから、ともかく一寸いっすんでも體からだを地ち上じやうへ出だしてくれ、苦くるしくて堪たまらぬ、どうやら地ちの底そこの地獄ぢごくへ引ひつぱり込まこまれさうだ」

「ヨ一し」と言いひながらシヤカンナは、一生いっしやうけんめい懸命けんめいに冷つめたい手てで冷つめたい耳みみを掴つかんでみたが、磐石ばんじやくのごとくビクとも動うごかない。さうかうしてゐる所ところへ、又またもや二人ふたりの男おとこが、濡衣ぬれぎぬを纏まとひながら、力ちからなげにトボトボとやつて來くる。シヤカンナは後あとふり

向いて、

「ヤ、お前はコブライにコオ口の兩人、どして又こんな淋しい所へやつて來たの
だい」

コブ「ヤ、親方でございますか、まづ御壯健でお芽出たう。實アはつきり覺えま
せぬが、お前さま所で金を貰つて歸る途中追手に出會ひ、谷川へ飛び込んだと思
や、何時の間にかこんな所へ來てゐます。しかし飛び込んだ際に折角貰つた山吹
色はみんな谷底へ捨ててしまひ、今ぢや缺けた「かんつ」もございませぬが、ど
うか親方、チツとばかりお金を恵んで貰へますまいかな」

シヤ「俺だとしてその通りだ。一文生中も身につけてゐないのだ。こんな所を旅行
するのに家もなし店もなし、金が要るものかい。腹が減つたら草でも千切つて食
つて行くより仕様がなないぢやないか」

コブ「ヤ、そこにゐるのは玄眞さまぢやないか、何ぢやい、首ばかり出しやがつ
て、……サ、起きたり起きたり」

玄眞は目を無性やたらにジヤイロコンパスのやうに廻轉し始め、口も目も鼻も

一所ひとところに集中しぶちうし、顔面筋肉がんめんきんにくをしきりに活動くわつどうさせ出した。

シヤ「ヤ、こいつアどうやら地獄ぢごく落ちらしいぞ。まだ黄金わうごんに執着しぶちやくしん心こを持つてるらしいぞ、オイ、玄真げんしん、すつぱりその金かねを思おもひ切きつてしまへ。そすりや助たすかるだらう」

玄真げんしん「ヤア、何なにほど金かねが欲ほしうても、かう苦くるしうては欲よくにも得とくにもかへられないワ、モウ金かねはコリコリだ。一文いちもんも要いらない。オイ黄金わうごんの奴やつ、今日けふから暇ひまをやるから勝手かつてに何處どこかへ行いつてくれ」

と言いふが否いなや、子供こどもの玩具おもちゃの猿さるが弓弾ゆみはぢきに弾はぢかれたやうな勢いきほひで、ポンと地上ちじやうさん三間げんばかりも飛とび上あり、ドスンとまた元もとの所ところへ落おちて來きた。

シヤ「オイ、玄真坊げんしんぼう、欲よくといふ奴やつア怖こはいものぢやのう」

玄真げんしん「本當ほんたうにさうだ。おらモウ金かねにはコリコリしたよ。しかしお前まへは結構けつこうな夕ゆラハン城じやうの館やかたを捨すてて、何故なぜ又またこんな所ところへ來きたのだ。チツと合點がてんが行ゆかぬぢやないか、……ハハ、おほかた俺おれの金かねが惜をしうなつて、追驅おつかけて來きたのだな。それで俺おれを器械きがい仕掛しかけで地ちの中なかへ電氣でんきでも引張ひっぱつてゐやがったのだなア」

「馬鹿を言ふない。俺はモウ金なんか見るのも厭だ。しかし俺は、今フツと思ひ出したがお前を逃がした跡で、たしかに神様の前で切腹をして果てたつもりだが、何故またこんな所へやつて来て生きてゐるのだろ。丸で狐につままれたやうで、現界か幽界かチツとも譯が分らないのだ。一體ここは何處だと思つてゐるか」

「サ、どうも不思議でたまらぬのだ。お前の話を聞くと、お前が俺より先死んだものとすれば、先に此所へ来て居らにやならぬ筈だ。俺たち三人は一日一夜山や谷を走つて谷川へ飛び込んだやうな氣がする。それが先づ此處へ來てる筈がない。てもさても合點の行かぬ事だのう」

コブ「コリヤどうしても、玄眞さま、幽界旅行をやつてゐるのに違ひありませんよ。吾々はかうして生きてると思つてるが肉體はとうに死んでしまひ、精靈體ばかりが此所へ迷つて來たのでせう。靈界には時間空間の區別も無く、遠い近いもないさうだから、先へ死んだ者が後へなるとも、後から死んだ者が先へなるとも、そんなこた分りませぬワイ。マア死んだものとしておけや、後で驚かいで宜しか

コオ「オイ、コブライ、どうやらこりや地獄街道の八丁目らしいぞ。困った事に
なつたものぢやないか」

玄真「さうだ、ちよつと面食つたな、然しながらかうして四人の道伴れが出来た
以上は、淋しさも稍薄らいで来たやうだ。とも角、地獄でも何處でもかまはぬ、
行ける所まで行かうぢやないか。俺達や元より極樂に行つて無聊に苦しむよりも、
地獄へ行つて車輪の活動をやるが望みだからのう」

コブ「そのお説はハル山峠の岩上で承りましたね、サ、行きませう。あまり淋し
いから一つ行進歌でも唄はふぢやありませんか」
玄真「そら面白からう、まづ俺から歌うてやる。」

限りも知らぬ大野原

ここは地獄の八丁目

八衢街道か知らねども

三人の家來を引きつれて

名さへ分らぬ荒野原

進みゆくこそ勇ましき

もしも此世に天國が

あるものとすりや行つてみやう

無ければ是非なく地獄道

肩胛いからし進まうか

しかし此世に地獄とか

極樂などがあるものか

どこまで行つても此の通り

冷い風がピューピューと

草の葉末をなでながら

遠慮もなしに通つてゐる

これがヤツパリ地獄だろ

何ほど地獄が怖くとも

こんな事なら屁のお茶だ

ドッコイ ドッコイ ドッコイ シヨ

コラコラ三人の家來ども

しつかり後からついて來よ

落伍をしても知らないぞ

アレアレ不思議アレ不思議

向方に妙な建物が

チラチラ吾が目につき出した

こいつアやつぱり現界か

現界ならば尚の事

一生懸命にはしやいで

元氣をつけて行かうかい

タラハン城を占領し

天晴れ國王と成りすまし

羽振りを利用かそと思ふたに

いつの間にかは知らねども

こんな所へ彷徨うて

東西南北方位さへ

わからぬ今日の不思議さよ 向方に見ゆる建物は

鬼か悪魔の住處だろ サアサア行かうサア行かう

何をビリビリしとるのだ もしも地獄があるならば

地獄の鬼を引捉へ 蝗のやうに竹串に

竝べて刺して火に炙り 片つ端から食てやるか

アア面白い面白い 地獄の王の御出立

鬼でも蛇でもやつて来い ドツコイ ドツコイ ドツコイシヨ

などと一生懸命に歌ひながら、頭を前方に突出し、チヨコチヨコ走りに進んで

ゆく。三人は四五丁ばかり取り取り残され、ヨボヨボと細い聲で行進歌を歌ひながら

ついて行く。

玄眞坊は足許ばかり見詰めて突進した途端に四辻の立石に頭をぶつつけ、「キヤア、ウーン」と言つたきり、其の場に蛙をぶつつけたやうにふん伸びてしまつた。

(大正一五・一・三一 舊一四・一二・一八 於月光閣 松村眞澄録)

第一五章 紺靈(こんれい)〔一八〇四〕

シヤカンナ、コブライ、コオロの三人(さんにん)は、玄眞坊(げんしんぼう)の姿(すがた)を見失(みうしな)はじと行進歌(かうしんか)を歌(うた)ひながら進(すす)んで來(く)る。コブライは甲聲(かんごゑ)を絞(しぼ)りながら、

玄眞坊(げんしんぼう)の慌(あわ)て者(もの) 大野ヶ原(おほのがはら)を吹(ふ)く風(かぜ)に

驚(おどろ)きをつたか魂消(たまげ)たか 頭(あたま)を先(さき)に尻後(しりあと)に

突出(つぎだ)しながら不細工(ぶさいく)な スタイルさらして行きよつた

彼奴(あいつ)のやうな慌(あわ)て者(もの) 生(う)みよつた親(おや)の面(つら)が見(み)たい

蛙(かはづ)のやうな面(つら)をして トンビのやうな尖(とが)り口(ぐち)

もの言(い)ふたびに目(め)と鼻(はな)と 口(ぐち)とを一つ(ひと)によせる奴(やつ)

もしも地獄があつたなら 地獄の町の見世物に
 出したらよつく流行るだる ア面白い面白い
 オーラの山に立籠り ドエライ山子を企みよつて
 目算ガラリと相外れ ダリヤの姫には目尻下げ
 面を草紙に使はれて 大きな恥をかきながら
 蛙の面に水かけた やうな彼奴の無神経
 呆れてものが言はれない 又もや一つの大望を
 企むは企んでみたものの これ又ドエライ失敗で
 火事場泥棒のやり損ね 左守の館で捕へられ
 冷い牢屋へブチ込まれ 右守の司の訊問を
 シヤーツクシヤ一の呑氣相に 煙りにまいて答辨し
 左守の館に引き出され またも御託相ならべ
 お庫の金を取り出して 己がポツポへ托し込み
 夜晝なしに山路を 走つた揚句に情けなや

捕手の奴に見つけられ
千尋の谷間にザンブリと

俺等と共に飛び込んで
命死せしと思ひきや

こんな所へやつて来た
不思議も不思議こんなまた

不思議が世界にあるものか
玄眞坊の慌て者

アレアレあこに倒れてる
野壺のはたのクソ蛙

掴んで大地にぶちつけた
やうなザマしてフン伸びて

ビリビリ慄うてけつからア
何と因果な奴だなア

この有様を眺むれば
お氣の毒でもあるやうだ

又また小氣味がよいやうだ
こんな奴等をただ一人

助けてみたところで仕よがない
とは言ふものの俺たちも

こんな淋しい街道を
行くのにや人数が多いほど

心が丈夫になるやうだ
厭でも應でも助けよか

コラ コラ コラ コラ 玄眞坊
早くしつかりせぬかいと

胸と頭の嫌ひなく
グチャヤ グチャヤ グチャヤと踏み込めば

ウンとばかりに呻きつつ　息ふき返し玄眞坊

「アイタタタツタ　アイタタタ　俺の頭を踏みやがった

肋の骨を二三本　どうやらコブライが折りよつた

元の通りにして返せ　親から貰うた大切な

一生使ふ寶だぞ　アイタタタツタ　アイタツタ

コレコレシヤカンナ左守さま　私の仇を討つとおくれ

どうしても蟲がいえぬ程に　ああ惟神々々

目玉飛び出しさうだわい」

などと、體も動かぬ癖に腮ばかりを叩いてゐる。

コブ「ハハハハ、オイ玄眞さま、起きたらどうだい。體も動かぬくせに毒つきや

がって何のザマだ。サア起きたり起きたり、起きな起きぬでよいワ、吾々三人は

放つといて行くからのう。仇討つてくれの何のつて、馬鹿にするない」

玄眞「オイ、コブライ、さう怒るものぢやないワイ、とつくりと話を聞いてくれ。

かたき 仇を討つてくれといふのは、この途端の立石を叩き毀してくれと言ふのだ。こいつがあつたばかりに、俺がこんな目に遇うたのももの

コブ「ナールほど、こいつア怪體な石だな。ヨーヨー　ヨーヨー　ヨーヨー、目が出て来たぞ。それ鼻だ、口だ、耳まで生えて来たぞ。此奴、化立石だな」

立石は俄かに白髪しらがの姿すがたと變じ、

「ギヤアハハハハ、コラ耄碌もうろくども、俺を誰だと心得てをるか、俺は月の國でも名高い小夜具染のお紺こんといふ鬼婆おにばばだぞ」

コブ「ナニ、小夜具染のお紺？、まるで狐きつねみたいな奴やつだな。小夜具染でも椿染つばきぞめでもかまふものかい。そんなヒヨロヒヨロした婆ばばアの態さまをしやがつて、偉えらさうな口くちを叩たたくない。俺おれを何方どなたと心得こころえてけつかるのかい」

お紺「ギューフッフッフ」

「コラ、お紺、ソーラ何なにぬかしてけつかるのだい。ギユッフッフとは何なんだい。それほど牛糞ぎゅうふんが欲ほしけら、そこらの街道かいだうを歩あるいて來こい、馬糞ばふんも牛糞ぎゅうふんも澤山たくさん落ちてるワイ。おほかた汝きみド狐きつねの化ばけそこねだる」

「グツグツ吐すと、【わいら】も一緒に食つてやるか。折角玄眞の野郎を食つてやらうと思へば、汝達が出て来やがつて邪魔をさらすものだから、いささか困つてゐるのだ。エ、グツグツさらさずに早く何處へ行け。サアこれから汝等が通つた後は、このお紺が玄眞坊の體を叩きにして團子に丸めて食つてやるのだ、ギョーホツホホホ、何とはなしに甘さうな香がするワイ……のう」

玄眞「オイ、コブライ、シヤカンナの兄貴、コオ口の乾兒、メツタに俺を見捨てやせうまいの、この婆アを平らげてくれないか」

シヤ「ウム、どしたら可かるかの。コブライ、お前は如何する考へだ？」

コブ「……」

お紺「喧ましいワイ、泥棒ばかりがよりやがつて、何をゴテゴテ言ふのだ。汝の成敗さる所はこの先にある、楽しんで行つたがよからうぞ。この玄眞坊といふ奴、このお紺といふ女房があるにも拘らず、梅香といふスベタ女郎に現をぬかし、俺に空閨を守らせた無情冷酷なクソ爺だ。その恨みが重なつて道端の立石となり、玄眞坊の賣僧が、通りやあがつたら通りやあがつたらと、寒い風に吹かれながら、

此所に待つてをつたのだ。サ、モウかうなりや最早百年目、ジタバタしても叶ふまい。小夜具染のお紺の面を見覚えてをるだろな」

と言ひながら、カツカツと喉を鳴らした途端に、パツパツと火を吹き出し、玄眞坊の禿頭を、紅蓮の舌で嘗め盡す。その熱さ苦しさに、玄眞坊は手足をジタバタさせながら、蚊の鳴くやうな聲を出して、

「オーイ、シヤカンナ、助けてくれ助けてくれ」

といふ聲さへも次第々々に細つてゆく。シヤカンナは見るに見かねて、一生懸命に「一二三四五六七八九十百千萬」と天數歌を歌ひ終るや、小夜具染のお紺の姿は煙草の煙のごとくに、フワリフワリと空中に揺れながら消えてしまつた。

不思議にも玄眞坊は體の自由が利き出し、又もや一行の先に立ち、性こりもなく、頭を先に尻を後ろにポイポイと蝗の蹴り足よろしく、細い脛をふん張りながら進み行く。三人は又もや玄眞坊に瞬く内に二三町ばかり遅れてしまつた。

コブ「モシ、シヤカンナさま、よほど玄眞坊は罪な男と見えますな。あのお紺といふ奴、一遍玄眞坊と結婚したに違ひありません、玄眞坊ぢやなくつても、あ

の面では私だつて厭になりますワ

シヤ「サア結婚か、お紺か、み紺か知らぬが随分むつかしい御面相だつた。かやうな妖怪が出没する以上は、ヤハリ地獄の八丁目に違ひなからうよ。マアボツボツ前進することにせうかい」

コブ「何だかそこら中が淋しくなつたぢやありませんか、まるきり壺を被つてるやうな気分になりました。コオロ、お前はどうか」

コオ「俺だつて、やつぱり淋しいワイ。然しながらお紺でもお半でもよいから、チヨイチヨイ出てくれると退屈ざましになつていいぢやないか。玄眞坊にやチツとばかり氣の毒だけれどのう」

コブ「サ、御兩人、参りませう」

と言ひながら先に立ち、

「思へば思へば不思議なる

怪態な面を見せよつた

妖怪變化が現はれて

玄眞坊の慌て者

こんな街道の真中で　よい恥さらしをやりよつた
彼奴もチツとは良心の　かがやき亘ると相見えて
俺等三人を後に置き　逃げるが如くに行きよつた
思へば思へば可哀さうぢやな　サアサアこれから氣をつけて
行かねばどんな妖怪が　出現するかも知れないぞ
氣をつけめされよ御兩人　八衢街道の不思議さは
たうてい現界ぢや見られない　アア面白い怖ろしい
恐い悲しいジレツたい　思へば思へば情けない
ああ惟神々々　目玉が飛び出しさうだワイ
玄眞坊は一生懸命に進行歌を唄つてゐる。

□
アア恥づかしや恥づかしや　昔の俺の女房が
執念深くも道端に　石の柱と化けよつて

俺おれの通とほるを待まち伏ぶせて

どぎつい憂う目めに會あはせよつた

ホほンに女をんなといふ奴やつは

仕しま末つに了をへぬ代しろ物ものだ

優やさしく言いへばの上あがる

きつく叱しかれば吠ほえくさる

殺ころしてやつたら化ばけて出でる

これは天てん下かの通つう弊へいだ

お紺こんの奴やつは俺おれの手てで

殺ころした覺おほえはなけれども

悋りん氣きの深ふかい奴やつと見みえ

執し念ふねん深ふかくも化ばけて出でて

俺おれを食くはふと言いひよつた

ても怖おそろしい婆ばばアだな

あんな女をんなにかかつたら

藪とり桶もちへ兩り足やうを

突つ込つんだよりもまだ辛つらい

苦くるしい思おもひをせにやならぬ

金かねと女をんなといふ奴やつは

吾わが身みを亡ほろぼす仇きう敵てきと

今いまや漸やうく悟さとりけり

とは言いふもの何ど處こまでも

金かねと女をんなは捨すてられぬ

人ひとと生うままれた上うからは

どしても女をんなと黄わう金こんが

無なければ此この世よが渡わたれない

善ぜん惡あくたがひに相あひ混こんじ

美び醜しうたがひに交まはつて

此世の總てが出来のた　これを思へば地獄だと

言つたところで何怖い　地獄の中にも極樂が

キツと設けてあるだらう　それを思へば幽冥の

旅路も結局面白い　ドツコイドツコイ　ドツコイシヨ

アイタタタタツタ　アイタタツタ　何だか知らぬが足許に

喰つきよつたに違ひない　皆の奴は何してる

さつてもさてもコンパスの　弱い奴等は仕様がな

俺はテクシーの自動車で　一瀉千里の勢ひで

こんな所までやつて来た　彼奴等三人の姿さへ

吾が目に入らぬ遅緩しさ　一筋道のこの街道

外へは迷ふはずがない　アア待ちどうや　じれつたや

アイタタタタ　アイタタツタ　又もやこんな街道の

どう真中に立石が　出しゃばりやがつて俺達の

頭をコンとやりよつた　今度はさうは行かないぞ

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 百 千

唱へてやつたら滅茶々に煙となつて消えるだろ

一二三四五六七八九十百千

萬の神の御降臨 ひとへに仰ぎ奉る

ああ惟神々々 恩頼を垂れ玉へ

不思議や立石は煙のごとく中空に消え失せてしまった。玄眞坊は何だか前進す

るのが俄かに恐ろしいやうな氣がし出したので、しばらく路傍に佇んで三人の落

伍組を待つてゐると、一行はヤツとの事で此場へ追つ付き來たり、

シヤ「ヤ、とても早いコンパスだのう、またお紺に出會つたのだる」

玄眞「お察しの通り、お紺が何か知らぬが、又もや石柱が飛び出しやがつて、頭

をおコンと打たしやがつた。けれどもな、お前の數歌の受賣りをやつたところ、

煙となつて、コツクリコと消えてしまったのだ。てもさても數歌の威力といふも

のは偉いものだワイ……と、このやうに今感じたところだ」

「オイ玄眞、向方に厳しい赤門が見えるぢやないか」

「ウンさうだ、いよいよ赤門だ。何だか小氣味が悪いので、實アお前の追付くのを待つてゐたのだ」

「ハハハハ、ヤツパリ偉さうにいつても、心の大根は弱い所があると見えるワイ。サ、俺が先頭に立つから、お前等従いて来い」

と言ひながら、シヤカンナは一行の前に立ち悠々と赤門に近づいた。冥府の規則として白赤の守衛が二人嚴然と控へてゐる。

赤「コリヤコリヤ、其方は何者だ」

シヤ「ハイ、私はタラハン城の左守の司シヤカンナと申す者でございます」

赤は横に細長い帳面を繰りながら、

「成るほど、お前さまの命数は盡きてゐる。すぐさま天國へやつてやりたいは山々

だが、チツとばかり八衢に修業をして貰はねばならぬかも知れぬ、何事も伊吹戸主の御裁斷を仰いだ上的ことだ。サ、お通りなさい」

とシヤカンナの尻を叩けば、シヤカンナは風に木の葉の散るごとく、フワフワフ

ワと門内に翔つやうにして這入つてしまつた。赤は玄眞坊に向かひ、

「オイ汝は玄眞坊といふ悪僧だらうがな。汝はどうしても地獄代物だ、然しながら未だ命数が残つてゐる。現界に未だ籍のある奴ア、ここの管轄區域ぢやない、サ、トツトと歸れツ」

玄「なるほど、ずゐぶん私は悪僧でございます。然しながら一つも成功した事はございませぬ。何れも未遂犯でございますから、どうぞ大目に見て下さい」

赤「エー、ゴテゴテ言ふな、歸れといつたら歸らぬか」

と二錢胴貨のやうな目玉を剥出せば、玄眞坊は慄ひ戦き縮こまつてしまふ。

赤「オイ、そこなる兩人、その方もやつぱり泥棒稼ぎをやつてゐる奴だろ、コブライにコオロと言ふだろ」

コブ「お察しの通りでございます」

コオ「其通りでございます」

赤「汝もなかなか罪の重い奴だが、未だ現界に籍が残つてゐる。サア、一時も早く立ち歸れツ」

と赤門をピシヤツと閉め、白の守衛と共に門内に姿をかくした。三人は已むを得ずトボトボと元來し道を七八丁ばかり引き返したと思へば、自分の耳元にやさしい女の聲が、電話がかかつて來たやうな程度で聞こえて來る。三人は揃ひも揃ひて一度にパツと氣がつき四邊を見れば、自分はタラハン河の河下に何人かに救ひ上げられ、澤山の見物に取りまかれ、一人の綺麗な女に介抱されてゐた。この女はトルマン國を抜け出した妖婦千草の高姫であつた。

以上は甦つた玄眞坊以下の幽界想念の幕である。

(大正一五・一・三一 舊一四・一二・一八 於月光閣 松村眞澄録)

第三篇

慘嫁僧目

第一六章 妖魅返（一八〇五）

タラハン城市を西へ距る三十里ばかりの所に岩瀧村といふ小部落がある。此所には魚ヶ淵といつて、蒼み立つた可なり廣い水溜があり、澤山な魚が四季ともに集中してゐる。印度の國の風習として妄りに生物を食はないので、魚類は日に日に繁殖するばかりであつた。水一升魚一升と稱へらるるこの魚ヶ淵へ時々漁に行き首陀があつた。淨行や刹帝利や毘舍などは決して魚を漁つたり、殺生などはやらないが、首陀となると身分が低いため、殆んど人間扱ひをされてゐないので、何ほど殺生をしても神佛の咎めは無いといふ信念が一般に傳はつてゐた。然しながら淨行、刹帝利、毘舍といへども、生きた物を食はないばかりで、店舗に賣つてゐる魚ならば代價を拂つて買求め、これを食膳にのぼす事は別に殺生とも感ぜてゐないのである。

夏木茂れる川縁の木蔭に腰打ちかけ雑談に耽りながら、四五人の首陀が魚漁りの用意をやつてゐると、淵へ舞込んで來た三つのコルブスがあつた。首陀は先づ

岩上からこのコルブスに向かつて網を打ちかけ、漸くにして道傍に拾ひ上げてみたところ、一人はどうしても修験者の果らしく、二人の奴はどこともなしに泥棒らしい面相をしてゐるので、古寺の坊主を呼び葬式をすることとなつた。泥棒なんかはその死骸を虎狼の餌食に任して省みないが、修験者となれば何うしても捨てておくわけには行かぬといふので、珠露海といふ吉凶禍福や卜筮などを記した經文の記事を案じて、五行葬の何れに爲さむかとやつてみたところ、この修験者は何うしても土葬にせにやならぬ、といふ占が出たので、村人が寄つて掛つて、體をそのまま土の中へ埋け、印を立てる代りに耳から上面を出しておいたのである。五行葬の中には野葬、木葬、火葬、土葬、水葬といふ五つの葬式法がある。そして木葬といふのは、コルブスを木の上に掛けて置き、風に晒す葬式法である。この珠露海の卜筮にかからない者は神の冥護のない者として、死屍を路傍に捨て置く事になつてゐた。かかる所へ四十前後の美人が宣傳歌を歌ひながら近より來たり、路傍に遺棄してある二つの死骸を眺めながら、

「あ、どこの何人か知らぬが可哀さうに、コラ、土佐衛門になつたところを誰か

に引き上げられたのだらう、まだ着物はズクズクになつてゐる。かふいふ所に放つて置けば犬や鳥の餌食になるだらう。何とかして此奴を助け自分の従者にしてやりたいものだなア。ウラナイ教の大神守り玉へ幸はひ玉へ[□]

と言ひながら、白い細い鼈甲細工のやうな手を兩人の額にあて、一生懸命に祈願し始めた。然しながら何ほどウラナイ教の大神を念じても効験が無いので、今度は試みに、三五教の大神と神名を變へて一心不亂に念願すると、兩人の體におひおひと温みが廻り、半時ばかりの後にやうやう息を吹き返し、ムクムクと起き上つて、救命主の大神の大神を謝し、涙ながらに感謝した。この女はトルマン城を脱出した千草の高姫である。千草は城内を逃げ出してから、人通りの少なさうな山野を選んで此所までやつて来たが、初めて二人の死者を甦らせ、得意の頂點に達し、[□]コレコレお前達は何處の泥棒かは知らねども、この千草の高姫が此處を通らなかつたならば、玉の緒の命は既に已に十萬億土といふ所へ行つてしまつて、二度とふたたび此世へ歸ることは出来ないのだよ。一體お前の名は何といふ名だい、それを聞いておかねば、日出神の生宮が大ミロク様へお禮を申し上げることが出

来ないからなア」

コブ「ハイ、私はコブライと申します。モ一人はコオロと申しまして、實はタラハン城の左守の司の幕下でございましたが、フトした事から勘當を受けまして身の置き所なく、タラハン河へ身を投げましたのでございます。そこを貴女様にお助けを願ひ、かやうな嬉しい事はございませぬ」

千草「ア、さうかいナ、そりやお前、命のよい拾物だよ。この千草姫は地上の人間ぢやありません。第一靈國の天人、日出神の生宮、大ミロクの太柱、千草の高姫と申す者だが、衆生濟度の爲これから月の國七千餘國を巡歴するつもりだから、お前たち二人はこの千草の兩腕となつて、天下國家のために大々的活動を爲し、天下に名を擧げる氣はないかい。そしてお前たち二人はどんな悪い事をしたのだい。主人から勘當を受けるといふ事は、よくよくの事でなければ無いはずだが」

「ハイ、お恥づかしうございますが、玄眞坊といふ天帝の化身と稱する修驗者の泥棒様と一緒に、左守の司の館へ忍び込み、金庫の錠を挨拶つてるところを捉へ

られ、牢獄へ打込まれたのでございます」

「何とまあ、お前も、面にも似合ぬ悪黨だな、アハハハハ。善に強ければ悪にも強いといふ諺もある、その方が却つて頼もしい。そしてその玄眞坊といふ修験者はどうなつたのかい」

「ハイ、三人一緒に身投げをしました、その後氣絶をしたものですから、どうなつた事かかうなつた事か、チツとも存じませぬ」

「いかに、そらさうだろ。然しながら此所に首だけ出して埋けられてゐるコルブスがあるが、この面にお前覺えはないかの」

と三間ばかりの傍の新墓を指し示す。コブライ、コオ口の兩人は一目見るより、兩人「ア、玄眞さま……でございませぬ。何とまあえらい事になつたものですか、どうぞ此奴も助けてやつて下さいませぬ。私たちが二人は貴女に助けられたとは聞きますが、死んでゐたので何も分りませぬ。本當のこた、お前さまの神力で助かつたか、又は八夕の人に助けられたか分りませぬが、目の前でこの玄眞さまを助けて下さつたら、いよいよ吾々二人をお前さまが助けて下さつたといふ證據

になりますからなア」

千草「コーラ、奴、何といふ口はばつたい事を申すのだい。この千草の高姫の神力によつて命を助けられながら、左様な挨拶があるものか。然しながら無智蒙昧な人外人足だから何も分るまい、議論よりも實地だ。それではお前の疑ひを晴らすために、千草姫が今神力を見せてやらうぞや。この修験者が助かつたが最後、どこまでもこの千草に絶対服従をするだらうナ」

コブ「そら、さうですとも。さうでなくても、あなたにどこまでも従ひますと約束をしたのですもの、現當利益を見せてもらへば文句はありません」

千草「これから私がこの修験者を甦らして見せるから、キツと神様のお名を覚えてをつて、その御神徳を忘れないやうにするのだよ」

と言ひながら、首から上へ出てあるコルブスの額に白い柔らかい手をあて、「ウライナイ教の大神救ひ玉へ助け玉へ、惟神靈幸倍坐世」と一生懸命に汗をタラタラ流し、祈れど祈れどビクともせぬ、甦りさうな氣配もない。千草の高姫は二人の前で大法螺を吹いた手前、どうしても此奴を生かさねばおかぬと益々一生懸命に

なる。ほとんど半時ばかり祈れど願へど、やつぱりコルブスは氷のごとく冷たい。さすがの千草も我を折り、「三五教の大御神守り玉へ許し玉へ」と宣直した。忽ち額に温みが廻り、青黒い面は鮮紅色を帯びて來た。千草は此處ぞと、一生懸命に「三五の大神守り玉へ幸はひ玉へ」と祈るにつれ、大地はビリビリと震ひ出し、コルブスを中心として四方八方に地割がなし、「ウン」と一聲靈をかけるや否や、玄眞坊の死體は三間ばかり中天に飛上がり、ドスンと元の所へ落ちた拍子にパツと氣がつき、目鼻を一所へよせて、四邊を二三回見廻しながら、
「ヤ、其處にゐるのは、コブライにコオロぢやないか。あーア、恐い夢を見たものだのう」

コブ「もし、玄眞坊さま、夢どころの騒ぎぢやありません。吾々三人は追手に出會つて進退谷まり、谷川へ投身して已に土佐衛門となつてをつたところ、村人に死體を拾ひ上げられ、お前さまは修験者の事とて、首だけ出して鄭重に葬られてあつたが、吾々二人は地上に遺棄されてゐたのだ。そこへ此のお姫さまが通りかかつて、靈とか何とかをかけて助けて下さつたのですよ。現にお前さまを助け

て下さつたのを實地目撃したのはこのコブライ、コオロ、サアサアお禮を申しなさい。このお姫さまでございますワイ」

玄眞「あ、これはこれは、よくまあお助け下さいました。てもさても御容貌のよいお姫さまでございませう。エへへへ。これといふのも全く神様のお仕組でございませう。まるきり暗の國から日出國へ生れ變つたやうな氣分がいたします。命の親のお姫さま、これから如何な事でも貴女の御用なら勤めますから、どうぞ可愛がつて使つて下さいませや」

千草「ホホホホ、何とまあ、これだけ念入りに不細工に出来上がった面は見た事はありません。然しながら、どこともなしにキューバーさまに似た所があるやうだ。これからお前さまも、この千草の高姫がおイドを拭けというたら、おイドでも拭くのですよ。命を助けてもらうた御恩返しと申うて、口答へ一つしちや可くませぬぜ」

「ヤ、どんな事でも承りませうが、お尻を拭くことだけは、私の人格に免じて許して頂きたいものです。あなたの尻拭きするくらゐなら、助けてもらはぬ方が何

ほど幸福かうふくか知れませぬからなアア

「ホホホ、嘘うそだよ嘘うそだよ、お前まへさまの面つらはちよつと人ひと竝なみ優すぐれて變かはつてゐるが、どこともなしに目めの奥おくに才さい氣きが満みちてゐるやうだ。お前まへさまを何なにかの玉たまに使つかつて、一つ仕事しごとをやつたら面おも白しろからうア

「ヤ、そこまで私わたしの器きり量やうを認みめて頂いたげば満まん足ぞくです。私わたしも今いまはかうなつて、みすばらしい風ふうを致いたしてをりますが、オーラ山さんに立た籠こり、シーゴ、依より子こ姫ひめなどの豪かう傑けつを幕ばく下かに使つかひ、三千さんぜんの部ぶ下かを従したがへ、印いん度ど七しち千せん餘よ國こくを吾わが手てに握にぎらむと計けい畫かくしてゐた天あつ晴ばれな大だい丈ぢやう夫ぶですよア

「あ、お前まへさまが、あの名な高たかいオーラ山さんの山やま子こ坊ぼう主ずだつたのか。ヤ、そらよい所ところで會あうた、佳よい者ものが見み付つかつた、よい拾ひろ物いものをした。さア、これからお前まへさまと夫ふう婦ふと化ばけ込こんで、一つ仕事しごとをやらうぢやないかア

「なるほど、面おも白しろからう、夫婦ふうふにならうと言いうたな、その舌したの根ねの乾かわかぬ内うちに女によう房ぼうと呼よんでおく。コラ女によう房ぼう、千ち草くさ姫ひめ、第だい一いち靈れい國こくの天てん人にん、天てん來らいの救きう世せい主しゆ、天てん帝ていの化けし身ん、天てん眞しん坊ぼうの宿やどの妻つま、ヨモヤ不ふ服ふくはあるまいなアア

「お前さまと夫婦になる事だけは異議ありません。然しながら妾こそ、第一靈國の天人、日出神の生宮、底津岩根の大ミロクの太柱、三千世界の救世主、千草の高姫だから、神格の上から、この千草の高姫が主であり、お前さまは従僕となつて貰はねばならぬ靈の因縁だよ。肉體上からはお前さまが夫で千草が妻と定めておきます。お前さまの天帝の化身は自分が拵へたのだらう。そんな山子はこれからは駄目ですよ。正真正銘の第一靈國の天人でなければ、肝腎の場合において、名實ともなふ活動が出来ませぬからな。こんな所へ首だけ出して埋けられてるやうな神力の無い事で、天帝の化身なんて言つてもらへますまい」

「イヤ、モウ、天帝の化身も、第一靈國の天人も、お株を女房のお前に譲らう。お前を女房にさへすりや、俺やモウ満足だからのう」

「いやですよ、譲つて貰はなくとも、元から第一靈國の天人、日出神の生宮、大ミロクの太柱、三千世界の救世主、千草の高姫ですもの」

「あ、何と上には上のあるものだな。これだけの美貌と辨舌とでやられたら、大抵の男は参つてしまふだろ」

「そら、さうですとも、トルマン國の王妃を棒に振つて、ただ一人猛獸の猛り狂ふ原野をやつて來るといふ豪の女ですもの、そんなこた、言ふだけ野暮ですワ、ホホホホ」

コオ「何とマア、えらい方ばかり寄られたものですな。のうコブライ、まるきり狐に魅まれたやうぢやないか」

コブ「俺ヤ、モウ開いた口がすぼまらぬワイ」

千草「コレコレその奴さま、何といふ無禮の事を言ふのだ。ミロクの太柱が現はれてゐるのに、狐に魅まれたやうだとは何ぢやいな。これから狐のキの字も言つては可くませぬよ」

コオ「ハイ恐れ入りましたでございます、玉藻前の芝居に出る金毛九尾さまの御面相に餘りによく似てるものだから、つい狐のやうだと申して、御機嫌を損ねましたのは平にお詫びをいたします」

玄眞「あ、どうやら日が暮れさうだ。どつか、宿を求めて、今晚はゆつくりと語り明さうぢやありませんか、……ナニ違ふ違ふ。オイ女房千草、どつかで、宿を

求めて緩くり休まうかい、ヨモヤ厭とは申すまいのう」

千草「ホツホホホ、立派な御主人が出来たものだ、これでもひだるい時に不味も

のなしだから……ホホホホ」

と小聲で笑ふ。玄眞坊は半分ばかり聞きかじり、

「コラ女房、さう心配するものぢやない、決して不味物は食はさないよ。ひだる

い目もささないから、俺に任しておけ。お金はこの通り、胴巻に一杯つめてある

からのう」

といひながら、腰の邊に手をやってみてビックリ、

「ヤ、何時の間にか所持金が無くなつてゐる。コラ、コブライ、汝が奪つたのぢ

やないか」

コブ「そんな殺生なこと言ひなさるな、何ほど泥棒でもお前さまの金まで奪りま

せぬよ。私どもも川へ飛び込んだ時、皆川底へ落としてしまつたのです。此の通

り無一文です。コオ口だつて其の通り、一文だつて持つてゐやしませぬで」

玄「アア、困つた事だの、それぢや、今晚宿屋に泊るわけにはゆかず、何とか工

夫はあるまいかのう」

千「ホホホホ、何とまあ、スカン貧の寄合だこと、金でも持つてをりさうなと思ひ、こんな茶瓶頭の蜥蜴面に秋波を送つて見たのだけれど、文無しと聞いちや、愛想もコソも盡き果ててしまった。エー工穢らはしい、何所なつとお前さま勝手に行きなさい。この千草は一文の金は無くてもこの美貌を種に、どんな宿屋にでも贅澤三昧をして泊つて見せませう。然しながらお前さまのやうなガラクタが従いてると、女盗賊と間違へられるから御免蒙りませう、左様なら」

と立ち上がらうとする。玄眞坊は一生懸命に足にくらひつき、

「コラ女房、一夜の枕もかはさずに、家を飛び出すといふ事があるか、せめて今宵一夜は待つてくれ」

千「野つ原の中で、家を飛び出す飛び出さむもあるかい、宿無し者奴、死損ひの蛸坊主、おイドが呆れて雪隠が踊り出すワイ」

とふり切り逃げやうともがく。

玄「オイ、コブライ、コオ口の兩人、女房を確り掴まへてくれ。俺一人ではどう

やら取放しさうだ』

コブライ、コオロ兩手を擴げて、前に突立ち、

『コレコレ奥さま、さう短氣を起しちやいけませぬ、あんまり水臭いぢやありませんか。小判は吾々三人が動けぬほど腰へ捲いて来て、淵へ落としたのでありますから、御入用とあれば命を的に川底から拾うて見せます。どうか短氣を起さぬやうにして下さいませ』

千『ホホホホ、一寸、あまり好きな玄眞さまだから、愛の程度を試すために嘲弄つてみたのですよ。どこまでも玄眞さまはこの千草姫を愛して下さいさるといふ事が、只今の行動によつて證明されました。一遍に澤山の黄金の必用も無いけれど、この千草が命令するごとに、お前さまはこの淵へ飛び込んで、その金を拾つて來るでせうなア』

コブ『へー、仰せまでもございませぬ。私だつて、あたら寶を水底に捨てて置くのは勿體なうございます。のうコオロ、さうぢやないか』

コオ『ウンさうともさうとも、俺と汝の寶はキーツと飛び込んだあの淵に納まつ

てるに違ひない。しかし玄眞さまのお寶は、滅多に川へ飛び込んでも體を離れる理由がない。あれだけしつかりと胴巻に括りつけてあつたのだもの。ヒヨツとしたら、この墓を掘つて見よ。この底にあるかも知れぬ。モシ玄眞坊さま、ちよつと天帝さまに伺つて下さいな」

玄眞「ウン、確かにある、掘つてみてくれ」

コブ「ヤ、あなたのお言葉とあらア間違ひございますまい、サ掘らう」

と二人は爪が坊主になるところまで土を掻き分けて底へ底へと掘り込んだ。五尺ばかり掘つた所に胴巻ぐるめ、ドスンと重たいほど黄金が目を目をむいてゐた。コブ

ライは飛び立つばかり喜んで、

「モシモシ玄眞さま、有りました有りました。喜んで下さい」

玄「そらさうだろ、汝等二人の黄金は身についてゐないのだ、俺は身についた金だから此の通り残つてるのだ。サ、兩人早く持ち上げてくれ。コレコレ女房、ど
うだ、一寸この金を見る、これは皆俺の金だ。これだけありや、お前と俺とが三
年や五年呑みつづけても大丈夫だよ」

千「何と貴方は偉いお方ですな、私の夫として恥づかしからぬ人格者ですワ、ホ
ホホホホ。コレコレ コブライ、コオロの兩人、御苦労だったが、まだこの底を
三尺か二尺掘つて下さい、ダイヤモンドがありますよ。私の神勅によつて黄金以
上の物があるといふ事が分つたから……」
コブ「エ、承知しました、あなたの仰せなら地の底までも掘りますよ」
とコオロと兩人が汗みどろになつて、土を掘り上げてゐる。玄眞坊、千草の二人
は舌をペロリと出し、手早く二人を生埋めにせむと、一生懸命に土を上から投り
込み、側にあつた立石をドスンと載せ、立石の上に腰うちかけながら、モウこれ
で大丈夫といふやうな面構へで、スパリスパリと千草姫の煙草を引つたくつて吸
うてゐる。

千「何とマア厄介者が二人あやがる、どうしたら可からうと心配でならなかつた
が、やはり以心傳心、お前さまの心と私の心はピッタリ合つてゐたとみえて、一
言も言はずにこんな放れ業をやつたのだから妙ですなア」
玄「本當にさうだ、實ア俺は此奴を埋込んでやろと思つたが、お前もさうだつた

か、こんな奴がウロツキやがると二人の戀の邪魔になるし、將來の手足まとひになるが、これから二人でどつか宿へ泊るか、見晴らしのよい山へ上つて神祕の扉を開くか、あるひは神樂舞でもやつて、今日の結婚の内祝ひでもせうぢやないか」

「そら面白いでせう。宿屋にをつても怪しまれると一寸具合が悪うから、そんなら今夜は月夜を幸ひ、あのコンモリした森まで行きませう。あの森にはキツと古堂ぐらゐは建つてゐるでせうからね」

「オイ、モウ少時この上で頑張つてをらねば、彼奴が生返つて後追かけて來たら大變だぞ」

「ナ―ニそんな心配が要りますものか、この千草姫の神力で靈縛をかけておきましたから、穴の底で石のやうに固まつてゐますよ。サ、參りませう、コレ玄眞さま、みつともない、涎を拭きなさいナ」

玄眞は慌てて兩の手で涎を手繰り、膝のあたりに兩手をこすりつけてゐる。

千「ママア厭なこと、玄眞さま、涎の手を膝で拭いたり、まるで着物と雑巾と一つだワ、ホホホ」

これより兩人は月夜の路を南へ取り、コンモリとした山を目當に走りゆく。

(大正一五・二・一 舊一四・一二・一九 於月光閣 松村眞澄録)

第一七章 夢現神(一八〇六)

千草の高姫、玄眞坊の二人の計略にウマウマとかけられ、穴の中に生埋めにされたコブライ、コオロの兩人は命カラガラ穴から這ひ出し、泥まぶれになつて息をつきながら、

コブ「オイ、コオロ、どてらい目に遇はせやがつたぢやないか、狸坊主と狐女郎奴が。本當にいい馬鹿を見ただぢやないか」

コオ「本當に俺やもう、憎らしうてたまらぬワイ。然しあの女は何處ともなしに可愛い奴だ。たとへ生埋めにされて、死んでしまつても元々ぢやないか。憎らしいのはあの玄眞坊だ。これからどこどこまでを後追つて生首引つ捉へ、腹癒せを

しやうぢやないか」

コブ「ウンウン、そりやさうだ、俺たちを助けてくれた千草姫が俺たちを殺す筈はない、玄眞坊が千草姫の前で舊悪を言はれちや男前が下がると思つて、俺たちを亡きものにさへすれば如何な事も出来ると思つて、あんな悪虐無道の事をしたのだらう。さアこれから後追驅け生首を引抜き、千草姫の前で赤恥をかかせにや腹が癒えないワ。千草姫だつて、あんなヒヨッコ男に心からラブしてゐさうな筈がない。きつと懐のお金を捲き上げられたら頭から青洩を垂れかけられるか、鞆丸をギューツと締めつけられてフンのびるくらゐが關の山だらうよ、ウツフフフフ」

コオ「ともかく、こんな所で小田原評定やつた所で、はじまらぬぢやないか、さアこれから彼奴の後追つて仇討ちと出かけやう」

コブ「後追ひかけやうと言つたつて、何方に逃げたか分らぬぢやないか」

「ナニ、この木の端切れを道の真中に突つ立てて、倒けた方に行つて見やう。きつとそつちに居るといふ事だ」

「そら、さうかも知れぬのう」
と言ひながら木片を拾ひ眞直ぐに立てて離して見た。
これより兩人は月夜の道を南へ南へと驅けて行く。
木片は南へバタリと倒れた。

兩人「神が表に現はれて

善と惡とを立別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

ただ何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ

世の過ちは宣直せ

などと教ふる三五の

神の教は聞きつれど

どうしても見直し宣直し

聞直しさへ出来ぬ奴

世界に一つ見つかつた

泥棒上がりの玄眞坊

オーラの山に立籠もり

山子企んで失敗し

またも其邊をうるついで

人を苦しめ女をば

悩ませ來たる惡僧奴

危ふい命を助けられ

落とした金まで吾々に

掘つて貰つてその恩を

仇で報うた曲津神

何處へ失せたか知らねども

草を分けても尋ね出し

恨みを晴らさにや惜くものか

神が此世にゐますなら

きつと善悪立別けて

玄眞坊の曲神を

懲し戒め給ふべし

とはいふものの吾々は

御氣の長い神さまの

お罰にあたる時を待つ

餘裕はちつとも身に持たぬ

一時も早く玄眞の

生首引抜き仇をば

打たねば男の意地立たぬ

アア憎らしや憎らしや

不倶戴天の仇敵と

定めてこれから兩人は

四方八方に駆け廻り

彼の在所を尋ね出し

命を取らいでおくものか

アア憎らしや憎らしや

泥棒上がりの玄眞坊

命を取らいでおくものか

アア憎らしや憎らしや

一寸刻みか五分試し

骨も頭も粉にして

喰はねば蟲が承知せぬ
アア腹が立つ腹が立つ
今度の恨みを晴らさねば
死んでも死ねぬ吾が心
憐れみ給へ自在天
大國彦の御前に
眞心籠めて願ぎ奉る
旭は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも
たとへ大地は沈むとも
仇を討たねばおくものか
惡逆無道の玄眞坊
何處の果に潛むとも
神の力と吾々の
熱心力に尋ね出し
彼が所持する黄金を
スツカリ此方へ引奪り
最初の目的達成し
男を立てねばおくものか
ああ惟神々々
御靈幸倍ましましてよ
』

と言ひながら蛙の行列向かふ見ずに、形ばかりの細道を南へ南へと走つて行く。
はるか前方にコンモリとした山蔭が見える。二人は芝生の上にドツカと尻を据

ゑ、

コオ「オイ、兄貴、行途もなしに走つてをった所で腹は空る、足は疲れる、如何する事も出来ぬぢやないか、一つ此處で考へて見やうぢやないか」

コブ「やア、もう、俺もコンパスが動かなくなつて來たのだ。仇の所在も分らないのに、この廣い田圃を走つたところで雲を掴むやうな話だ。思へば思へば馬鹿らしいぢやないか。俺たちはかう南へ南へと走つてゐるのに、彼奴らは反對に北へ北へと走つたとすれば、きばれば、きばるほど遠退く道理だ、こいつア一つ考へねばなるまいぞ」

「それでも杖占をやつたら南へ倒けたぢやないか。吾々は南へ走るより仕方はないのだ。アアかうなると犬が恨めしいワイ。俺が若し犬だつたら、彼奴の行つた後を嗅付けるのだけど、この人間様の鼻ぢやカラツキシ駄目ぢやからのう」

二人はかく話しながらグツタリと弱り、眠氣さへ催し、遂には原野の中で前後も白河夜船の客となつてしまつた。

ここへ忽然として現はれた白衣の神人がある。神人は言葉靜かに、

「汝はコブライ、コオ口の兩人ではないか」

兩人一度に、

「ハイ、左様でございます。貴方様は一寸お見かけ申せば、どこかの貴婦人と拜
しまするが、何方へお越しでございますか」

神人「吾こそは靈鷲山に跡をたるる豊玉別命であるぞよ。その方は今日まで現世
に犯せし罪惡によつて、種々雑多の神罰を受け、玄眞坊、千草姫の悪人のため土
中にまで埋められ、九死に一生を得ながら神徳の尊き事を忘れ、ただ一途に彼を
恨み、剩つさへ懐中の金子を奪ひ取らむと企んでをらうがな」

コブ「ハイ、仰せの通りでございます、恐れ入りました」

「汝ら兩人、今の中に吾が教を聞き、悔い改めざれば無間地獄に墮ちるであらう。
どうだ、今の中に玄眞坊に對する恨みを打ち切り、本然の誠に歸る氣はないか」

「イヤ、もう私だとして、元より悪人ではございませぬが、臍の緒の切り所が悪か
つたために人竝みの生活も出來ず、何時の間にやら自暴自棄となり、泥棒仲間
首を突つ込み、悪事の有らむ限りを致して來ました。同じ人間に生れながら、豺

狼のやうな事をする事は、私の良心に大いに恥てをりますなれど、この肉體を保全するため止むを得ず、種々よからぬ事を企みもし、行つても來ました。どうせ私は、今までの罪業に由つて地獄の底へ落とされるものと覺悟してゐます。どうせ今から心を改めても、地獄に墮ちるので、悪をやるなら徹底的に悪業をやりたい決心を抱いてをりまする」

「如何なる悪人といへども、悔い改めに依つて悪は忽ち消滅し、善の方面に向かふ事が出来るものだ。人間の肉體を持つてこの地上に在るかぎりには、絶対の善を行ふ事は出来ない。それで何事も神に任せ、神を信じ、神を愛し、日夜信仰を勵んだならば、きつと生前死後共に安逸の生活を送る事が出来るであらう」

「ハイ、有難うございます。いかなる神様を信仰すれば可いのでせうか、私はこれまでバラモン神を信じてゐましたが、一度も安心や幸福を與へられた事はございません」

「何れの神も皆、元は天帝の御分靈、神徳に高下勝劣は無けれども、今日の世の中は盤古神王の世も濟み、バラモン自在天の世も過ぎ去り、今はミロク大神の御

世と變つてゐるのだ。それゆゑ汝ら兩人は今日より三五の大神を信じ、惟神の名號を唱へ、能ふる限りの善事を行はば、きつと安逸の世を送る事が出来るであらう。夢々疑ふこと勿れ」

と宣り給ふや否や、忽然として煙のごとく消えさせ給うた。兩人はフツと目を醒し、

コブ「オイ、コオ口、お前起きたか、俺やもう大變な夢を見たよ」

コオ「ウーン、俺も妙な夢を見たのだ。もう玄眞坊征伐は止めやうかい」

「さうだな、玄眞坊も悪いが俺も悪いから、これまでの因縁と諦めて泥棒も止め、玄眞坊征伐も止めやうぢやないか」

「俺たちア、泥棒を止めたら喰ふことは出来ぬが、これから身の振り方を如何したら可いのかなア。實は夢の中に神様が現はれたが、あんまり怖ろしうて、勿體なうて、お尋ねする事も忘れたが、これから何商賣をしたら可いのかな」

「俺たちのやうに泥棒の外に何も藝を知らぬ者は商賣も出来ず、學問も無し、仕方がないから修験者となつて一杖一笠の比丘となり、人の門に立つて物乞ひでも

やらうぢやないか。そして三五の神様のお道を一人にでも言ひ聞かせ、死後の世界の安養淨土を開く準備をしようぢやないか」

「兄貴お前もさう思ふか、實は俺もさう考へたところだ。さア、さうと相談が定まれば、兩人にはかに比丘となつて印度七千餘國の靈山靈場を巡拜しやう。玄眞坊のやうな悪人でさへも、修驗者といふ役徳に依つて見ず知らずの他人から、あの通り土の中へ葬られるのだ。俺たちア修驗者でないために、死骸を路傍に遺棄されてゐたのだからな。これを考へて見ても、神様に仕へるくらゐ結構な事はないからのう」

ここに兩人は意を決し、別に墨染の衣も、杖も笠も無けれども宣傳歌を口吟みながら、人里を尋ねて進み行くこととなつた。

兩人「神が表に現はれて

善と惡とを立別ける

此世を造りし神直日
ただ何事も人の世は

心も廣き大直日
直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣直せ
 神の教は目の邊り
 教へ給ひし神人の
 惡逆無道の限りをば
 大慈大悲の大神の
 轉迷開悟の花咲いて
 人は神の子神の宮
 曲津の棲處に使はれて
 復命なさむ術あらむ
 神の恵みの幸はひて
 天國淨土の花園に
 朝日は照るとも曇るとも
 たとへ大地は沈むとも
 誠の力は世を救ふ

などと教ふる三五の
 吾等が夢に現はれて
 御言葉こそは尊けれ
 盡し來たりし吾々も
 情けの言葉に目を覺まし
 今や眞人と成り初めぬ
 珍の身魂を受けながら
 どうして神の御前に
 ああ惟神々々
 吾等二人の行末は
 安く導き給へかし
 月は盈つとも虧くるとも
 曲津の神は猛るとも
 誠一つの三五の

神かみにしたが従したがふ吾々われわれは
 如何いかなる惡魔あくまも恐おそれむや
 虎狼とらおほかみや大蛇をろちなど
 一時いちじに襲おそひ來きたるとも
 神かみの守まもり護りのある限かぎり
 安やすく進すすませ給たまふべし
 アア有ありがた難ありがたし有ありがた難ありがたし
 闇路やみぢに迷まよふ盲目まうもくの
 にはかに兩眼りやうがんうち開ひらき
 日出ひのでの國くにの花はな園ぞのに
 進すすみ出いでたる心地こちなり
 アア有ありがた難ありがたし有ありがた難ありがたし
 神かみの教をしへを聞ききしより
 吾わが魂たましひは何なんとなく
 春駒はるこまのごと勇いさみ立たち
 雲井くもゐに登のぼる如ごとくなり
 ああ惟かむながら神々かむながら々々
 御靈みたま幸さちはへましませよ』

と元氣げんきよく歌うたひながら、旅たびの疲つかれも空腹くうぷくの惱なやみも打うち忘わすれスガの港みなとの方面はうめんさして
 進すすみ行ゆく。

(大正一五・二・一 舊一四・一二・一九 於月光閣 北村隆光録)

第一八章 金妻（一八〇七）

大日山の麓の森林に大日如來を祭つた古ぼけた祠がある。その祠の中には蝶の鳴き損ねたやうな面構へをした玄眞坊と、天つ乙女のやうな氣高い姿の千草の高姫といふ美人の二人が、無遠慮に寝そべつて互ひに頬杖をつきながら囁いてゐる。

玄眞「オイ、女房」

千草「厭ですよ、女房なんて」

「そんなら妻にしておこう。オイ妻」

「妻なんてつまらぬぢやありませんか。もつと高尚な名を呼んで下さいな」

「そんなら細君にしておこうか、それが嫌なら御内儀にしておこうか」

「妻君だの内儀だのと女房扱ひは眞平御免ですよ」

「それや約束が違ふ、お前は俺の婢アになると言つたぢやないか」

「そりや言ひましたとも、あの時はあの時の場合で仕方なしに言つたのですよ。」

一生女房になると約束は爲ませぬからなア。たとへ半時でも女房になつて上げた

ら光榮くわうえいでせう〃

「そいつは頼たよりないなア、一生いっしやう俺おれの女房にやうぼうになつてくれないか〃

「そりやならない事ことはありませぬが、貴方あなたの心こころが心こころですもの。そんな水臭みづくさいお方かたに一生いっしやうを任まかしてたまりますか〃

「今日けふ會あつたばかりで水臭みづくさいの、【からい】のとそんな事ことが分わかるものか、そりやお前まへの邪推じやすゐだらう〃

「それだつて貴方あなたは本當ほんたうに水臭みづくさいワ。澤山たくさんの黄金わうごんを所持しよぢしながら、女房にやうぼうの私わたしに任まかして下くださらないのですもの。女房にやうぼうは家いへの會計くわいけい萬端ばんたんをやつて行ゆかなければならぬぢやありませぬか、金無かねなしにどうして會計くわいけいをやつて行ゆく事ことが出来できますか、よう考かんがへて御覽ごらんなさい〃

「そりやさうだ、だがまだかうして旅たびの空そらぢやないか、こんな重おもい物ものを女房にやうぼうのお前まへに持もたしては氣きの毒どくだ。家いへを持もつた上うへでお前まへに支出ししゆつ萬端ばんたん任まかすから、まアまア安心あんしんしてくれ給たまへ〃

「あなたはどこまでも私わたしを疑うたがつてゐらつしやるのですな。私わたしだつて人間にんげんですもの、

金くらゐ持ったつて途中で屁古垂れるやうな弱い女ぢやありません。さア「すつぱり」と此方へお渡しなさい。命まで拾つて上げた私ぢやありません。たとへ夫婦でなくても命を拾つてあげた恩人ぢやありませんか」

「そりやさうだ、お前のお世話になつた事はよく覚えてゐる。しかしながら、一夜の枕も交さぬ中から、さう氣ゆるしは出来ないからなア」

「何とまア下劣なことを仰有いますな。それほど貴方はお金に執着心が強いのですか」

「別に金に執着はないが、お金といふものは物品の交換券だから、神様に次いで大切にせなければならぬものだ。小判の百兩も出せばどんな美人でも自分の女房に買ふことが出来るのだ。これだけの金があれば、どこかの都で高歩貸しをしてを つても一生安樂に暮す事が出来るからな」

「ヘン、馬鹿にしてもらひますまいかい、遊女と一つに見られては、第一靈國の天人もつまりませぬワ。そんな分らぬお前さまなら、これで御免を蒙りませう。

誰がこんなヒヨットコ野郎に秋波を送り、女房だの嬢だのと言はれてたまるもの

か、左様なら、これまでの御縁だと諦めて下さい』

と、ツと立上がり歸らうとする。玄眞坊は慌てて千草姫の腰をぐつと抱へ、

『「ても」柔らかい肌だなア。コレさう短氣を起すものぢやない。魚心あれば水心あり、俺だつて木石ならぬ血の通うた人間だ。そんなら三分の一だけお前に渡しておくから、暫くそれで辛抱してくれないか。三分の一だつてザツと一萬兩あるのだからア、初めから全部ぼつたくらうとは餘り蟲がよすぎるぢやないか』

千草姫はペロリと舌を出しながら、

『玄眞さま、人を見損ひして下さいますな。私はお金に惚れて貴方に跟いて來たのぢやありませんよ。エエ汚らはしい。金などは水臭いワ、金が仇の世の中と言ひますからナ、そこまでお心が分つた以上は金なんか要りませぬ。あなたが持つてゐて下されば、私の要る時には出して下さるのだから、そんな重い物はよう持ちませぬワ』

『なるほど、お前の眞心はよう分つた。そんな心なら全部任してもよい、サア重くて濟まぬがお前の腰につけてやらう』

「嫌ですよ、そんな重い物……。男が持つものですよ。女なんか重たくて旅も出
来ませぬもの」

千草姫はある地点まで重たいものを玄眞坊に持たせ、ここといふところで鞆丸
を締めて強奪らうといふ企をもつてみた。戀にのろけた玄眞坊は、千草姫の心の
奥の企も知らず、茹蛸のやうになつて、低い鼻や尖つた口や、ひんがら目を一所
に寄せ聲の色まで變へ、

「さすがは千草姫だ。偉い偉い、俺もコツクリと感心した。さアかう定まつた以
上は、お前はどこまでも私の女房だなア」

「さうですとも、今更そんな事いふだけ野暮ですワ。はじめから女房と定つとる
ぢやありませんか」

「それでも最前のやうに暫くの女房だの、一生女房にならうとは言はなかつたの
と言はれると困る。一生なら一生とハッキリ言うてくれ、金のある中だけの女房
では困るからかう」

「これ玄眞さま、そんな下劣な事を言うて下さいませすな。二つ目には金々とおつ

しやるが、金なんか人間の持つものですよ。私の美貌と天職は他にはございません。天下にただ一人の救世主といひ、美人といひ、どうして金銭づくで手に入りますか、よく考へて御覽なさい。妾は金が欲しけりやトルマン國の王妃ですもの、幾何でも持つて來るのです。お前さまは泥棒の親分をやつてみたのだから、人の金を奪る事ばかり考へてみたのだから、女房が金を奪るか奪るか、そんな事ばかり考へてゐられるのだから、それが私は残念です。も少し人格を向上してもらはなくては、大ミロクの添柱といふ所には行きませぬよ」

「いやもう恐れ入つた。今後一切お前さまにお任せ申す。いや女房に一任する。併しながら、何時までもこんな所で二人がコソコソ話をやつても芽のふく時節がない。どこか「スガ」の里へでも飛び出して立派な家屋を買ひ求め、それを根據として天下統一の大業を計畫しやうぢやないか」

「ホホホホ、小さい男にも似ず、ずるぶん肝玉の太い男だこと。妾それが第一氣に入つてよ。さアこれからお前さまは言觸れとなつて、そこら界限を廻つて下さい。私は救世主となつて、この大日山の奥深く社を建て、そこに控へてをります

から、ドシドシと愚夫愚婦を集めて來るのですよ」

「ヤアそれも一策だが、俺の顔は大抵の奴がこの界限では知つてゐる。萬一オーラ山の山子坊主だと悟られては、折角の計畫が畫餅に歸するから、そんなこと言はずに「スガ」の里まで行かうぢやないか。とに角この風體では仕方がない、相當な法服を逃へ身につけて行かねば人が信用せぬからのう」

「そんならとにかく、夫殿の仰せに任せスガの里まで参りませう」

いよいよこれより玄眞坊、千草の高姫は、大日の森を立ち出で、スガの港をさして大陰謀を企てむと進み行く事となつた。玄眞坊は先づ歌ふ。

出た出た出た出た現はれた 雲井の空から現はれた

月日は照るとも曇るとも たとへ大地は沈むとも

此世を救ふ生神は 今現はれた千草姫

それに付き添ふ天真坊 この二柱ある限り

世は常暗と下るとも 案じも要らぬ法の船

ミロク菩薩が棹さして
彼方の岸にやすやすと
治めたまはる時は来ぬ
祝へよ祝へよ千草姫
此世は末代潰りやせぬ
たとへ大地は沈むとも
などと業託竝べたて
口先ばかりの山子神
出て来たところ何になる
倒せよ倒せよ三五の
齋苑の館を根底から
吾等の望みは達せない
千草の高姫ここに在り
慕ひまつれよ國人よ

浮瀬に沈む人草を
救ひ助けて安國と
勇めよ勇めよ諸人よ
千草の高姫ある限り
三五教の奴原は
誠の力は世を救ふ
世間の愚民を迷はせる
こんな奴等が何千人
有害無益の厄介ものよ
神の教の宣傳使
デングリ返してやらなけりや
ウラナイ教の大教主
仰げよ仰げよ諸人よ
命の清水が汲みたくば

天真坊の前に來よ
天帝の化身と名のりたる

第一靈國天人の
内流うけたるこの身靈

またと世界に二人ない
それに加へて此のたびは

天より下りし千草姫
凡ての權利を手に握り

天降りたる月の國
天國淨土に開かむと

宣せ給ひし尊さよ
ああ惟神々々

恩賴がうけたくば
天真坊の前に來よ

天真坊が取り次いで
千草の姫の御前に

事も委曲に奏上し
如何なる罪をも穢れをも

早川の瀬に流し捨て
天國淨土の樂しみを

此世ながらに授くべし
下つ岩根の大三口ク

神の教の太柱
いよいよ現はれました上は

四方の民草一人も
ツツボに墜とさぬ御誓

喜び勇めよ國人よ
ああ惟神々々

御靈幸はへましてせよ」

玄眞「もし千草姫、いや女房殿、この宣傳歌はお氣に召しましたかなア」

千草「ホホホホ、さすがは玄眞坊様だけあつて、甘く即席によい文句が出ますこと、私も大いに感じ入りましたよ。どうかこの調子で町へ出たら力一ぱい歌つて下されや」

「よしよし、歌つてやらう、その代りお前も俺の女房だから、俺の歌も作つて歌つてくれるだらうなア」

「そりや、玄眞さま、天地顛倒も甚だしいぢやありませんか、神界の御用と現界の御用と混同してはいけませんよ。神界となればこの千草姫が大ミロクの太柱、玄眞さまは眷族も同様ですよ。肉體上からこそ夫よ妻よと言つてをりますが、神界の事となつたら此の千草の高姫は一步も譲りませぬからなア」

「大變な權幕だなア。まるで大日山の山の神様みたやうだワイ」

「そりやさうですとも、大日山の山の神は私ですよ。それだから嬪天下の女房を

山の神と言ひませうがな」

「なるほど、お前の言ふ通り俺の聞く通りだ、フフフフ」

「玄眞さま、も一遍今の歌を歌つて頂戴な」

「よしよし、歌はぬ事はないが、何だか女房の讚美歌を歌ふのは些つとばかり

【てれ】臭いやうな氣がして困るがなア」

「工工頭の悪い、女房の讚美歌ぢやありませんよ。下つ津岩根の大ミロクさまの讚美歌を歌つて下さいと言ふのですがな」

「ウンウンそりや分つてをる。よしよし、そんなら慎んで歌はして頂きますせう。

オイ併しながら、【スガ】の里まではもう十五六里あるから到底足が續かない。

この向ひに入江村といふ所がある。そこはハルの海がズツと入り込むでをる處で、大變景色も佳い。その宿で今晚は宿つたら如何だらうかなア」

「里程は其所まで幾らほどありませうかな」

「三里半ばかりある。そこまで行つておけば明日は船で樂に行けるからなア」

「なるほど、そりやよい事を思ひ付いて下さつた。さア、これから入江の里まで

急ぎませう」

と兩人は足に撚をかけ、一生懸命に駆け出したり。

(大正一五・二・一 舊一四・一二・一九 於月光閣 加藤明子録)

第十九章 角兵衛獅子(一八〇八)

入江の里の濱屋旅館の奥の間には例の玄眞坊、千草の高姫の二人が爲す事もなく、意茶意茶言ひながら十日ばかり逗留してゐる。

千草「モシ玄眞さま、この宿へ泊つてから今日で十日ばかりにもなりますが、あまり退屈で仕方がないぢやありませんか。ハルの湖で有名な日高山はもう見えなかりましたし、眞帆片帆の行き交ひも昔とは餘ほど淋しくなつたやうです。何とか一つ歌でも詠んで楽しもうぢやありませんか」

玄眞「別に無聊に苦しまなくても、お前と俺と二人居りさへすれば、どんな快樂

でも出来るのだが、お客様だとか、お月様だとか文句をいつて應じないものだから、元いらすの快樂を棒に振つて自分が自分で苦しんでゐるのだ。俺やモウ、オチコがコテノでやりきれないワ

「ホホホホホ、何とした、玄眞さまは粹な方だらう、本當に恨めしいのはお客様さまだワ。お客様さまさへなけりや、玄眞さまの御機嫌を十分に取れるのだけれどなア」

「一體、お月さまといふものは永くて一週間早くて三日ぐらゐなものだと聞いてゐるに、お前はモウ十日にもなるぢやないか、チとをかしい容態だなア」

「そらさうですとも、第一靈國の天人ですもの。當然の人間なら月に七日の穢れですみませんが、妾は一年中のを一遍に片付けるものですから、十二ヶ月分合せて八十四日間月經があるのですもの」

「さう永らくの間、俺も待ち切れないワ。どうだ、一つ思ひ切つて奸淫をやらうでないか、いはゆるそれが月經奸だ、アアーン」

「ホホホホホ、助平野郎だこと。龍女を犯してさへも七生浮かばれないといふの

に、況して天人の月經奸を冒すやうな馬鹿な人が世間に在りますか、七生八生はおるか、百萬生まで罰をうけますぞや」

「何とか願ひ下げしてもらへぬものかいナ、八十四日の二分の一くらゐに忪へてもらへさうなものだナ。世は「まじない」といふから、それでも差支へあるまい。神さまだつて、そんな野暮なこた仰有るまいからのう」

「玄眞さま、モウそんな話はやめて下さい。私地獄へ落ちさうな氣分が致しますワ。それより歌でもアツサリ詠まうぢやありませんか……」

添はまほし君の手枕ほりすれど

月の障りにせむすべもなし

ほしほしと星は御空に輝けど

月の障りに影うすれ行く

玄眞の君の頭に月照りて

影さしにけり御山の谷は」

「オイ冷かすない、御山の谷は眞赤けだろ。紅葉が照つてるだろ、どうか一つ紅葉狩をさしてもらひたいなア」

「玄眞さま、イヤですよ、スカンたらしい」

「といひながら、蛸禿頭をピシヤピシヤツと細い手でやった。玄眞は目も鼻も口も一所へ巾着をすばめたやうに集めてしまひ、

「エツへへへへ、コリヤ、千草、無茶するないヤイ、俺の頭にもヤツパリ血が通うてゐるぞよ」

「あまり薬罐がたぎつてをつたので、手のひらを火傷しましたよ。どうか玄眞さま、水を汲んで来て下さい、手を冷しますから……」

「夫の頭の温みがお前の手に残つとるのも可かる、まあ楽しんで待つてをれ、さう永く温みが止つてをるものではないからの」

「自惚れもよい加減になさいませ。薬罐頭の汗脂が手について、氣味が悪うてならぬから水を汲んで来て下さいといふのですよ」

「エー仕方のない山の神だなア」

と言ひながら自分が立つて井戸水を汲み來たり、

「サ、山の神さま、いやいやミロクの太柱さま、どうぞお手をお洗ひ下さいませ」
「善哉善哉」

と言ひながら、金盥の水で手を洗ひ、

「ヤ、玄眞坊、御苦勞であつた、褒美にはこの水を遣はすによつて、一滴も残らず妾が前で呑んだが可からうぞや。決して千草姫の手垢ではない、其方の薬罐頭やくわんあたまの汗脂あせあぶりだによつて、喜んで頂戴ちやうだい召されよ」

「オイ、嬢、女房イヤ……千草の太柱、馬鹿にすない、俺を一體何方と心得てるのだ。これでもお前の夫ぢやないか」

「オット任せでくはへ込んだ夫ですもの、縦から見ても横から見ても、オットましいスタイルだワ」

かくいちやつついてる所へ、表の街道騒がしく、太鼓を打鳴らしながら、角兵衛獅子がやつて來た。

宿屋の亭主は二人の居間に恐る恐る出で來たり、

「モシお客様、大變お退屈と見えますが、今あの通り、門口へ角兵衛獅子がやつて來ました。一つお舞はしになつたら如何ですか。お氣晴しには大變面白うございますよ」

玄「やア、それは有難い、どうか姫神さまの御上覽に入れてくれ、……もしミロクの太柱様、角兵衛獅子は如何でございますかナ」

千草姫はワザとすました面で、

「善哉善哉、所望だ所望だ」

亭「ハイ畏まりましたでございます、すぐさま此處へ連れ参ります」

と言ひながら表へ出でて行く。少時すると小さい獅子舞を被つた男と、深編笠を被つた太鼓打がやつて來た。

玄「ヤア、御苦勞御苦勞、遠慮は要らぬ。この座敷へ上がつて一つ舞つてくれ、このごろはミロク様の御機嫌が悪くて困つてるところだ。どうか神樂舞ひでもやつて岩戸開きをやらなくちや、俺も實ア紅葉の盛りで困つてゐるのだ」

角兵衛獅子は軽く目禮しながら、座敷に飛び上り、一方は唄ひ、一方は舞ひ出

した。

テ テン コ テン テ テン コ テン テ テン コ テ テン コ テ テン コ テン テン

テ テン コ テン テン テ テン コ テン 角兵衛獅子

いちくわつぐわんたんよ
一月元旦夜が明けりや 兄は十一弟は七つ

きよねんま
去年舞うたこの町で 今年もやつぱり角兵衛獅子

テ テン コ テン テ テン コ テン テ テン コ テ テン コ テ テン コ テン テン

テ テン コ テン テン テ テン コ テン 角兵衛獅子

いつくわつぐわんたんよ
一月元旦夜が明けた 兄は太鼓で弟は踊る

くにこひ
お國戀しや角兵衛獅子 太鼓の音で日が暮れる

テ テン コ テン テ テン コ テン テ テン コ テ テン コ テン テン

テ テン コ テン テン テ テン コ テン 角兵衛獅子

げん
玄 『あア妙々、サ、褒美にこれをやる』

と言ひながら、小判を一枚おつ放り出した。角兵衛獅子二人は喜んで、頭に被つてみた獅子や編笠を除つて見ると、豈計らむや、玄眞坊が千草姫と二人、澤山な座布團の上にバイの化物然と控へてゐる。

角獅「ヤ、汝は玄眞坊だな、よい所で見付けた。俺等二人を計略にかけ、生埋めにしやがつた悪人輩だ。俺は夢の中に神様の教を戴いて、もはや汝に復讐の念は絶つてゐたが、かうして二人が夫婦然とすましてゐる所を見ると了簡がならない。オイ、コオロ、汝早く役所へ訴へて来い。俺は逃げないやうに番をしてゐるから……」

コオ「ヨシ来た、合點だ」

と、コオロは逸早く表へ飛び出してしまつた。玄眞坊はガタガタ慄ひ出し、「ヤ千草姫、如何しやうかな、かうしてはをれまい、俺も汝も首が飛んでしまふがナ……」

コブ「コラ當然だ、玄眞坊思ひ知つたか、今に捕手の役人にフン縛られ笠の臺が飛ぶのだ。それを見ながら、俺は一杯飲むのがせめてもの腹いせだ、イツヒヒヒ

ウツフフ、てもさても心地よいこつたワイ」

玄眞「オイ、コブライ、一萬兩金をやるから、願ひ下げしてくれまいか、角兵衛

獅子に歩いてても一萬兩はなかなか儲からないぞよ」

「馬鹿いふない、そんな事出来るものか。既にすでにコオロが訴へ出てるぢやな

いか、モウ觀念せい、仕方がないワ」

千草「ホホホホ、あの玄眞さまの胴震ひの可笑しさ、其の態ア一體何ぢやいな。

コレコレ奴さま、お前を生埋めにしたのはこの玄眞さまだぞえ、千草姫は少しも

與り知らない處だからさう思つて下さいや」

コブ「命の親の姫様に對し、毛頭恨みを持つてをりませぬ。そしてまた貴女様を

訴へるやうな事は決して致しませぬから、どうか御安心下さいませ」

玄眞坊は色蒼ざめ、ガタガタ慄ひをやつてゐる。千草姫は側近く寄りそひ、

千草「コレ玄眞さま、確りしなさらぬかいナ、月の國を手握らうといふやうな

大膽な計畫をするお前さまが、捕手ぐらゐに震ふといふ事があるものか、神力を

もつて吹き飛ばしてしまへば可いぢやありませんか」

と言ひながら、オチコの下にブラ下つてゐる光のない二つの玉を力限りに握りしめた。玄眞坊は虚空を掴んで其の場に「ウン」と言つたきり倒れてしまつた。表の方には捕手の役人と見えて、ザワザワと足音が聞こえて來た。コブライは役人出迎への心持にて、慌てて表へぬけ出す。その間に千草姫は玄眞坊の胴巻をつかりと外し、自分の腰に捲き表二階の間へ素知らぬ面して納まり返つてゐた。十二三人の捕手の役人、コオロ、コブライおよび亭主の案内にて此の間に出來たり、玄眞坊の倒れてゐるのを見て、
「ヤ、此奴、モウ舌でもかんで自害したと見え緯切れてゐる。こんな者はモウ仕方がない。亭主、その方にこの死骸を渡しておくから、何處の野邊へでも捨てておくがよからう」
と言ひ残り、逸早く出でて行く。

千草姫は一閒に入つて二階の障子の破れ穴から離棟の座敷を眺めて見ると、亭主や出入の者が玄眞坊の死體を戸板に乗せて「ワイワイ」と言ひながら、何處へ擔ぎ行く姿が見える。千草姫は胸をヤツと撫でおろし、

南無頓生玄眞坊菩提のため、歸命頂禮謹請再拜、ホホホホ、これでも妾の寸志の手向け、玄眞坊の亡靈殿、安樂に成佛いたしたが大丈夫、一つどの金を手ぬらさず、ぼつたくつてやつた。サ、これさへあれば大丈夫、一つどつか景勝の地を選んで大建築をなし、人目を驚かし、ウラナイ教の本山を建て、三五教を根底から覆へし、ミロクの太柱の名聲を天下に輝かしませう。てもさても都合の好い時には都合の好いものだなア』

とホクソ笑んでゐる。障子の外から破鐘のやうな聲で、

空「ワツハハウツフフ天晴れ天晴れ、千草の高姫のお腕前は空助たしかに見届けたぞや」

千草の高姫は空助の聲に打ち驚き、日頃戀ひしたふ空助様がこの宿に泊つてござつたか。おお恥づかしや、白粉も付けねばならうまい、紅もささねばなるまい、髪も結ひ直し、身繕ひせにやらぬと、

「モシモシ空助さま、お察しの通り千草の高姫でございます。どうぞ少時ここを開けないやうにして下さいませ。ちよつと身だしなみをして、それからお目にか

かりますから」

妖幻坊の空助はワザとに、すねたやうな口吻で、

「あ、左様でござるか、會つてやらぬと仰有れば、たつて會つてもらひたいとは思はぬ。さよなら。拙者は曲輪城へ雲に乗り立ち歸るでござらう」

千「モシ、空助さま、お情けない、こがれ慕うてゐる女房を一目も見ずに、捨てて歸らうとは餘りぢやございませぬか。あなたに別れて此の方、寢ても醒めても會ひたい會ひたいと思ひ暮してをりました。何卒ただ今の御不禮はお許し下さいまして、一目會うて下さいませ」

妖「左様ならば、御免を蒙つて、久振りで高チヤンの綺麗なお面を拜見しやうかな」

と言ひながら、二階の床をメキメキはせながら無雑作に障子を引開け、ノソリノソリと入り來たり、千草の前にドツカと座を占め、どんぐり眼を剥き出して、ニコニコ笑ひながら、

「ヤア、高チヤン、よほど若くなつたぢやないか、高宮姫時代とはまだ三つも四

つも若く見えるよ、まづまづ壯健でお目出たう」

「モシ、空助さま、あなた何處をどううるついてみらつしやつたの。私どれだけ尋ねてゐたか知れませぬよ。今年で三年ばかり會はぬじやありませんか」

「俺だとしてお前の在處を捜し求めて、こんな所までやつて來たのだ。ウラナイの神様のお蔭に依つて、計らずもこの宿屋でお前に遇うたのは何よりの仕合せ。ヤ、俺も嬉しい、サ、今夜はシツポリと昔語でもして休まうぢやないか」

「こんな嬉しいことはメツタにございませぬ。あなた何がお好きでございましたいな、何か差上げたいと存じますが……」

「ヤ、俺は別に何が好きといふ事もない。好きなのはお前の面ばかりだよ、アツハハハハ」

「さうさう貴方は、一番好きなのは私の面、一番嫌ひなのは犬だと仰いましたね」
「コーリヤ、高宮姫、モウ犬のことは言つてくれな。實のところは入江の里までやつて來たところ、澤山な犬に吠えつかれ、氣分が悪くてたまらず、今日で三日ばかりこの宿屋に泊つてゐるのだ。お前は裏の座敷で、何かいい男を喰ひ込んで

をつたやうだが、それを思ふと、何だか妬けて仕方がないワ

「ホホホホ、彼奴ア、オーラ山といふ山に砦を構へて、泥棒の張本人をやつてゐた玄眞坊といふ賣僧ですよ。彼奴が懐に澤山な金を持つてると知り、甘く言ひくめるめてこの宿屋へ連れ込み、ウマウマと三萬兩をフン奪つてやつたのです。戀の色のと誰があんな禿蝟土瓶に相手になるものですか、よう考へて下さいナ」

「そらさうだらう、空チャンといふ色男を夫に持ちながら、あのやうなヒヨツトコに相手になるお前ではない……とは承知してゐるものの、三年も別れてゐると、心がひがんで妙な氣になるものだ。ヤ、無實の罪をお前に着せて濟まなかつた、これこの通りだ」

と兩手を合せて床に頭をすりつける。千草姫は、

「モシ空チャン、厭ですよ、擲揄も可い加減にしておいて下さい。私、あなたの仕打ちがあまり水臭くつて憎らしいワ」

「いくらお前が憎らしいといつても繋る縁ぢや仕方がないワ。俺も惚れた弱味で、お前にや百歩を譲らざるを得ないワ、ハハハハ。男といふ奴、女にかけたら脆い

ものだワ、アハハハ」

「ヨウマア憎たらしい、そんな冗談が言へますこと。私や却つて恨めしうござい
ます。サ、久振りで今晩はゆつくり寝まうぢやございませぬか」

「お前は第一靈國の天人、底津岩根の大ミロクさまの靈で八十四日間月經がある
と言ふぢやないか、一緒に寝るこた、眞平御免を蒙つておかうかい」

「エー憎たらしい、あなたはあの賣僧坊主との話をどつからか聞いてゐらつしや
つたのでせう。腹の悪い方ですね、何處で聞いてゐたのです」

「ウン、雪隠の中で、……ウン、イヤイヤ雪隠へ行かうと思つて一寸横を通つた
ところ、あまりお前によつた聲がするので、立ち聞をする、そんな事を言つ
てゐたよ。ヨモヤお前とは氣が付かぬものだから、自分の居間へ返つて……あん
な美人があつたらなアと羨望に堪へなかつたのだ。まアまアお前で結構だつた」
「月經なんかあらしませぬよ、安心して寝んで下さいな」
「ヨーシ、面白い。そんなら久振りで高チヤンの、お寝間の伽でもさして頂きま
せうか」

千草姫はプリンと背を向け、

「知りませぬ、勝手になさいませ」

と子供のやうなスタイルで稍すね氣味になつてゐる。猛犬の聲はワンワンワンと四方八方より聞こえ來たる。

(大正一五・二・一 舊一四・一二・一九 於月光閣 松村眞澄録)

第二〇章 困客(一八〇九)

瑞魂の大神が 勅命を畏みフサの國

ウブスナ山の靈場ゆ 月の神國に蟠まる

大黒主の惡身魂 言向和し天國の

神園に救ひ助けむと 照國別の宣傳使

一行四人は河鹿山 烈しき風に吹かれつつ
 祠の森や山口や 怪しの森を乗り越えて
 あなたは彼方こなたと駆けめぐり 神の誠の御教を
 くにびとたち 國人達に宣り傳へ 病めるを癒し貧しきを
 救ひ助けて今ここに 百の神業仕へつつ
 トルマン國の危難をば 救ひて此所まで來たりけり
 ああ惟神々々 神の身魂の幸はひて
 吾等が使命を詳細に 遂げさせ玉へと願ぎ奉る
 大日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも
 たとへ大地は沈むとも 曲津の神は猛ぶとも
 誠の神の御力 吾が身に浴びし其上は
 如何なる曲も恐れむや 進めや進めいざ進め
 吾等は神の子神の宮 虎狼や獅子熊や
 鬼や大蛇の曲神が 如何ほど猛り狂ふとも

何か恐れむ敷島の

大和男子の宣傳使

勝利の都に至るまで

いつかな怯まぬ雄心の

大和心を振り起し

進みて行かむ大野原

地獄は忽ち天國と

吾が言靈に宣直し

上は王侯貴人より

下旃陀羅に至るまで

神の救ひの手を伸べて

一蓮托生救ひ上げ

瑞の靈の神力を

現はしまつる吾が使命

遂げさせ玉へ惟神

皇大神の御前に

畏み畏み願ぎ奉る

三千世界の梅の花

一度に開く神の國

開いて散りて實を結ぶ

日の大神や月の神

大地を守らす荒金の

司とゐます瑞魂

神素盞鳴の大神の

深き恵みは忘れまじ

尊き勳功は忘れまじ

進めよ進めいざ進め

悪魔の砦に立向かひ

攝受せつじゆの劍つるぎを拔ぬき持もちて

言こと向むけ和やはすは案あんの内うち

アア勇いさましや勇いさましや

神かみの使しめい命めいを身みに受うけし

名なさへ尊たふとき宣せん傳でん使し

到いたる所ところに敵てきはなし

バラモン教けうやウラル教けう

如何いかほど刃は向むかひ來きたるとも

皇すめ大神おほかみの賜たまひてし

嚴いづ言こと靈たまの光ひかりにて

暗夜やみよを照てらし神しん德とくを

月つきの御みくに國くにに輝かがかし

照てらさにやおかぬ吾わが使しめい命めい

守まもらせ玉たまへと願ねぎ奉まつる

ああ惟かむ神な々々ながらかむながら

靈みたま幸さちはへましませよ

別わけの三さん人にんであつた。

かく歌うたひながら入いり江えの村むら近ちかき田たん圃ぼ道みちまで、やつて來きたのは照てる國くに別わけ、照てる公こう、梅うめ公こう

照てる公こう「モシ、先せん生せい、モウ日ひも暮くれ近ちかくなりましたが今こん晚ばんは入いり江えの村むらで宿やどをとり、

緩ゆつくり休きう息そくを致いたしまして、明みやう日にちは船ふねでスガの港みなとへ行ゆかうぢやありませぬか

照てる國くに「なるほど、大だい分ぶんに疲つかれたやうだ、まづ此こ所こで一いっ服ぶくしやう。モウあの村むらへは

遠くはあるまいから」

梅公「先生、今晚は是非入江村で泊りませう。濱屋といふ景色よい宿屋がござい
ますから是非そこへ泊つて、明日スガの港に着く事に致しませう。スガの港には
アリスといふ薬屋の長者がおりまして、その息子にはイルク、娘にはダリヤ姫と
いふ熱心な三五教の信者がおります。キツと待つてゐるに違ひありませんから」
照國「さうだ、梅公別さまは一度お泊りになつた事があるさうだから、心安くて
よからう」

照公「四方八方の景色を遠く見渡せば
コバルト色に遠山かすめり」

照國「薄墨にぼかしたやうな山影は
スガの里なる高山ならむ」

梅公うめこう「夏草なつぐさの生おひ茂しげりたる廣野原ひろのはら

進すすみ行く身みの樂たのしくもあるかな

今日けふの日ひも早はや暮くれむとす草枕くさまくし

旅たびの疲つかれを宿やどに癒いやさむ

三人さんにんが休やすんでゐる後うしろの草くさの中なかから何なんだか、ウンウンと呻うなり聲こゑが聞きこえて來くる。

梅公別うめこうわけは耳敏みみざとくもこれこれを聞きき、ツカツカと叢くさむらの中なかの呻うめき聲こゑを尋たづねて近ちかづき見みれば、醜みにくい賤いやしい面つらをした坊主ぼうずが一人半死ひとりはんしはんしやう半生はんしやうの態ていで倒たふれてゐる。梅公別うめこうわけは直すぐさま天あま

の數歌かずうたを奏上そつじやうするや、倒たふれ人ひとはムクムクと起おき上あがり、

「どなたか知しりませぬが、よくまア助たすけて下くださいました。拙僧せつそうはバラモン教けうの修しゆ

驗者げんじやで天真坊てんしんぼうと申まをします」

梅公別うめこうわけは、どこか見覺みおぼえのある顔かほだなア……とよくよく念入ねんいりに調しらべて見みると、

「オーラ山さんに立籠たてこもつて大望たいまうを企たくらんでゐた妖僧えうそうの玄真坊げんしんぼうなることを知しり、

「やアお前は玄真坊げんしんぼうぢやないか、オーラ山さんで改心かいしんをすると言いひながら、再ふたび惡あくに

復つて三百の手下を引率れ、各地に押入強盗をやつてゐるといふ噂であつたが、天罰は恐ろしいものだ。何人に、お前は虐げられて、こんな所へ倒れてゐたのだ。察するところ持前のデレ根性を起し、女に一物を締めつけられ、息の根の止まつたのを幸ひ、かやうな淋しき原野に遺棄されたのだらう、さてもさても憐れな代物だな」

玄「これはこれは恐れ入りました。私はお察しの通り、女に鞆丸を締めつけられ、三萬兩の金をぼつたくらゐ、かやうな所へ、ほかされたものでございます。只今かぎり悪事は止めます。さうして女などには、キツと今後目をくれませぬから、どうぞ私をお荷物持ちにでも構ひませぬ、お伴に連れて行つて下さいませぬか」

梅「やア、俺にはお師匠様がある。俺一人の一了簡ではどうする事も出来ぬ。先づお師匠様の御意見を聞いた上のことにしやう」

照國別は最前から二人の問答を聞き終り様子を知つてゐるので、梅公別の言葉も待たず、

「ヤ、玄眞坊とやら、もはや日の暮にも近いから、緩りと宿屋にでも行つて話を

承らう。これから吾々は入江村の濱屋旅館に一泊するつもりだ。お前も一緒に行くかうぢやないか」

玄「へ、何と仰有います、濱屋旅館にお泊りでございますか。あの家はお客があまり澤山で、どさくつてみますから、少し景色は悪うございますが、玉屋といふ立派な宿屋がありますから、其處へお泊りになつては如何でございます。私もお伴をさせて頂きますから」

梅「や、一旦濱屋旅館と相談がきまつた上は是非とも濱屋へ行かう。吾々の精霊は已に濱屋に納まつてゐるのだから」

「そら、さうでございますが、ならうことなら待遇もよし、夜具も上等なり、家も新しくございますから、玉屋になさつたら如何でございますうかな」

「ハハハハハ、この男は十日ばかり濱屋旅館に泊つてゐたのだらう。越後獅子に小びどくこみ割られ、捕手にフン込まれた鬼門の場所だから、濱屋は厭だらう。や、それは無理もない。然し吾々がついてゐる以上は大丈夫だ。ソツと後ろから跟いて来い。お前の身柄は引受けてやるから、その代り、今までのやうな心では

いちにち 一日だつて安心に世を暮す事は出来ぬぞ。心の底から悔い改めるか、どうぢや」
「ハイ、生れ赤子になつてお仕へいたします。何とぞお助け下さいませ」
「ウン、ヨシ、先生、今かやうに申してゐますが、然しながら此奴の悪事は芝を被らねば直らない奴でございませが、私も何とかして、改心をさして遣りたうございませから、お伴をさせて下さいませ。梅公別が無調法のないやうに引受けますから」

照國「ともかく、二三日間連れて見やう。如何してもいかなけりや、突放すまでの事だ。さア日も暮れかつた、急いで行かう」

と又もや聲も涼しく宣傳歌を歌ひながら、入江村の濱屋をさして進み行く。

濱屋の表口にさしかかると客引の女が、二三人門口に立つて、

「もしお客さま、どちらにお出ででございます。明日の船の都合も宜しうござい

ますから此方にお泊り下さいませ。十分丁寧に、待遇も致しますから。さうして、

加減のいい潮湯も沸いてゐますから、どうぞ當家でお泊りを願ひます」

梅「ヤ、お前がさう言はなくても、此方の方からお世話になりたいと思つて来た

のだ。一行四人だ、よい居間があるかな」

女「ハイ、裏に離棟がございました、そのお座敷からはハルの海の鏡が居ながらに見えます。何なら二三日御逗留下さいませれば、眞帆片帆の行き交ふ景色は、まるで胡蝶が春の野邊に飛び交ふやうでございます」

梅「もし先生、さアお這入り下さい」

照國「そんなら御免蒙らうか」

と先に立つて繩暖簾をくぐる。玄眞坊はビクビク慄ひながら、照國別の後ろになり小さくなつて跟いて行く。次に照公、梅公別は亭主や下女に愛嬌を振り撒きながら、奥の離棟に進み行く。

まづ入浴を済ませ夕食を終り、四人は浴衣がけになつて、團扇片手に罪のない話に耽つてゐると、表の二階の間に、なまめかしい聲が聞こえて来る。梅公別は不思議さうに首を傾け聞いてゐる。

照公「これ梅公別さま、何思案をしてゐるのだい。ありや何處の女が客と「ふざけ」てゐるのだい」

梅公うめこう「いや、どうも合點がてんのゆかぬ聲こゑだ。千草ちぐさの高姫たかひめぢやあるまいかな」

「へん、馬鹿ばかを言いふない、千草ちぐさの高姫たかひめが、こんな所ところへ泊とまるものか。彼奴あいつはきつと何處どこかの王城わうじやうへ忍しのび入り、又またもや刹帝利せつていりの后きさきに化ばけ込んでゐやがるだらう」

「ヤ、どうも怪あやしいぞ。一つ照公てるこう、お前まへ調べて見みてくれぬか」

玄眞坊げんしんぼうは小ちひさい聲こゑで、

「モシお三人さんにんさま、あの聲こゑは千草ちぐさの高姫たかひめに間違まちがひございませぬ。私わたしの鞆丸きんたまを締しめつけ、三萬兩さんまんりやうの金かねをぼつたくつた大惡人だいくにんでございます。どうぞ彼奴あいつをとつちめ、

三萬兩さんまんりやうを取とり返かへして下ください。さうすりや一萬兩いちまんりやうづつ、お前まへさま等たちに進上しんじやういたしまする」

梅うめ「馬鹿ばかを言いふな、吾々われわれは金かねなんか必要ひつえうはない。まして左守さもりの館やかたでぼつたくつた

金かねぢやないか」

玄げん「ハイ、お察さつしの通とほりでございます」

梅うめ「どうやら千草ちぐさの高姫たかひめの相客あひきゃくは人間にんげんぢやないらしいぞ。先生せんせい、これから私わたしが正しやう體たいを見届みとどけて來きます。何卒どうぞしばらく此處ここに待まつて居ゐて下くださいや」

照國「人さまの居間へ飛び込んで調べるといふ失禮な事はないぢやないか、そんな事せずとも自然に分つて来るよ」

かく話す時しも二階の障子をサツと開けて離れ座敷を覗いたのは千草の高姫であつた、梅公の顔と高姫の顔はピッタリと會つた。千草の高姫は梅公の顔をパツと見るより、戀しいやら怖ろしいやら、顔を眞蒼にしてピリピリと慄ふた。妖幻坊の空助は高姫の様子のみならず、不審を起し、

「オイ、高チヤン、お前は様子か變ぢやないか、何をオチオチしてゐるのだ」

千「空助さま、あれ御覽なさいませ、三五教の照國別、照公、梅公別の三宣傳使が離棟の居間に泊つてゐます。そして玄眞坊が横にゐますのを見れば、三萬兩の金を取り返すために、息をふきかへして來たものと思はれます」

空「やアそりや大變だ、三五教の奴と聞けば俺もチツと蟲が好かない、何とかしてお前と二人、此所を逃げ出さうぢやないか」

「空助さま、あなたも氣の弱いことを仰有いますな、齋苑の館で彼奴等を家來扱ひをしてをつただぢやありませんか。一つ貴方の大きな聲で唝鳴つて下されば、照

國別くにわけなどといふ【へぼ】せんでんし宣傳使は、一ひとたまりもなく逃にげ出だすぢやありませんか
「ウン、それもさうだが、今いま荒立あらだてては事ことが面倒めんどうになる。俺おれにも一ひとつの考かんがへがあるからのう」

「智謀ちぼう絶倫ぜつりんと聞きこえた貴方あなたの事ことですから、滅多めつたに如才じよさいはありますまい。それで何なにもかも貴方あなたにお任せまかせ致いたしておきます」

「ウン、今夜こんやの處置しよちは俺おれに任まかしておけ。俺おれに計略けいりやくがあるから、さア千草ちぐさの高姫たかひめ、此方こちうへおじや」

と言いひながら二階にかいの段梯子だんばしこをトントントンと下くだり、表おもてへ出でて番頭ばんとうに小判こばんを一いち枚握まいにぎらせ、

空もく「一寸月ちよつとつきを賞しやうして半時はんときばかり経たてば歸かへつて來くるから、表戸おもてど開あけておいてくれよ
と、うまく誤魔化ごまくわし高姫たかひめと共に濱邊はまべに驅かけ出だし、一艘いっさうの舟ふねを盗ぬすんで一生懸命いっしやうけんめいにハルの湖うみの波なみを分わけてスガの港みなとへ向むけ漕こいで行く。

照國別てるくにわけの一行いっかうは一夜いちやを此所ここに明あかし、あくる日ひの朝早あさはやくより一艘いっさうの船ふねを逃あつらへ、これまたスガの港みなとをさして進すすみ行く事こととなつた。ああ惟神靈かむながらたま幸倍ちはへ坐世ませ。

(大正一五・二・一 舊一四・一二・一九 於月光閣 北村隆光録)

(昭和一〇・六・二四 王仁校正)

)} } } } } } }

靈界物語 第七一卷 山河草木 戌の巻

終り